

# 建築と社会

Architecture and Society

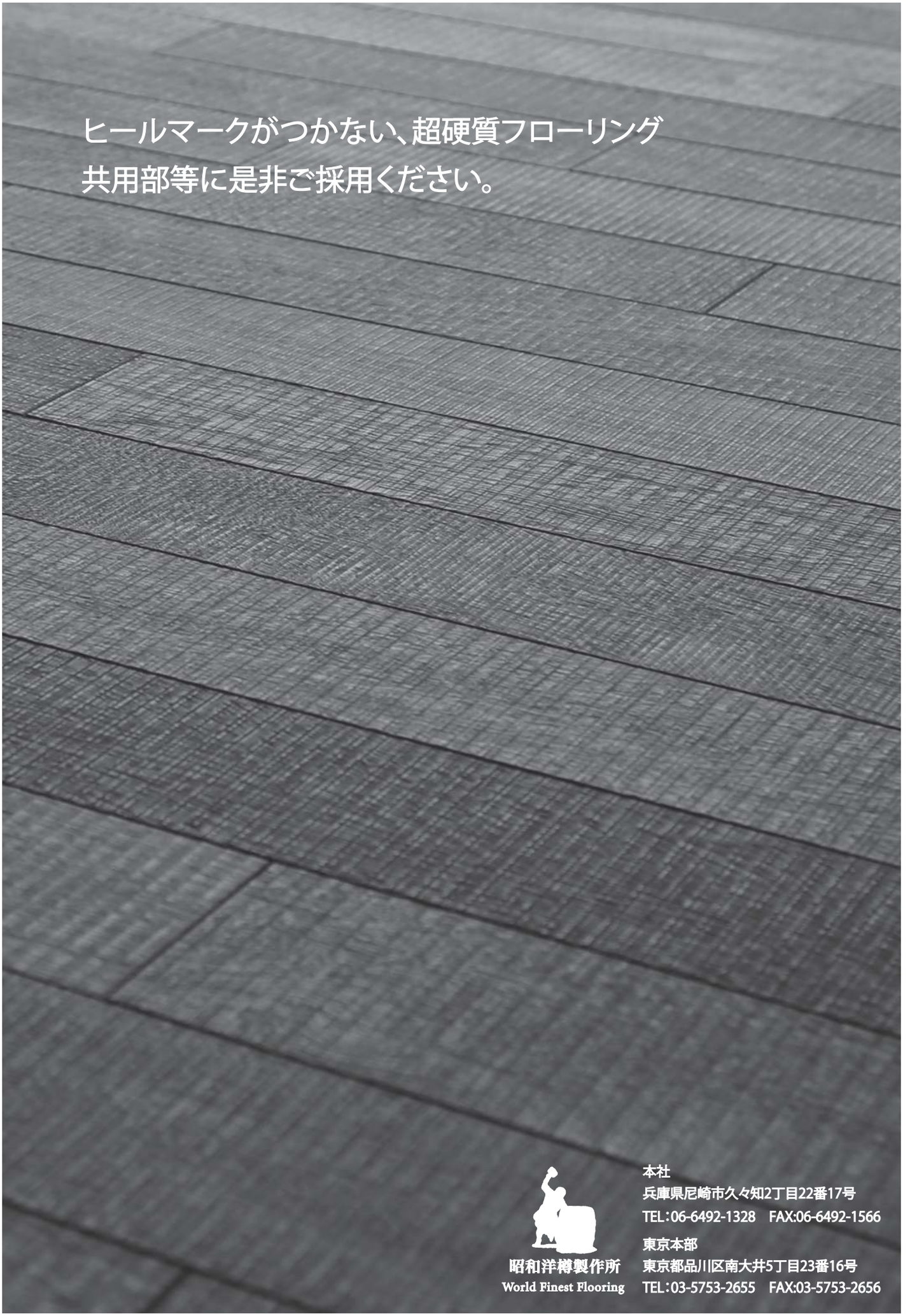
03
2017

No.1140
Vol. 98

日本建築協会

特集
日本の「建築と社会を繋ぐ」
プロジェクト100

建100
since 1917.03.30
日本建築協会は創立100周年を迎えます




昭和洋樽製作所
World Finest Flooring

本社
兵庫県尼崎市久々知2丁目22番17号
TEL：06-6492-1328　FAX:06-6492-1566

東京本部
東京都品川区南大井5丁目23番16号
TEL：03-5753-2655　FAX:03-5753-2656

# 若き創造者たちへ

## 「第64回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。
今年も、青年技術者選考委員会を設けて、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。
選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

### 応募提出規定

1. 応募できる人は満35歳（平成29年３月30日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。
2. 原則として、すいせん者を併記する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。
3. 応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。
4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。
5. 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第64回青年技術者特集号」（平成29年６月号予定）に掲載する。
6. **提出資料**

**■応募用紙**

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードして下さい。

**■略歴**

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

**■選考資料**

**A：業績資料（A3版5枚以内／書式は任意）**

① 設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料
② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料
③ 上記以外の分野の場合――それぞれの分野にふさわしい資料

**B：青年技術者の思い（A4版2枚以内／書式は任意）**

上記業績資料に記載した業績において、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明をしてください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望等について簡潔にまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限ります。**この資料は、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えていますので、十分配慮をして下さい。**

7. **提出期限**　平成29年３月31日（金）
8. **提出先**　（一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
電話 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp
9. **提出方法**　郵送（当日消印有効）または持参
10. **青年技術者選考委員会（予定）**

委員長　勝山　太郎／㈱日建設計設計部門理事副代表設計部長
委　員　岸田　文夫／㈱竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）
佐々木　栄／㈱昭和設計執行役員設計推進室室長
長尾　健／長尾健建築研究所代表
吉岡　聡司／大阪大学大学院キャンパスデザイン室准教授
金尾　伊織／京都工芸繊維大学デザイン・建築学系准教授
山浦　晋弘／㈱安井建築設計事務所構造部長
井村　隆／清水建設㈱関西支店設備設計部副部長
小倉　良友／㈱日建設計エンジニアリング部門
設備設計グループ理事副代表設備設計部長
釼吉　敬／㈱大林組大阪本店建築事業部生産技術部長
山辻　直樹／大成建設㈱関西支店建築部購買管理室課長

会告

日本建築協会　創立100周年

# 記念事業・記念式典・祝賀会のご案内

日本建築協会は2017（平成29）年３月30日に創立100周年を迎えます。
創立から100年という記念すべき年にあたり、これを意義深いものとするため、３点の「記念誌」を発行するとともに「記念事業」を開催いたしますのでご案内申し上げます。
当日は「100周年記念式典」をはじめ様々な催しを企画しており、事前申し込みが必要ですので、ご希望の方は下記の宛先へメール、ファックスなどでお申込みください。

記

**公会堂見学会・記念式典・表彰式・記念講演会・祝賀会・記念パネルディスカッション**

**2017（平成29）年３月30日（木）11：00〜20：15（予定）**

於　大阪市中央公会堂　大阪市北区中之島１丁目１番27号

**１．公会堂見学会　11：00〜**
＜事前申込制＞定員60名（先着順）

定員に達しました

講師と共に内部から地下の免震部分まで見学します。

**２．100周年記念式典・表彰式**
**13：00〜**
＜ご招待者の他　自由観覧＞

会　場　大集会室
開会の辞
式　辞　日本建築協会会長
祝　辞
表彰式　創立100周年記念表彰

**３．記念講演会　14：45〜**
＜事前申込制＞定員1,000名**(先着順)**
会　場　大集会室
講　師　槇　文彦氏
（建築家）
聞き手　倉方俊輔氏
（建築史家）

**４．祝賀会　16：15〜**
＜参加費　5,000円　事前申込制＞
定員300名（予定）
会　場　中集会室
ビュッフェスタイルの立食パーティです。**※祝賀会のみ有料の催しです。ご注意ください！**

**５．記念パネルディスカッション**
**「Architecture & Society／Architect in Society」18：30〜**
＜事前申込制＞定員1,000名**(先着順)**
会　場　大集会室
ゲスト　澤 秀俊（建築家 Vo Trong Nghia Architects/ベトナム）
小室 舞（建築家 Herzog & de Meuron/香港）
森山 茜（テキスタイルデザイナー Studio Akane Moriyama/ストックホルム）
吉村有司（建築家 laboratory urban DECODE/バルセロナ）
海外で活躍するU-35世代とともに、「建築と社会」の未来を考える

＜申込書＞
参加されるところにチェック✔を入れ必要事項を明記の上、FAX（06-6946-6984）またはメールにてお申し込みください。

| 内　　容 | チェック | ふりがな |
|---|---|---|
| ~~1. 公会堂見学会~~ | | 御名前　　□会員　□非会員（一般） |
| 2. 記念式典・表彰式 | | ご勤務先 |
| 3. 記念講演会 | | ご住所　〒 |
| 4. 祝賀会　※有料5,000円 | | TEL　　FAX |
| 5. 記念パネルディスカッション | | E-mail　　@ |

＜振込先＞・口座名義　一般社団法人　日本建築協会　シャ）ニホンケンチクキョウカイ
・郵便振替口座　00910-9-39975　・三菱東京UFJ銀行　瓦町支店（普通No,210054）
・りそな銀行　北浜支店（普通No,272234）　・三井住友銀行　大阪中央支店（普通No,860034）

祝賀会参加ご希望の方は３月24日（金）までにお申し込みの上、会費のお振込みをお願いいたします。当日プログラムへのお名前の記載はありません。
＜お問い合わせ＞（一社）日本建築協会　TEL：06-6946-6981　メール　soumu@aaj.or.jp

# 建築と社会

Architecture and Society

03 No. 1140

2017 Vol. 98


特集予告

04月号：東海支部特集

05月号：建築設備の伝統と革新（仮題）

今月の表紙

宇治上神社 （平安時代後期）



宇治川の流域にある神社。その本殿は平安時代後期のもので、神社建築としては最古のものである。
正面の格子が素朴で美しく、屋根と格子でファサードデザインをかたちづくっている。
本殿の中にはさらに３棟の建築が並んでおり、それぞれに神が祀られている。そして中の建築の構造が、本殿本体にも連動しており、正面のファサードにリズムを与えている。
小高い場所に建てられた本殿を、参拝者は仰ぎ見ることになるが、そのときに本殿背後の木々と空を目にする。建築とそれらがあわさって聖域を形づくっている。シンプルにして豊饒。

（多田正治）


表紙写真 山羊 昇
企画・編集 多田正治


## 特集：日本の「建築と社会を繋ぐ」プロジェクト100

目次


【総論】

建築と社会の100年から〜続 クライアント・エンパワーメント時代の建築〜 | 倉方俊輔 10

【地図】

日本の「建築と社会を繋ぐ」プロジェクト100一覧 14

【ルポ】

1 美術館を核にした現代アートによるまちづくりプロジェクト「Arts Towada」の取り組みについて | 三谷帯介・佐藤達保・本田隆作 16
2 「失われた街」模型復元プロジェクト | 槻橋 修 20
3 アーツ前橋コンバージョンによる中心市街地活性化のモデル | 吉村英祐 22
4 「ごちゃまぜ」のまちづくりShare金沢 | 本田隆作 24
5 山梨文化会館100年計画―次の50年をめざして― | 吉村英祐 28
6 都市型実験集合住宅の現在―大阪ガスNEXT21の取り組み― | 槻尾輝雅 30
7 地域を変える企業の取り組み―銘建工業社長・中島浩一郎氏に聞く― | 岡田 健・戸川勝之 32
8 空き家再生等を通した過疎化が進む村・まちの活性化 | 田口太郎 36
9 くまもとアートポリスとUDで地域を支える | 田中直人 38
10 「奄美ミュージアム構想」から世界遺産をめざして | 田中直人 42

【座談会】

「建築と社会を繋ぐ」プロジェクトから見えてきたもの―現在・未来・人― | 岡田 健・勝山太郎・佐藤達保・田中直人・槻尾輝雅・戸川勝之・本田隆作・三谷帯介 48

【リスト】 54

連載

会告 第64回青年技術者顕彰のご案内 1
日本建築協会創立100周年 記念事業・記念式典・祝賀会のご案内 2

作品作風 アース製薬 モンダミン工場 4
キユーピー神戸工場 6

gallery 吉川の家 | 鈴木正憲 8

法令コーナー うめきた２期区域のまちづくり | 福永篤史 56

構造の頁 ネパール地震被災地の震災復旧現況 | 向井洋一 57

建築と社会を考える 御堂筋 メインストリートの現在・過去・未来 | 橋爪紳也 58

新製品レヴュー 1. 超硬質フローリング鋸目仕上 2. 地元県産材 杉 スプリット加工 3. 外部人工木デッキ Le・Bois（ル ボア） | 株式会社昭和洋樽製作所 62

information 戦国時代展―A CENTURY of DREAMS―／西宮の狩野派 勝部如春斎／特集展示 近代大阪と名望家／特別展 新宮 晋の宇宙船／「MOK2017」第22期生 募集要項 64

月間の動き 平成29年１月 66

日本建築協会創立100周年記念事業 賛助会員 99


モンダミン

# アース製薬　モンダミン工場

建　築　主　アース製薬株式会社
監　　修　東畑建築事務所
設計・監理　KAJIMA DESIGN
施　　工　鹿島建設関西支店

ＣＭでも御馴染みの「モンダミン」の新工場。
この新工場では、生産量の増強とともに生産の全ての工程において大幅な機械化・自動化を図った。
主な生産エリアは２階にあり、その工程は、調合・容器供給・充填・包装の順である。
この工程を経て完成した製品は自動ラインで１階の倉庫に運ばれ、保管・出荷となる。
このように、生産エリアと保管・出荷エリアを断面的に縦に積むことで、敷地の有効利用と動線の短縮化・効率化を図った。

また、この工場では消費者やバイヤーの為の見学エリアも計画した。
この見学エリアは安全性や管理面から、生産エリアと完全に分離させつつ、見学の分かりやすさに配慮して、順路は生産工程の順とした。

外観はモンダミンの爽快感を表す「白」をベースとし、それを際立たせる基壇の「黒」、そして商品イメージ色の「緑」をアクセントカラーとした。
見学通路はモンダミンの「泡・洗浄」をテーマとして、見学者の印象に残るインテリアとした。

（吉野博史・細田尚宏／鹿島建設）

所 在 地　兵庫県赤穂市西浜北町
敷地面積　131,979.41㎡
建築面積　　4,873.18㎡
延床面積　　11,567.51㎡
構造規模　S造　地上４階
工　　期　2015年11月～2016年11月
最 寄 駅　JR赤穂線　播州赤穂駅
撮　　影　写真通信



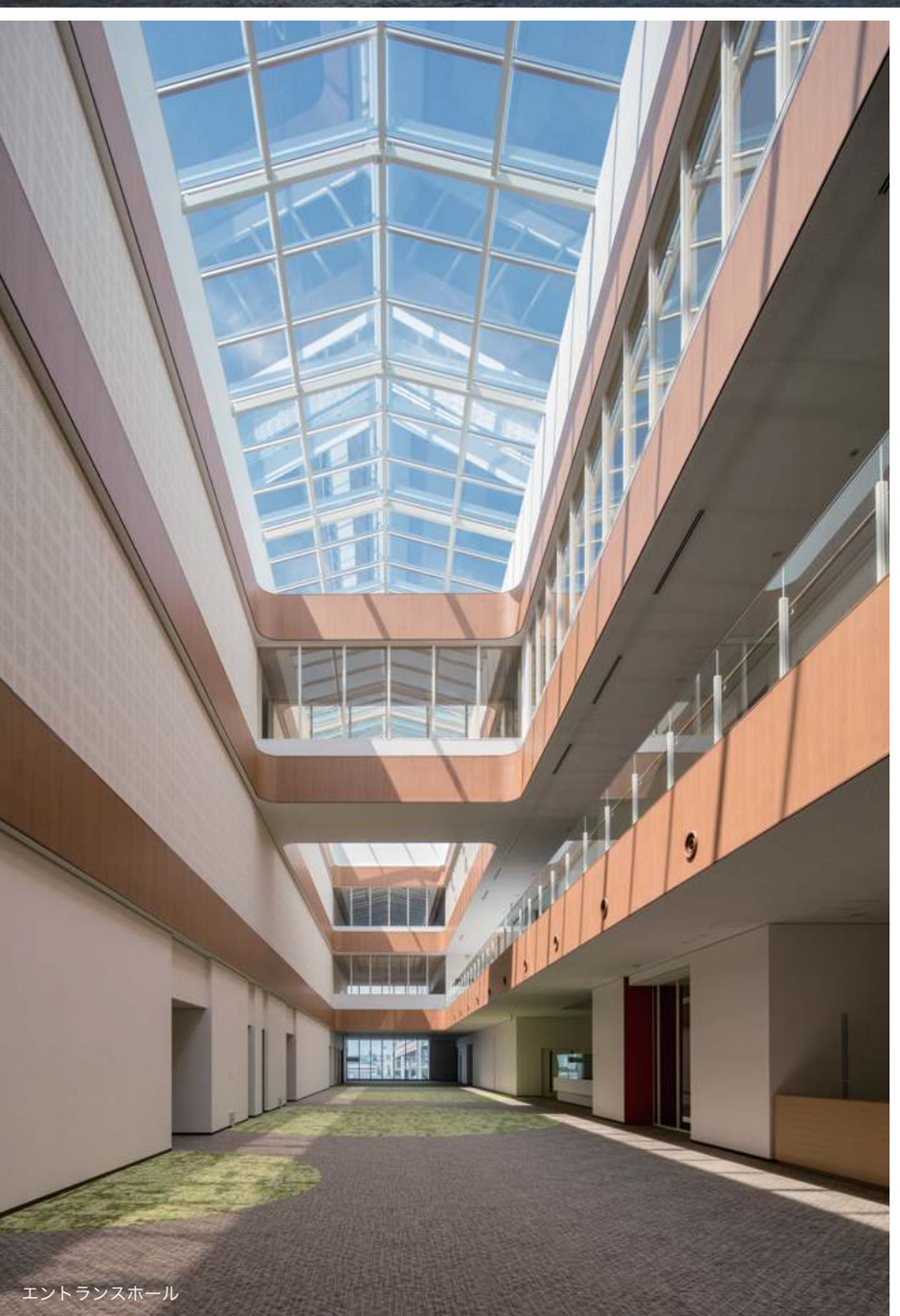


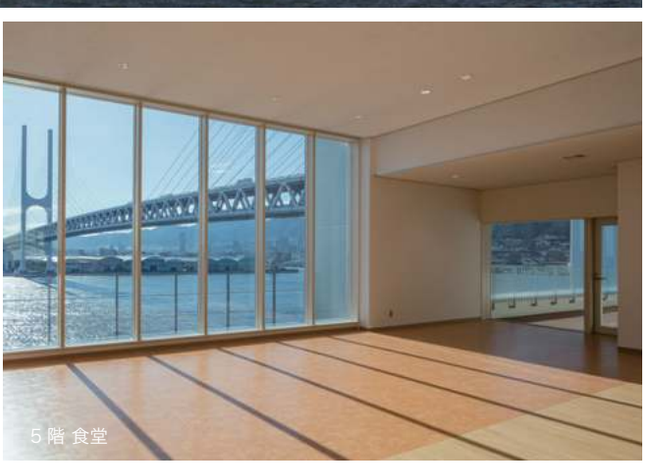






西側対岸より遠景


エントランスホール


５階 食堂


Ｍ５階 見学者廊下


Ｍ２階 マヨネーズライン見学者通路

# キユーピー神戸工場

建　築　主　キユーピー株式会社
設計・監理　竹中工務店
施　　工　竹中工務店

創業100周年記念事業の一環として計画され、マヨネーズ・ドレッシングなど主力商品の工場としては45年ぶりの建設となる新工場が完成した。

清潔で安全・安心感のある白を基調とした外壁には防虫や防汚、気密性を確保できる金属断熱サンドイッチパネルを採用。キユーピーカラーの赤や緑黄色野菜をイメージする緑・黄・オレンジ、神戸港の青、などのアクセントカラーを外観デザインに取り入れることで、ユニークで健康的なキユーピーらしさを表現している。

スマート免震柱脚による短工期免震工法や、空調・製造工程における排熱を熱源水にして再利用する熱融通システムなど、弊社独自の構造・設備技術を取り込んだ。ここで働く人々や来訪者が安心して滞在できる、人にも環境にもやさしい工場となった。

工場内には年間最大５万人を受け入れ可能な、食の楽しさを伝える新しいツアー型見学エリアを併設。従業員と見学者のコミュニケーションを誘発する３層吹き抜けのエントランスホールには大らかなトップライトを設け、従来の工場のイメージを一新する、明るく開放的な空間を実現した。

社会見学に訪れる子どもたちをはじめ、将来のキユーピーファンの獲得を目指す。

（坂本貴仁／竹中工務店）



アプローチ

所 在 地　神戸市東灘区深江浜町27-1他
敷地面積　64,042㎡
建築面積　 7,119㎡
延床面積　32,621㎡
構造規模　RC造・S造　新工場棟８階・塔屋１階　他付属建屋４棟
工　　期　2015年８月～2016年８月
最 寄 駅　阪神本線　深江駅
撮　　影　竹中工務店



エントランス外観

まち 建築 ひと

# gallery

## 吉川の家

建築家
鈴木 正憲





埼玉県吉川市に新たな住宅地として開発が進んでいる地区があり、敷地はその一角にある。

いわゆる北側接道敷地で採光に不安があるため、冬季にも屋内に陽が射し込む、明るくあたたかい家とすることを第一に考えた。また家具職人である建主は、キッチン家具を自身で制作する方針であったため、調理と食事をする場が中心となるような家が、こちらのご家族には合うのではないかと考えた。

この家を特徴づける、中２階に位置する屋根裏部屋のような空間は、リビングに隣接して設けたいと要望のあった畳スペースで、その使われ方から、リビングとは異なる落ち着きのある場を目指した。同時に、玄関先の雨雪を避けることや、軒の低い平入りの外観として街並み形成に寄与することも意図した。





鈴木 正憲（すずき まさのり）
1978年 千葉県生まれ
2001年 大阪市立大学卒業
2002年 建築環境研究所勤務
2007年 U建築企画設立

企画編集：菊池浩輔
（作品作風小委員会）

# 特集
# 日本の「建築と社会を繋ぐ」プロジェクト100

「建築を通じ広く社会に貢献する」という理念のもと、「建築と社会」誌は創刊当初より建築作品や建築技術の発表の場のみならず、言論を通じて社会的提言も行うオピニオン誌として発展してきました。ただ、協会創立時から現在に至る100年間において、建築と社会の関係は大きく変化しています。社会の高度な専門化・グローバル化・マーケットの多様化・中央と地方・少子高齢化…等々、建築を取り巻く環境が大きく変化する中で、建築が対象とする社会という定義も曖昧になり、かつ多様化しています。

その中で、現代の建築には一般解の提示だけでなく、それぞれのクライアント・地域が抱える課題解決や街のポテンシャルの再発見のために、様々な人との繋がりの中から場毎の個別解・最適解を生み出すことが求められています。

現在はどのような建築的取り組みが社会に訴求力を持ち、日本を支えているのかを探る中で、次の100年のあるべき建築と社会の関係を、ひいては日本建築協会の役割を、次世代を担う若手編集委員と共に考えました。

**【総論】**

建築と社会の100年から〜続 クライアント・エンパワーメント時代の建築〜／倉方俊輔

**【ルポ】**

1　美術館を核にした現代アートによるまちづくりプロジェクト「Arts Towada」の取り組みについて／三谷帯介・佐藤達保・本田隆作
2　「失われた街」模型復元プロジェクト／槻橋　修
3　アーツ前橋　コンバージョンによる中心市街地活性化のモデル／吉村英祐
4　「ごちゃまぜ」のまちづくり　Share 金沢／本田隆作
5　山梨文化会館100年計画―次の50年をめざして―／吉村英祐
6　都市型実験集合住宅の現在―大阪ガスNEXT21の取り組み―／槻尾輝雅
7　地域を変える企業の取り組み―銘建工業社長・中島浩一郎氏に聞く―／岡田　健・戸川勝之
8　空き家再生等を通した過疎化が進む村・まちの活性化／田口太郎
9　くまもとアートポリスとUDで地域を支える／田中直人
10　「奄美ミュージアム構想」から世界遺産をめざして／田中直人

**【座談会】**

「建築と社会を繋ぐ」プロジェクトから見えてきたもの－現在・未来・人－／
岡田　健・勝山太郎・佐藤達保・田中直人・槻尾輝雅・戸川勝之・本田隆作・三谷帯介

本特集企画担当特別編集委員

勝山太郎／日建設計　戸川勝之／安井建築設計事務所　大西広朗／東畑建築事務所　岡田　健／日建設計
佐藤達保／竹中工務店　瀧野敦夫／奈良女子大学　田中直人／島根大学大学院　槻尾輝雅／大林組　本田隆作／昭和設計
三谷帯介／鹿島建設　吉村英祐／大阪工業大学　米井　寛／東畑建築事務所　設楽貞樹／安井建築設計事務所

総　論

# 建築と社会の100年から

## ～続 クライアント・エンパワーメント時代の建築～

倉方俊輔

大阪市立大学大学院工学研究科
准教授

倉方俊輔

1971年東京都生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院修了。博士（工学）。西日本工業大学准教授などを経て、2011年から現職。日本近現代建築史の研究・批評・紹介の他、日本最大級の建築公開イベント「イケフェス大阪（生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪）」実行委員会委員、日本建築設計学会「建築設計」編集長などを務める。主な編著書に『東京レトロ建築さんぽ』（エクスナレッジ）、『吉祥寺ハモニカ横丁のつくり方』（彰国社）、『これからの建築士』（学芸出版社）、『伊東忠太建築資料集』（ゆまに書房）、『大阪建築 みる・あるく・かたる』（京阪神エルマガジン社）、『ドコノモン』（日経BP社）、『吉阪隆正とル・コルビュジエ』（王国社）などがある。

### 総論としてではなく

「建築と社会」100周年記念号の総論を任せていただいて光栄だ。初めに書いておかなければいけないのは、今回の特集は100周年記念号編集委員会のメンバーが長い時間をかけて準備した意欲的なもので、プロジェクトの選定などに私はタッチしていないことだ。

ページには「総論」とあるが、特集に込められた思想を表明するような文章ではない。ただ、冒頭に載るので、私見であったとしても、全体に関連する内容になるべきだとは考えた。そこで、原稿の提出を待っていただき、その他の文章がほぼ出来上がった段階で、執筆している。

特集で取り上げられている10のプロジェクトのうち、８つは過去に訪れたり、実施者に取材したりしたことがある。岡山と奄美の事例は初めて目にしたが、他は実感を持って読むことができる。そこで、まずはプロジェクトの話から始め、そこから一転して1917年の日本建築協会の創設時に戻り、今日までの100年間の社会と建築専門家の変遷を振り返った後に、今後の両者について論じてみたい。

### 「と」に始まる十和田市現代美術館

人口約６万人の青森県十和田市に2008年に開館した十和田市現代美術館は、「建築の力」という言葉を使いたくなった時、真っ先に思い浮かぶ事例の一つかもしれない。

実際に訪れると確かに、普通の地方都市には無い、新しい人の流れと自信が感じられる。四角い行政の建物が並び、近くに商店街が続くような日本全国の中心市街地が、これから一斉に活気を取り戻すとは思えない。言うまでもなく、そんな「ふるさと」の姿は歴史的に見れば、第二次世界大戦後の一瞬と呼べる時間にしか無かった。そうした後ろ向きの停滞を構成している地方都市と十和田は、少し違う。その起点に、建築がある。官庁街通りの周辺環境を受け止め、新たに付け加えられた四角、停滞した建物とは違う西沢立衛の建築だ。

この信念ある建築の背景に存在している、信念を持った市長をルポ１は記す。何となく「みんな」でできたのではない。易きに流れない「建築」と、顔の見える「クライアント」という「個」があり、両者が結びついて流れの起点が生まれた。

「建築」、そしてクライアントがいる「社会」。さらにルポ１が示しているのは、両者を接続する「と」の大事さだ。十和田市現代美術館の場合は幸運なことに、各地のアートプロジェクトをディレクションし、建築家との交流も深い、現・森美術館館長の南條史生が率いるナンジョウアンドアソシエイツ（現・エヌ・アンド・エー株式会社）が市長と接続し、プロジェクトの全体監修を行ったことで、市長の情熱が「建築」的なソリューションという出口まで導かれた。

なお、本稿で言う「建築」はただの建物や構築物ではない。それ以上の何かである。「建築と社会」と称した時、その「建築」は、単に過去の基準に沿って作られただけの建物や構築物ではない。「社会」も漠然としたお題目ではなく、社会システムの中で、ある機能を果たしている顔の見える人間、例えば「クライアント」などによって構成されたものだ。これが本稿の考え方である。1917年に日本建築協会が創設された時も同様だったろう。

ただし、両者が潜在的にあったとしても、「と」という接続詞がないと「建築と社会」にならない。ルポ１は、そのことを教えてくれる。そして、その「と」が脆弱なことも。十和田市の場合は幸いにも、建築に通じたアートのコンサルティング会社が仲を取り持った。しかし、このように常に「建築」が分かった接続者が現れるとは限らない。実態は、その逆に近いものかもしれない。「と」が「建築」の側も「社会」の側も幸せにするという認識に乏しいため、この立場は基盤が弱い。

2014年には十和田市市民交流プラザ、2015年には十和田市教育プラザが開館した。これらもプロポーザルコンペを通じて有名建築家が設計者に選ばれたものだ。建築界にとっては明るいニュースと言える。しかし、ルポ１でもほのめかされているように、実際に訪れた時には十和田市現代美術館とは異なって、優れた限研吾の作品、安藤忠雄らしい作品が一つ増えたという感想を抱くのはなぜだろう。これも「と」の問題かもしれない。建築家と社会の側のどちらかが強く見えた時には、両者の適切な交流が欠けている可能性がある。

## 10のプロジェクトの共通性

「建築の力」は何も有名建築家だけに備わったものではない。それをルポ２は教えてくれる。建築学生が具備している模型を作るという力を、東日本大震災で被災地に届けることで、住民たちの主体的な営みを賦活している。

建築と社会の幸せな出会いは、時を超えて価値を与える。ルポ５で扱われている山梨文化会館は1966年に竣工した。「個」の立った建築家と、顔の見えるクライアントとの出会いがなければ誕生しなかったものだ。今はそんな時代ではないと片付けるのは簡単だ。本当にそうだろうか。さらに100年維持するための改修は、長寿命化を可能にするテクノロジーの進歩や、地域の企業や都市が顔を持つことの必要性と優位性が高まった、現代らしい現象ではないだろうか。

ルポ３のアーツ前橋とルポ４のShare金沢は「場づくり」の取り組みと言える。Share金沢は佛子園の理事長である雄谷良成というクライアントの強い個性抜きには考えられない。「ごちゃまぜ」という平易な言葉で、子どもや高齢者、障害者を分けている壁をさらりと取り去る。昨今のリノベーション、コンバージョンが時代に適しているのは、この「ごちゃまぜ」状態を作りやすいからである。

見たことがあるという記憶は、後ろ向きの停滞を生むのではない。新築以上に、見慣れたものを再発見させ、新たに付け加えた要素に気付きやすくする。この点においては、通常「保存」と分類されるルポ５と変わりない。常時と非常時の境を超えて、住み手が自分たち自身の場を見つめ、主体的に行動させる点において、ルポ２に通じる。「場づくり」は空間のチューニングだ。そこに建築の専門性が関わる。設計の重要性は、ルポ４の五井建築研究所、ルポ３の水谷俊博＋水谷玲子の働きからも明らかだろう。

建築には竣工した瞬間にも判断可能な価値があるだろう。だが、それはすべてではない。工学的なサスティナビリティだけでなく、使い、内省し、試し、記憶の一部になるという人間の働きに関連して発生する価値が存在する。モダニズムが席巻した前世紀は、いったんそれを括弧に入れることで可能性を拡張し、再びそれを思い出していく過程だったと言える。

大都市のルポ６と農村のルポ８は、一見すると対照的ながら、共に竣工した瞬間だけではない時間の長さに強く関連する。前者のNEXT21は、竣工時は工学的なサスティナビリティの実験として評価されていた部分が大きかったように思う。20年が経過してさらに価値を増やしている。約５年間のフェーズごとに住み手を変え、実験を続けているためだ。竣工時の１回限りではなく何度も人工的な実験を続けること、その傍らで、時の経過と共に緑は育ち、近隣住民との関係も育まれて、人工物が自然に寄っていくこと。竣工時には予想できなかったほどにリノベーション、コンバージョンが親しみを持って理解されていった時代に、竣工時の設計の説得力はいっそう増加している。

ルポ８でも、新築ではない時間の「長さ」に価値が見出されている。農村の「空き家」は、単に土地の上の、ある部分が使われていないというのに止まらない。農村には生活の知恵や歴史、文化が編まれている。人が住まない「空き家」であるということは、張り巡らされていた網目にそこだけぽっかりと穴が空いているということである。穴が増えると、生態系のような全体が活力を失ってしまう。そこに住んで、空き家に明かりを灯すという行為は、ネットワークを活性化することにつながる。他方で、住む人の立場から捉えれば、農村の「空き家」を手に入れると、その土地の知恵や歴史や文化といった資源も一緒に付いてくることになる。時を経ないと生まれないものが、場には潜在している。それを見つめ、主体的に行動することで、地域という生態系の生死は変わってくる。そんな目には見えないけれど確かな存在を価値として捉える者が移住者であると、ルポは教える。

ルポ７は、建築が地域の環境的なネットワークに存在していることに改めて気付かせてくれる。顔の見える企業が木材という資源を活かし、生業を通じて地域も変えようとしている例だ。ルポ９でも、くまもとアートポリスが、かつてのような建築家の単体の作品という性格が強いものから、環境的な広がりを持ったムーヴメントへと変化している様子が捉えられている。ルポ10の「奄美ミュージアム構想」は、さらに広域であって、こうした広がりの中で、場や建築のチューニングが構想されるだろう将来を予感させる。広がりとは、地理的なものであり、人工だけでなく自然にも関係し、文化的なネットワークも含んだものである。

こうして駆け足ながら10のプロジェクトを追っていくと、「時間」のファクターが共通していることに気づく。過去の時間によって形成され、竣工後の時間と共に創造されていく、必ずしも目には見えない存在を捉えて、建築化している。

## 現在と違う「建築と社会」の初心

現在の「建築と社会」という会誌名になるのは、設立から３年の後だ。最初は「関西建築協会雑誌」だった。1919年に団体名を「日本建築家協会」に改め、翌年に会誌名も変わった。

それでも「社会」という単語は、設立当初から本会の中心にあったと言える。それはどのような意味で使われているだろうか。片岡安の「設立のこころざし」[1]の中で、「社会」という単語は２回、ここぞという場所に登場している。

約500字の文章は５つの段落で構成される。「我が関西建築協会は」に始まる最初の段落では、それが「建築技術家の覚醒」から生まれたと説く。

何からの覚醒か。明治維新以来、わが国の文物には「少しも確固たる基礎」がなく、「混沌たる状態」だった。そう描写して第二段落を終えて、第三段落の言葉は、確かに明晰だ。

「此の進展期に際し、社会を指導する大抱負の下に、我が国建築界の堅実なる発展を期し、科学的に組織ある文明的都市の建設を計るべき急要の時期なるを覚悟し〈後略〉」

「覚醒」し「覚悟」して、「社会」という単語は「科学」「組織」「文明」といった理知的な言葉に囲まれて登場する。

続く第四段落では、具体的な取り組みの対象として、従来の日本では一般的に問題にされてこなかった「都市建築の拘束改良、家屋政策、其の他文明的施設」などの「研究調査」を挙げ、「建築技術家」は「之を社会に発表し

て啓蒙の位置に立たんと期す」と記して、事業への協力を求める第五段落で筆を置く。

本会設立の志の中心は、「社会」に始まり「社会」に終わっている。それは文化的よりは「文明」的、「科学」的で「組織」的、物理的に効果を測れるような、基礎を有するものである。

片岡は「建築」と「社会」とを、いわば「と」でつないだ。「建築」は「社会」を指導し、牽引する。だから「社会」から存在を保証される。そんな風に両者が緊結されるのは、「建築」と「社会」を再定義したからだ。「建築」は「建築技術家」によって担われるべきであり、担われてきた。その性格を一層高めなければ、啓蒙の位置に立てない。「社会」は科学的に計ることができ、改良が可能だ。「建築技術家」はそのように把握でき、具体的に操作できる存在だというように。

片岡は鋭い。「建築」と「社会」を《機能》面から再定義して取り結び、その関係性を担える独占者としての建築専門家像を明確に打ち出して、その地位を安泰にしようと志したから。ここには意匠と構造の対立も、学と術との緊張関係も無い。自分たちの利益を考えればしごく真っ当と言える専門家としての大同団結は、普遍性を装った短期間の流行争いに左右されない、東京を離れた「普通」の場所である関西だから可能になったのかもしれない。

本会はこうした個人の意思が明確に埋め込まれて誕生した。何となく、みんなのサロンとして生まれたわけではないのだ。

## 物語の明治、意匠の大正

片岡の目は、大正期にありながら「昭和」を捉えていた。以後、括弧を付けて記すのは、厳密にその元号の時期というよりは、「〜的なもの」だ。現在までの流れを、単純化して見ていこう。

「明治」とは何か。彼が恩師である辰野金吾のパートナーとして、大阪に辰野片岡建築事務所を設立したのは1905年、わずか29歳の時だった。東京帝国大学に入学し、辰野に出会った10代から学び、身体化していた「明治」とは、建築専門家の一番の役割が《物語》を与えることだった時代だ。依頼された建物の用途や立地、クライアントの性格に即して、一貫性を持った「様式」というストーリーを形態を通じて付与することが社会の中での役割であり、存在根拠だった。

ポイントは《物語》は西洋文明に由来するものでなくてはならなかったことだ。開国以降、社会の上層部に入ったこの新たな前提によって、江戸時代からの大工職人の意匠や技術は独占領域を失い、それに代わって辰野を初代とする、国が作った学校で学んだ建築専門家たちが現れた。俯瞰すれば「西洋文明の中にある近代日本」という大きな物語のために養成されたわけだが、《物語》である以上、その仕事として物語られた形態は、後の時代と比べても、各々に自律したストーリー性が高いことは注意する必要があるだろう。

建築専門家はそれぞれのクライアントに向き合い、形態を通じて、クライアントである個人や企業や都市に、西洋文明の中の日本人であるという自信を与える。様式主義建築が今も、特に建築専門家ではない多くの市民にとって魅力的なのは、この説得力ある個別性ゆえだ。

最終的に持続する形態を生むための設計技術も施工技術も新たな建築専門家が独占していたから、こうした建築の「力」を与える側と、与えられる「社会」との関係は明確だった。その力の源泉は西洋文明であり、それを取り入れる使命の下で、意匠や構造などの分野はあえて大同団結を言わずとも統合されていた時代が「明治」だった。

では「大正」はどんな時代だっただろうか。「明治」を建築界において正しく担った辰野の下で、その実利主義を補佐していた片岡は、その訪れも感じていたと思われる。

「確か設楽さんのとこでやられた北浜の有澤眼科を覚えています。それで東京より大阪の方が自由だなあという印象を受けたんです。それも大阪に来た理由の一つです」。本会発足の翌年、1918年に安井武雄の下で働き始めた頃の大阪を、晩年に村野藤吾はこう振り返っている[2)]。触れているのは、設楽貞雄の設計で1914年に竣工した有澤眼科医院だ。壁面構成をセセッション風に幾何学化し、玄関には日本建築の破風、塔屋は八角堂をアレンジした意匠で、確かに自由を感じさせる。

建築専門家は形態の設計を通じて、クライアントに向き合う存在である。だとしたら、設計者の新しいものを作りたいという思いと、クライアントの新しいものを求める気持ちが合致すれば、過去の取り決めを逸脱した形態でも構わない。そんな風に道理により即した大阪で、新しい《意匠》を与える者としての建築専門家像が生まれたとしても不思議はない。それが現在から俯瞰すれば、モダニズムという新たな普遍性への過渡期であり、西洋の追随と総括できたとしても、個々の建築における、内発的であることが社会的になりうるという輝きは今もまぶしい。

「進歩」の方向性が当時は分かっていなかったから、ここでもやはり建築専門家は「社会」をリードする存在ではある。ただし、その依って立つのが《意匠》だということは、「明治」のように大きな物語に乗ってはいない自由さと表裏一体の個人への分化と、構造などの分野との分化という脆弱さも生まざるを得ない。そして、個人化、分業化、あるいは鉄骨造や鉄筋コンクリート造といった新たな構造の日本への導入といった事柄は、建築専門家以外にも共通した時代の流れであるから、「建築」が「社会」から影響をより強く受ける時代に入ったのが「大正」だと言える。

## 片岡安に捉えられた機能の昭和

以上に述べてきたような大正時代までの状況を熟知した片岡は、「建築」の意義を《機能》として捉え直した。こうした新たな定義を通じて、専門分化が進む建築専門家を再び一つにし、「建築」が「社会」を指導する立場の堅持を図ったのだと言える。

「設立のこころざし」の中で、明治時代は「確固たる基礎」の無い時代と形容されていた。辰野金吾と共に形態の《物語》を通じてクライアントに「権威」を与えることによって近代社会の建設の真っ只中にいた片岡だが、その源泉が過去の西洋文明にあるだけだとしたら建築専門家の地位はおぼつかないと認識していたのだ。

設立目的に「都市建築の拘束改良、家屋政策、其の他文明的施設」の「研究調査」が挙げられていた。これは「大正」の《意匠》が、ますます多様なクライアントが出現し始めた

都市と、単に生活と遊離した西洋文明の《物語》の器というだけでなくなった家屋という主題に由来していることに対応している。

だが、片岡は「研究調査」という「昭和」らしいフレーズでそれに応えた。そんな時代の変化に単に、西洋の最新手法からインスピレーションを得た自分のセンスで個別に対応するだけでは、やはり建築専門家の地位は脆弱だからである。都市の中の建築をどうするかも、住まいの検討も、施設が文明的だと認識されるかどうかも詰まる所、ファンクションの問題である。彼の名付けた「建築技術家」とは「建築」も「社会」も《機能》に基礎付けていることを認識し、「建築」によって「社会」を指導する建築専門家すべてのことである。

このように本会に埋め込まれた思想は、昭和時代に全盛期を迎えた。「建築の力」が「明治」のように一定した《物語》に根ざした「権威」の形態化でも、「大正」のように変容する《意匠》による「流行」の形態化でもなく、前進する《機能》に基づいた「進歩」の形態化によって発揮された時代である。《物語》や《意匠》とは異なり、《機能》は計量化できるものなので、その増大の方向にしたがって「進歩」という概念が建築に適合するようになる。「進歩」は一定の方向に向かうものだから、個性化よりも組織化と相性が良い。個々のクライアントに向き合って形態を与える姿勢が、少なくとも表面上、最も読み取りづらいのが「昭和」の建築だが、それにも納得だ。社会の組織化によって発展した企業や公共機関は、かつてのような顔を持ちづらい。クライアントが組織化したことも原因である。

設計や施工の会社の組織化も進んだが、個人名が急に失われたわけではない。むしろ1950〜70年代に個人としての建築家に最も活躍の場が与えられたのはなぜだろう。クライアントの没個性化と一部の建築家の個性化という組み合わせは、技術の進展、それが様式主義の崩壊によって建築界に直接に流入できるようになったこと、そして技術の進展が情報流通の大衆化にまで至る以前だったという主に３つの要因から、建築専門家が「力」を与える側でいられたことに由来する「昭和」らしい特徴だ。

施工会社も組織事務所も個人名の建築家も、意匠・構造・環境工学・都市計画などの実践者も研究者も、いわば《機能》に基礎付けられた「建築技術家」としてさまざまな専門団体に所属した。片岡が見通した通りに「昭和」は進展した。

## 物語の現在

やがて《機能》に基礎付けられた「進歩」概念が前提となった組織化、という流れが一般的でなくなる「平成」が現れる。このポストモダニズム以降の流れを元号で総括するのは苦しいが、本稿では単純化のためにこう呼びたい。さまざまな「意匠」が復活して工夫される様子は一見、建築家に力がもたらされたかのようだ。しかし、それらはクライアントの求めに由来し、ユーザーの選択を待っている。

今から100年前に片岡が本会を設立した時に目指した「建築」と「社会」の関係は、前者が後者を指導し、啓蒙するというものだった。そのために建築専門家の大同団結を訴えた。それは時代が進むにつれ、「社会」の側に決定権が移り、建築に携わる者が分化していくという一般的傾向に抗ったものだった。もちろん、それは単なる反抗ではない。社会を調査し、指導するという関係性は、「明治」や「大正」に比べれば、両者が交流しているとは言える。建築内の専門分化を前提に交際を図るというサロン性は今も本会に生きているだろう。そうした性格は正しく「昭和」を予言し、昭和時代に全盛期を迎え、終了後の「平成」における「意匠」の百花繚乱も、この一般的傾向の反映である。

今回の特集から分かるのは《物語》の時代である「現在」だ。無論、歴史は繰り返さない。一定していた「明治」から、「大正」「昭和」と次第に流動性や生成性を増した先にある「現在」の《物語》は、過去の再生ではなく、現在から紡がれるものだろう。とはいえ、時間と共に立ち現れてくる「現在」の《物語》においても、過去は大事だ。この点は、人間の記憶に最も関係が薄い《機能》を重視した「昭和」を底にV字型に回復している（**図１**）。ただし、「現在」における過去は、時として非場所的に神話化された一定の一点ではなく、

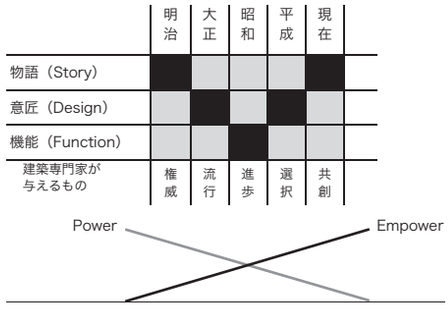



図１　明治〜現在における建築専門家の役割と推移

その場に即し日常的で解釈が多様な時間の流れとして《物語》の創出に参与する。

「物語の時代」という言葉自体は、さして新味はないだろう。気をつけなければならないのは、それが建築専門家から与えたもので終わっていないかという点である。「社会」を「クライアント」として見て「力」を与える、すなわちエンパワーメントすることが重要ではないかという指摘は既往の論考で行った[3)]。「明治」の昔から建築専門家、とりわけ建築家は言葉が上手なものだ。そうでなくてはいけない。ただし、一過性ではなく、いまここから、時間を味方につけた《物語》を共創する上で、クライアント側と建築家とのバランスが鍵になることは、特集の10のプロジェクトからも分かる。「現在」の《物語》は、そうした性格を持つ。

「建築と社会」が100年続いてきたと言っても、そこでの「建築」「社会」「と」の意味は大きく異なる。その揺れ動きから学び、これからを考えることができるのは、これも一見すると変わらない建築そのものの維持活用と同じくらい喜ばしい。

（くらかた　しゅんすけ）

注

1）『日本建築協会80年史 1917-1996』、1999、日本建築協会、1

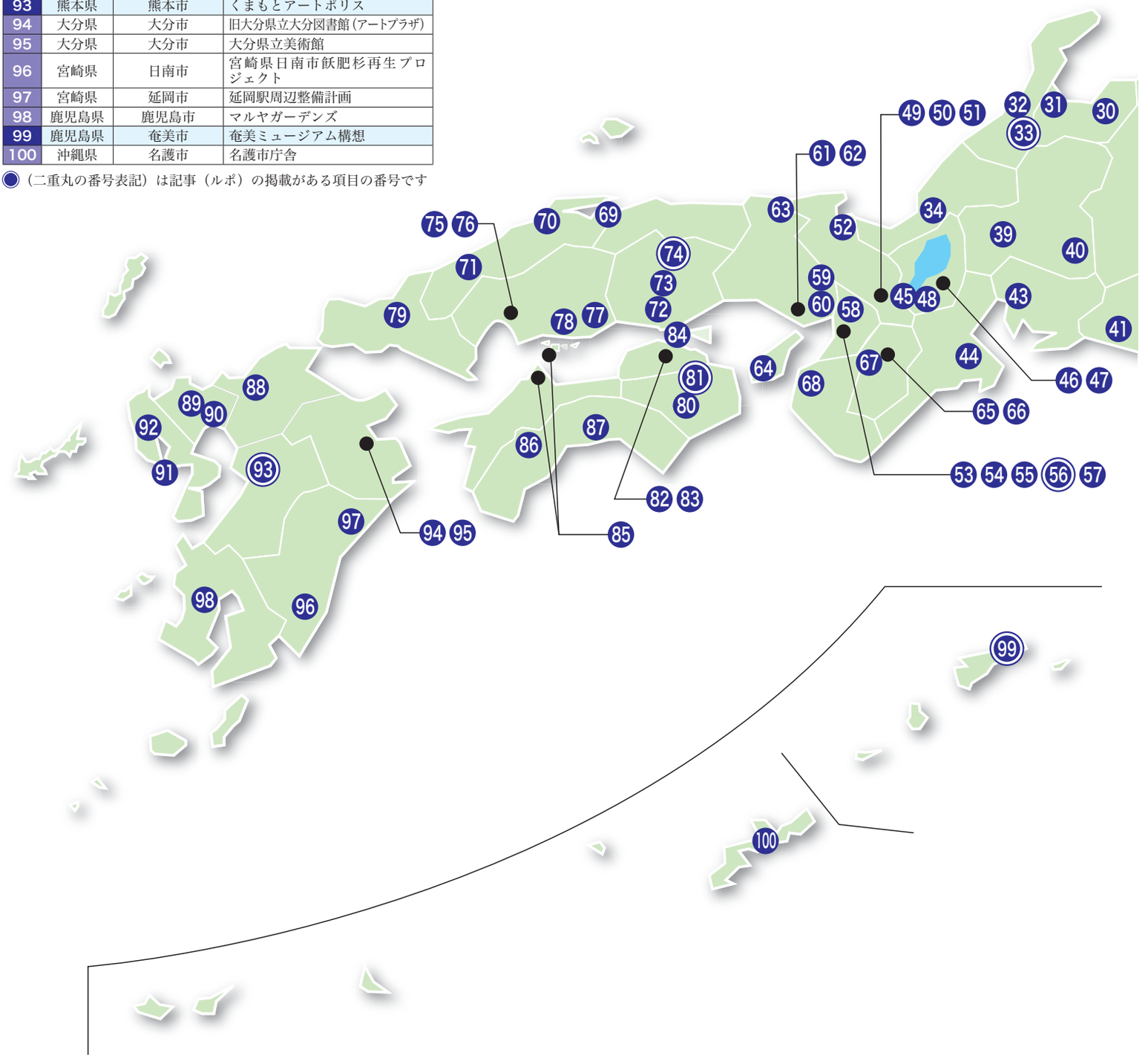
2）大阪府建築士会、『近代大阪の建築』、1984、ぎょうせい、11

3）倉方俊輔、「クライアント・エンパワーメント時代の建築〜新しい仕事のしかた〜」、『建築と社会』、2016.12、日本建築協会、10-13

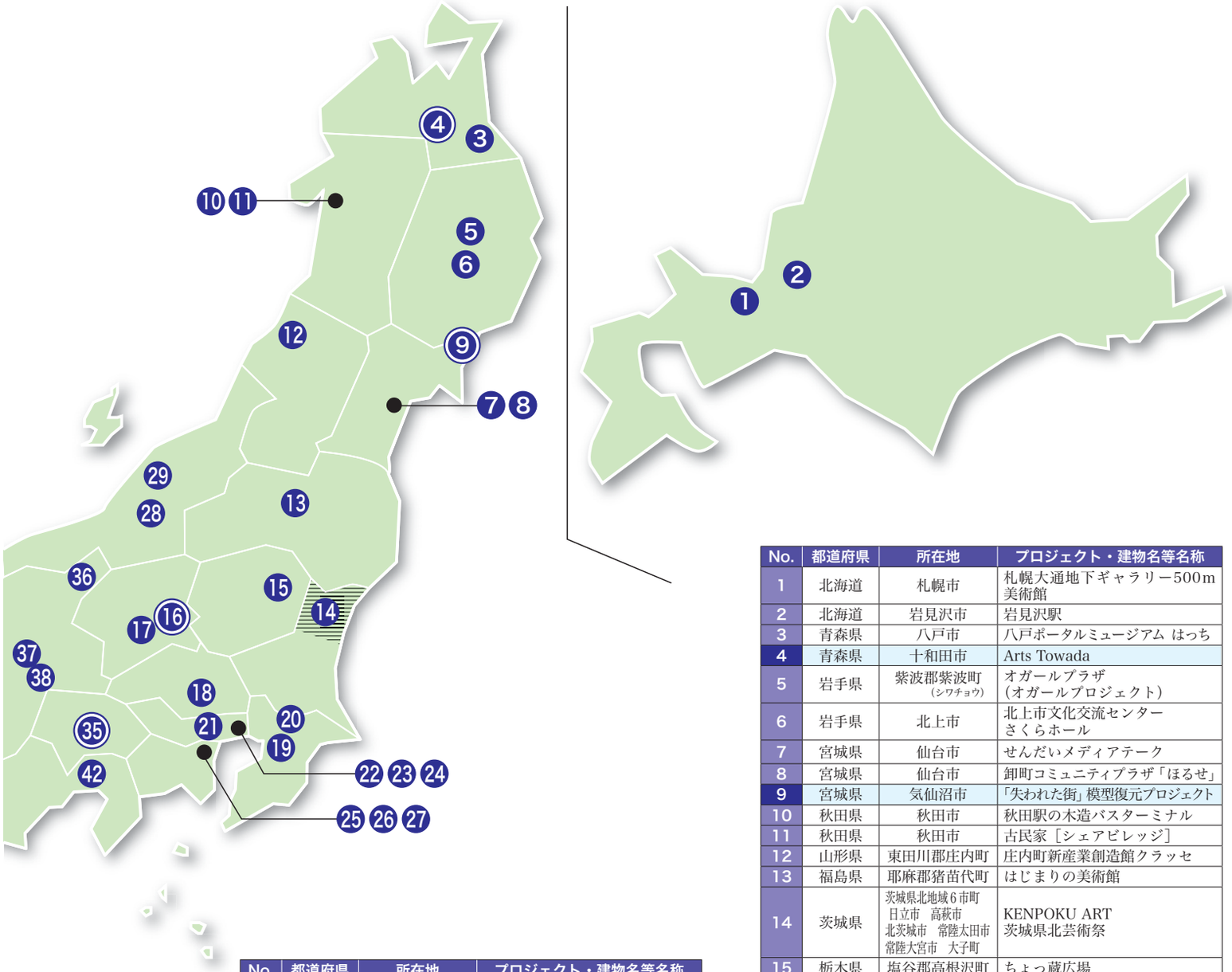
| No. | 都道府県 | 所在地 | プロジェクト・建物名等名称 |
|---|---|---|---|
| 80 | 徳島県 | 上勝町 | RISE & WIN Brewing Co. BBQ & General Store |
| 81 | 徳島県 | 佐那河内村 | 空き家再生と村の活性化 |
| 82 | 香川県 | 高松市 | 香川県庁舎 |
| 83 | 香川県 | 高松市 | 高松丸亀町商店街振興組合の取り組み |
| 84 | 香川県 | 直島町 | ベネッセアートサイト直島 |
| | 香川県 | 直島町 | 直島・犬島・豊島 |
| | 香川県 | 直島町 | 直島ホール |
| 85 | 愛媛県 | 今治市 | 伊東建築塾<br>大三島ライフスタイル研究所<br>今治市伊東豊雄建築ミュージアム |
| 86 | 高知県 | 梼原町 | 雲の上のホテル・梼原町庁舎など |
| 87 | 高知県 | 高知市 | 藁工ミュージアム<br>(アートゾーン藁工倉庫) |
| 88 | 福岡県 | 福岡市 | キャナルシティ博多 |
| 89 | 佐賀県 | 武雄市 | 武雄市図書館・歴史資料館 |
| 90 | 佐賀県 | 佐賀市 | 佐賀市街なか再生会議<br>「わいわい!!コンテナ」プロジェクト |
| 91 | 長崎県 | 長崎市 | 軍艦島 |
| 92 | 長崎県 | 佐世保市 | ハウステンボス「変なホテル」 |
| 93 | 熊本県 | 熊本市 | くまもとアートポリス |
| 94 | 大分県 | 大分市 | 旧大分県立大分図書館(アートプラザ) |
| 95 | 大分県 | 大分市 | 大分県立美術館 |
| 96 | 宮崎県 | 日南市 | 宮崎県日南市飫肥杉再生プロジェクト |
| 97 | 宮崎県 | 延岡市 | 延岡駅周辺整備計画 |
| 98 | 鹿児島県 | 鹿児島市 | マルヤガーデンズ |
| 99 | 鹿児島県 | 奄美市 | 奄美ミュージアム構想 |
| 100 | 沖縄県 | 名護市 | 名護市庁舎 |

| No. | 都道府県 | 所在地 | プロジェクト・建物名等名称 |
|---|---|---|---|
| 65 | 奈良県 | 奈良市 | 唐招提寺 |
| 66 | 奈良県 | 奈良市 | 奈良町南観光案内所「鹿の舟」 |
| 67 | 奈良県 | 香芝市 | Good Job! Center KASHIBA |
| 68 | 和歌山県 | 和歌山市 | 和歌の浦アート・キューブ |
| 69 | 鳥取県 | 米子市 | 東光園 |
| 70 | 島根県 | 出雲市大社町 | 出雲大社庁の舎 |
| 71 | 島根県 | 益田市 | 島根芸術文化センター<br>「グラントワ」 |
| 72 | 岡山県 | 倉敷市 | ①倉敷国際ホテル<br>②倉敷アイビースクエア |
| 73 | 岡山県 | 加賀郡吉備中央町 | nap village |
| 74 | 岡山県 | 真庭市 | 銘建工業の取り組み |
| 75 | 広島県 | 広島市 | 広島平和記念資料館 |
| 76 | 広島県 | 広島市 | 広島市環境局中工場 |
| 77 | 広島県 | 福山市 | とおり町Street Garden |
| 78 | 広島県 | 尾道市 | ONOMICHI U2 |
| 79 | 山口県 | 萩市 | 萩まちじゅう博物館 |

◉（二重丸の番号表記）は記事（ルポ）の掲載がある項目の番号です



# ■日本の「建築と社会を繋ぐ」プロジェクト100一覧




| No. | 都道府県 | 所在地 | プロジェクト・建物名等名称 |
|---|---|---|---|
| 1 | 北海道 | 札幌市 | 札幌大通地下ギャラリー500m美術館 |
| 2 | 北海道 | 岩見沢市 | 岩見沢駅 |
| 3 | 青森県 | 八戸市 | 八戸ポータルミュージアム はっち |
| 4 | 青森県 | 十和田市 | Arts Towada |
| 5 | 岩手県 | 紫波郡紫波町（シワチョウ） | オガールプラザ（オガールプロジェクト） |
| 6 | 岩手県 | 北上市 | 北上市文化交流センター さくらホール |
| 7 | 宮城県 | 仙台市 | せんだいメディアテーク |
| 8 | 宮城県 | 仙台市 | 卸町コミュニティプラザ「ほるせ」 |
| 9 | 宮城県 | 気仙沼市 | 「失われた街」模型復元プロジェクト |
| 10 | 秋田県 | 秋田市 | 秋田駅の木造バスターミナル |
| 11 | 秋田県 | 秋田市 | 古民家［シェアビレッジ］ |
| 12 | 山形県 | 東田川郡庄内町 | 庄内町新産業創造館クラッセ |
| 13 | 福島県 | 耶麻郡猪苗代町 | はじまりの美術館 |
| 14 | 茨城県 | 茨城県北地域6市町 日立市　高萩市 北茨城市　常陸太田市 常陸大宮市　大子町 | KENPOKU ART 茨城県北芸術祭 |
| 15 | 栃木県 | 塩谷郡高根沢町 | ちょっ蔵広場 |
| 16 | 群馬県 | 前橋市 | アーツ前橋 |
| 17 | 群馬県 | 富岡市 | 上州富岡駅 |
| 18 | 埼玉県 | 川越市 | 川越蔵の会 |
| 19 | 千葉県 | 千葉市美浜区 | 千葉市立打瀬小学校 |
| 20 | 千葉県 | 柏市 | UDCKまちづくりスクール |
| 21 | 東京都 | 武蔵野市 | ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス |
| 22 | 東京都 | 渋谷区 | 代官山ヒルサイドテラス |
| 23 | 東京都 | 千代田区 | 東京駅の復原 |
| 24 | 東京都 | 台東区 | 国立西洋美術館 |
| 25 | 神奈川県 | 横浜市 | 京浜急行電鉄黄金町高架下新スタジオ＋かいだん広場 |
| 26 | 神奈川県 | 横浜市 | 横浜赤レンガ倉庫 |
| 27 | 神奈川県 | 横浜市 | 横浜大さん橋国際客船ターミナル |
| 28 | 新潟県 | 十日町市 | 十日町市市民交流センター「分じろう」十日町市市民活動センター「十じろう」 |
| 29 | 新潟県 | 長岡市 | アオーレ長岡 |
| 30 | 富山県 | 富山市 | ①富山市コンパクトシティ計画 ②富山市まちなか賑わい広場「グランドプラザ」 |
| 31 | 富山県 | 氷見市 | 氷見市庁舎 |
| 32 | 石川県 | 金沢市 | 金沢21世紀美術館 |
| 33 | 石川県 | 金沢市 | Share金沢 |
| 34 | 福井県 | 敦賀市 | 敦賀駅交流施設　オルパーク |
| 35 | 山梨県 | 甲府市 | 山梨文化会館改修・免震化工事 |
| 36 | 長野県 | 上高井郡小布施町 | まちとしょテラソ |
| 37 | 長野県 | 塩尻市 | えんぱーく |
| 38 | 長野県 | 茅野市 | 茅野市民館 |

| No. | 都道府県 | 所在地 | プロジェクト・建物名等名称 |
|---|---|---|---|
| 39 | 岐阜県 | 岐阜市 | みんなの森 ぎふメディアコスモス |
| 40 | 岐阜県 | 中津川市馬籠 | 藤村記念館 |
| 41 | 静岡県 | 磐田市 | 豊岡中央交流センター |
| 42 | 静岡県 | 富士宮市 | 日本盲導犬総合センター |
| 43 | 愛知県 | 名古屋市 | 久屋大通公園 |
| 44 | 三重県 | 伊勢市 | おかげ横丁 |
| 45 | 滋賀県 | 近江八幡市 | ラ コリーナ近江八幡 |
| 46 | 滋賀県 | 近江八幡市 | 一粒の会 |
| 47 | 滋賀県 | 近江八幡市 | 「波打ち際」の風景ができるまち |
| 48 | 滋賀県 | 守山市 | セトレマリーナ琵琶湖 |
| 49 | 京都府 | 京都市 | 京都国際マンガミュージアム |
| 50 | 京都府 | 京都市 | 町家再生で職住一体のまちづくり |
| 51 | 京都府 | 京都市 | 京都御所 |
| 52 | 京都府 | 舞鶴市 | 舞鶴赤レンガパーク |
| 53 | 大阪府 | 大阪市 | 梅田スカイビル |
| 54 | 大阪府 | 大阪市 | てんしば |
| 55 | 大阪府 | 大阪市 | イケフェス大阪 |
| 56 | 大阪府 | 大阪市 | 大阪ガスNEXT21 |
| 57 | 大阪府 | 大阪市 | 豊崎長屋等の大阪市立大学の取り組み |
| 58 | 大阪府 | 吹田市 | 市立吹田サッカースタジアム |
| 59 | 兵庫県 | 宝塚市 | ゼンカイハウス |
| 60 | 兵庫県 | 芦屋市 | ヨドコウ迎賓館 |
| 61 | 兵庫県 | 神戸市 | 灘五郷 |
| 62 | 兵庫県 | 神戸市 | 人と防災未来センターの取り組み |
| 63 | 兵庫県 | 豊岡市城崎町 | 城崎国際アートセンター |
| 64 | 兵庫県 | 淡路市 | 戦没学徒記念 若人の広場 |

ルポ 1

# 美術館を核にした現代アートによるまちづくりプロジェクト「Arts Towada」の取り組みについて

三谷帯介
鹿島建設　株式会社

佐藤達保
株式会社　竹中工務店

本田隆作
株式会社　昭和設計

## はじめに

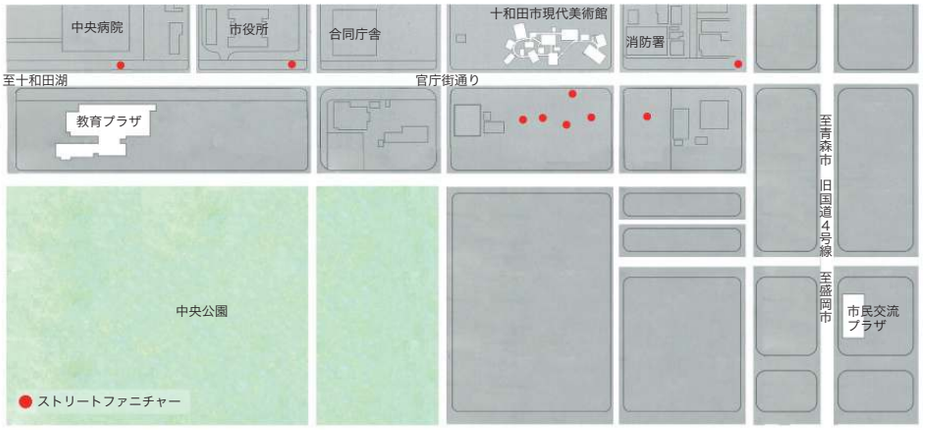
十和田市は、多くの地方都市が同様に抱える人口減少や地域の衰退といった課題の解決のため、市のシンボルロード「官庁街通り」をより魅力的なものにしてまちづくりの拠点とすべく、他の都市に先駆けて現代アートによるまちづくりを進めてきた。「Arts Towada（アーツ・トワダ）」は、①現代美術館、②アート作品、③アートプログラムの３つの要素を柱に展開するまちづくりプロジェクトの成功事例として、建築と社会に関わる多くの人々から高い関心を集めている。その中核施設として2008年にオープンした「十和田市現代美術館」にて、十和田市観光商工部観光推進課 工藤達也課長に活動のはじまりから今後の展望までお話しいただいた。



官庁街通りと十和田市現代美術館



左：十和田市観光商工部観光推進課 工藤達也課長




官庁街通り沿いのアート作品とストリートファニチャー

## まちづくりに現代アートを取り入れたきっかけ

碁盤の目状に整然と区画された街並みのなかで、長さ1060m×幅36mにわたって松と桜が４列の並木を作り「日本の道・百選」（建設省選定）にも選ばれた「官庁街通り」は、かつて馬産地であった十和田市に設置された旧陸軍軍馬補充部に始まるそうだ。戦後間もなく軍馬補充部用地が開放された際に官公庁用地として整備され、道の両側には国・県・市の官庁が並び、熊本市・丸亀市とともに都市計画法の事務所地区として整備され、市民のシンボルロードとして、祭りやイベント、散策の場として愛されてきた。しかし、国の省庁再編による事務所閉鎖や合同庁舎新設に伴う出先機関の転居などにより、次第に通り全体に空地や駐車場が目立つようになった。また、市内旧国道４号沿いの中心商店街には、かつて百貨店が立ち並び近郊の中心として栄えていたが、郊外型大型店舗の出店や不況により2000年以降は空洞化の一途をたどった。

十和田市は安政６年（1859年）に基礎ができた近代都市で、開拓からまだ約160年と歴史は浅い。十和田市はその通過点となり中心性を失った。賑わいの後退は人口流出とあわせて十和田市の課題となっており景観と観光両面での改善が必要であったが、商店街規模の町おこしイベントでは地域外からの集客効果が限られ、解決への取り組みには限界があった。そうした中、ヨーロッパの街並みに感銘をうけた当時の中野渡春雄市長が、「官庁街通り全体を美術館に見立てる」という構想を発し、現在の「Arts Towada」につながる活動が2001年から始まった。

三谷帯介
1980年香川県生まれ
2005年神戸大学大学院自然科学研究科建築学専攻博士前期課程修了
2005年鹿島建設㈱建築設計本部入社、関西支店建築設計部　設計主査

佐藤達保
1980年大阪府生まれ
2006年神戸大学大学院自然科学研究科建築学専攻修士課程修了
2006年㈱竹中工務店入社、大阪本店設計部主任

本田隆作
1982年兵庫県生まれ
2008年京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科卒業、同大学院修了
2008年㈱昭和設計入社、建築設計部主任

## 期待と信念をこめた先駆的な取り組み

当初は現代アートに馴染みのない市民や議会の理解を簡単には得られず、前向きでない意見も多かったらしい。それでもオリジナリティがあり、「他でやっていないことを先駆的に発信する」という市長の信念には一貫性があった。現代アートには、市民と一緒に発展させるまちづくりへの期待が込められていた。

2002年、官庁街通りの活用調査をプロポーザル方式により選定し、ナンジョウアンドアソシエイツに業務委託した。ナンジョウアンドアソシエイツはメディアの取り上げ効果やプロジェクトへの理解度が非常に大きく、安心して任せることができたという。建築家や作品の選定等、専門家の意見を市長が積極的に活かしていったことも大きい。そして、「野外芸術文化ゾーン」整備の着手とともに、中核施設としての「十和田市現代美術館」の設計者をプロポーザルによって西沢立衛氏に決定した。

「アートのための家」をコンセプトに街に対して開く構成は、非常に期待のもてる提案であり、並行して、現代アートと十和田市民をつなぐ「アートチャンネルトワダ実行委員会」を発足し、年４回のアート体験プログラムを開催した。子供や若者を中心に活動に参画してもらうことで、次第に市民の理解を得られるようになったという。

## 開館後のインパクトと変化

当初の年間入館目標は4.5万人であったが、2008年の開館初年度はそれを大幅に超える17万人が来館し、大きなインパクトを与えた。人口７万人に満たない都市に、その数倍の人が一気に集まった反響は大きく、市民や議会の見方が一変し、商店街も徐々に変わり始めた。地域の外から若者や海外旅行者が訪れるようになり、そこを歩く人々の属性・雰囲気も変わったそうだ。

また、現代アートに関心をもつ人が増え、地域が連携した大々的な企画や展覧会が開かれるようになり、「酒プロジェクト」をはじめとするワークショップによるオリジナル商品も生まれた。現代美術館がなければ、ここまでできなかったという。

## 課題と今後の展望

「経済効果は大きいが、まだ地域レベルでは寂しい部分もある。」と工藤課長は語る。もともと生活用品を売っていた店にお土産品が並ぶようになるだけではなく、商店街が美術館来館者とどう関わっていけるかが大切だと。「Arts Towada」と一丸となって活動してくれる人が現れ、「全国都市魅力度ランキング」で上位に挙がるようになったが、今も人口減少は続いている。

アクセシビリティの問題もある。震災以降は首都圏からの観光自粛もあり、十和田だけでは人は集まりづらい。弘前や八戸、青森県立美術館といった近隣エリアとのネットワークも密にしていきたいところだ。

また、現代美術館では常設展示がメインになっているが、作品によって来館者が足を留める時間は様々であり、リピーターを増やすためにもある程度の作品の入れ替えや企画展の充実が必要だ。

一方で、公共建築のプロポーザル経験と実績は大きな自信につながったそうだ。その後に行われた「十和田市市民交流プラザ」の設計プロポーザルでは60案もの応募があった。

また、美術館を活用した教育普及事業への取り組みとして、小中学校への美術館無料見学とアート体験プログラムを提供し、市民との関わりを実践している。2008年の美術館開館以来、「十和田奥入瀬芸術祭」を開催するなど積極的に地域との交流を図っており、前回は約2,000人がアート広場を訪れるなど非常に好評で、今後も積極的に活動を続けていきたいとのこと。「Arts Towada」の活動は十和田市活性化の大きな核になっているので、今後も継続的な発展を期待したい。

## 建築家による作品とまちづくり

美術館に続いて建てられた「市民交流プラザ（設計：限研吾）」と「教育プラザ（設計：安藤忠雄）」は、老朽化した中央公民館や市民図書館などの公共施設を集約・再編する事業として整備され、設計者は美術館同様に公開プロポーザルによって決定した。

商店街に沿って計画された「市民交流プラザ」は、「みちと広場を融合させたにぎわいの広場」をコンセプトに、にぎわいを引き込みながらコミュニティを育むことを意図した「みちの広場」とよぶ折り曲げられたアーケード状の共用空間が計画されている。さらに街並みと積雪対策のロジックによる折り紙状の勾配屋根により、内部空間には矩形部分がほぼ見当たらず、かなり変則的な構成になっている。訪問したのが休日だったためか利用されているところを見ることができなかったが、プロポーザル時に提示されたスケッチのように、にぎわいやアクティビティの表出が期待されるところだ。



十和田市市民交流プラザ

現代美術館と同じく官庁街通り沿いに計画された「教育プラザ」は、青森県南部の伝統工芸「南部裂織」に着想をえて、低層ボリュームと中庭を平行にグリッドで配置し、その間に大きなハイサイドライトをもったサンルームが挿入された明快な構成である。北側の官庁街通りの並木と南側の中央公園の豊かな緑、中庭の植栽に挟まれた内部ではどこからでも陽の光と緑を感じることができ、東北の寒さを感じさせない温かな空間となっている。窓際のカウンターテーブルで勉強している学生、セミナールームを活用している団体、サンルームで休憩している家族など、色々な人に使われており、地域に愛された施設であるとすぐに理解できた。



十和田市教育プラザ

一方で、「市民交流プラザ」と「教育プラザ」のいずれも現代美術館のように「街に開いた

建築」とは対照的に感じられた。著名建築家によるコンセプトを実現した優れた建築だが、まちづくりの基幹施設として先行する現代美術館との連携を強められれば、活性化への強力な相乗効果が得られたのではなかろうか。

十和田市ではこれらの名だたる現代建築を活かした全国の建築系大学生のゼミ活動なども期待しており、昨年は首都圏の大学から市民交流プラザの利用申し込みがあったようだ。

## 【商店街とアート活動について】「街全体が美術館」

美術館の視察後、街の中心部である十和田市中央商店街を視察した。街全体を美術館として見立てたコンセプト通り、商店街の道沿いにはストリートファニチャーが点在している。ただ、街が活性化されたとはいえ、劇的に様子が変わったかというとそれ程大きな変化は感じられない。いわゆるシャッター街に近い印象を受けた。

ところが、ある店舗との出会いによりその印象は変わる。「松本茶舗」という茶器や日常生活の道具が売られるお店である。外観は一見ごく普通の店舗なのだが、店の前に木材で作られたオブジェのようなものが置かれており「店内に展示室があります」の文字。店内の様子をのぞくと店主と観光客が話をしている。我々も店内に入り店主である松本柳太郎さんに話を伺うことにした。



店先にアートが感じられる松本茶舗

お店の中は商品が並べられており、どこにアートがあるのか分からない。展示が見たいとお願いすると、案内されたのは店舗の奥。通常の商品と並列で展示されるアーティストの作品、商品の器を楽器に見立てた展示、そしてメインの展示室。メインの展示室は是非みなさんにも実際足を運んで体験していただきたい。


日常とアートが混ざり合う店内

その展示室を体験した後に聞く松本さんの話がまた面白いのである。後から知ったが、この松本茶舗はとても有名なスポットのようで、第二の美術館とも言われている。美術館の企画展示と連動してこのお店でも展示が行われるのだ。まさに「街全体が美術館」というコンセプトに合致した活動である。

松本さんは美術館の作品や街についての説明など、パソコンの画像を見せながら説明する。現在の展示内容だけでなく、過去の展示のこと、街のことをジョークも交えながら嬉しそうにしゃべってくれた姿が印象的だ。


店主を囲んで話を伺う

## 美術館と商店街が連動する企画

我々が訪れた時は美術館と連動した企画は行われていなかったが、過去にはユニークな企画が行われている。2009年の「SUMOAURA（相撲―オーラ）展」では、商店街各店舗の商品などに相撲のまわしを締め、しこ名をつけて展示を行った。勢いで美術館の前にある作品「フラワーホース」にもまわしを締めたのだから驚きである。2010年の草間彌生氏の展覧会では商店街のショーウインドーが赤い水玉で覆われた。2012年の奈良美智氏の展覧会では公募で選ばれた若いアーティストの方々が２回にわたる十和田市内での合宿を通して作品制作を行い、まちなかで小さな展覧会を行った。他にも美術館と商店街が連動した様々な企画が行われており、タイミングが合えば面白い体験ができるだろう。

## 人生を変えるアートの力

この松本茶舗での体験により、最初に感じた商店街への印象が大きく変わった。美術館でアートに触れ、外に出ると広場にもアート作品、通りにはストリートファニチャーがあり、期待を胸に中心市街地の方へ足を向けると、商店街の姿に現実に引き戻される。アートによるまちづくりと聞いていた先入観とのギャップをさまようなか、この店舗の体験でがらりと変わる。この印象のギャップこそが松本さん自身が狙っていることである。小綺麗なギャラリーが点在するのではなく、普段の生活感が漂う場にアートがあるからこそ逆に面白さが際立つのである。松本さんは美術館ができて人生が変わったという。元々アートや建築の専門ではないが、この活動をきっかけに詳しくなり観光客相手に作品の説明が出来るようになった。有名なアーティストが松本茶舗に来てくれるようになった。松本さんはこのような状況を「金はないけど気分はいい」と笑顔で語ってくれた。


活き活きした表情で語ってくださる店主

美術館ができたことによって、目に見えるような街の大きな変化は感じられない、だがそこに住む人の内面を変えていることが大切なのだと思った。美術館ができたことで、人の人生そのものを変えている。経済効果だけではなく、人の幸福度を向上させる美術館の影響力に改めて驚いた。

観光客が増加し、確実に大きな影響を及ぼしているものの、これからの課題もある。松

本さんのような住民自らアートに関わる活動がもっと増加すればよいと思うが、アートを扱う難しさから、それほど広がっていないのも現実だ。松本さんのような人がどれくらいいるのか分からないが、この小さな変化がこれからの街を変える力になると信じたい。

## 【十和田取材を終えて】意外な旅のはじまり

我々が十和田の地に降り立ったのは雪が積もる12月の週末だった。かねてから「現代美術館を中心としたアートによる活性化」という建築と都市の幸せな関係性を築いた成功例として見聞きしていた街の実際を確かめるため、期待を胸に三沢空港に降り立った。

空港から十和田までの交通手段はタクシーかバスだ。タクシーの車内で運転手の方に「十和田はアートで盛り上がっていますか？」と尋ねてみる。すると意外な答えが返ってきた。「電車の駅やデパート、大企業の工場があった頃に比べて元気がなくてね…」。旅は驚きを持って始まった。

## 人を惹きつける「アートの家」

十和田市中心部に入り商店街を抜けていく。空き地が目立ち、シャッターが下りている店も多い。現在、全国の地方都市でしばしば目にする風景だ。事前に聞いていた話では、ここが美術館と連携してアートによるまちづくりを盛り上げている場所のはずだった。

商店街を抜け、十和田市のメインロード「官庁街通り」に入る。まっすぐに桜並木の街路樹が続く広い通りは、さすが「日本の道100選」の名に相応しく美しい。そこに面して今回の視察の中心施設である「十和田市現代美術館」は建っている。

それぞれにアート作品を納めた小さなボリュームをガラス張りの通路が繋ぐように構成されたこの美術館は、「アートのための家」のコンセプトそのままのスケール感と建物内外の視線の交錯によって想像以上に街に溶け込み、それでいてはっきりと特別な空気感を作っていて、我々に何とも言えない喜びを与えてくれた。話に聞いていた通り、都会から来られたと見られる若い女性たちや家族連れの姿があり、現代アートの前で思い思いに写真を撮ったりして楽しんでいる。素直に「いいな」と感じるシーンがそこにあった。



通りに面したアート作品を楽しむ旅行者

## 「自分ごと」で取り組むプレーヤー

美術館を出て先ほどの商店街に戻る。「どこで美術館と連携した活動が行われているのだろう」と探していると、あるお茶屋さんの前でそれらしき看板を目にした。店内に目をやると、観光客らしき数人を前に男性がプレゼンテーションをしている。前出の松本茶舗の店主・松本柳太郎氏だ。その活き活きした楽しい語り口に観光客も我々も引き込まれ、アートプロジェクトが始まった頃からの話を伺う。このプロジェクトを心から「自分ごと」として楽しんでおられることがひしひしと伝わってきてこちらまで嬉しくなる。また、現在このプロジェクトを主導し様々な企画を続けておられる十和田市観光推進課・工藤課長やスタッフとして美術館の運営に携わる方々から、これまでの道のりや運営面の工夫・思いをお聞きし、思わずこちらも今後についての提案をしたくなり議論が尽きなかった。



スタッフの方の説明からも、美術館への愛着が伝わる

その他にも、アートとは異なるが、イベントによって知名度を上げた地元食「牛のバラ焼き」の販売を通じて十和田をPRし盛り上げようと取り組む若い人々にも出会った。まちの活性化には、こうした前向きなプレイヤーの存在が欠かせない。

## 「十和田」－途上のプロジェクト－

今回の視察全体を通じて我々が感じたのは、ここにはプロジェクトの成功している点とまだ途上の点が交錯している、ということだ。人口が減少していく地方都市を変える、というのはとても大変なことだ。「建築が一つ建つことで解決できるほど簡単なことではない」ということを改めて感じさせられた。

それでも、この美術館が無ければ我々や美術館にいた人達が十和田を訪れることも無かったかもしれない。建築が有ると無いでは隔絶の差があり、このプロジェクトに踏み出した市長をはじめとした方々、それに応えた設計者、順風満帆ではない状況の中で運営に携わってこられた方々の努力はとても貴いものだと思う。十和田では種を撒き、素晴らしい現代美術館という「花（建築）」に結実した。ただしそれはあくまできっかけの「点」であり、その花をいかに面的及び時間軸にひろげて「花畑」にしていくかが問われる。



街の今後についても議論が広がる

## 建築の持つ力と課題

成功している部分だけにスポットを当てることは耳には優しいが、抱える課題と両方をきちんと見る目も必要だと思う。建築は作るだけではゴールになりえず、それを使い、まちを愛する人々の気持ちと努力が必要なのだ。今なお十和田はこのプロセスの最中にいて、活性化をめざす全国の地方都市の先頭を走っている。「建築と社会」の関係を考える上で、これからも引き続き注目すべきプロジェクトだと感じる取材だった。

今回の取材に関して、休日にも関わらず丁寧にご協力下さった十和田市観光推進課・工藤課長、現代美術館スタッフのみなさま、松本茶舗店主・松本氏はじめ、関係各位に改めて御礼申し上げます。

（みたに　だいすけ・さとう　たつほ・ほんだ　りゅうさく）

ルポ

2

# 「失われた街」模型復元プロジェクト



写真１　地域住民と学生たちが模型を囲んで、記憶の風景を共同制作する。(photo : Jason Halayko)

槻橋　修

神戸大学大学院工学研究科　准教授

## 街は記憶でできている

東日本大震災が発生した2011年３月より、全国の建築系大学研究室と連携して、震災によって失われた被災地の町並みを模型で復元することに取り組む“「失われた街」模型復元プロジェクト”を開始し、６年間継続してきた。建築学生を中心に700人以上の模型制作ボランティアの協力を得て制作された縮尺1/500で１m四方の真っ白な模型は 2016年度までに岩手、宮城、福島の被災地域51地域、445ピクセルに及ぶ。今回の震災で津波等で大きな被害を受けた街や村を全て模型で再現すると約1000ピクセルになるため、約４割を再現したことになる。制作した白いジオラマ模型を現地に運び、住民とのワークショップによって、そこに暮らす人々がかつての街への愛着と地域のつながりを取り戻していく過程を記録していく「記憶の街ワークショップ」を並行して開催してきた。住民の思い出と色が積み重ねられた「模型」は、人々の「記憶の風化」を防ぐとともに、被災地の方々の“記憶の復興”の機会となっている。様々な団体、地域の人々の協力に支えられ、これまでに31回の現地ワークショップを行ってきた。白い模型を前にして、住民たちはかつての町並みを思い起こし、懐かしい思い出が宿った場所に「記憶の旗」を立てていく。１週間のワークショップ期間を経て、模型の上には多い時には数千本の旗が立てられ、模型を囲んで話し合うことによって、失われていた記憶を取り戻す人も多い。語られる思い出は、建物に限らず樹木や花、祭りの光景や季節の風景に至るまで多岐にわたり、街が常に人々の活動とともに移ろいゆく存在であることを実感させる。街はハードよりもむしろソフト、すなわち人々の記憶でできているといって過言ではない。街を愛着のあるものにしているのは、行政や専門家よりもむしろ住民自身なのだと気付かされる。

## 社会を治癒するための模型

このプロジェクトを最初に着想したのは震災から２週間後の2011年３月25日、神戸大学の卒業式後、私が赴任してはじめてのゼミ生が無事に卒業し、４月から大学院生として進学を控えた祝いの宴席でのことであった。震災直後の混乱が社会全体を覆っており、会のムードも沈みがちで、専ら話題は卒業設計を終えたばかりの学生たちと一緒に今回の震災に対して何ができるだろうか、ということだった。復興というのは、元に戻す復旧も含まれるが、やはり被災地には新しい街が作られることになるだろう、そして新しい街をつくる以上、「昨日よりも、今日よりも、明るい」

槻橋　修

1968年富山県生まれ。
1991年京都大学工学部建築学科卒業。1998年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程単位取得後退学。2002年ティーハウス建築設計事務所設立。2003年～2009年東北工業大学工学部建築学科講師。2009年神戸大学大学院准教授
主な作品「氷見市朝日山公園コミュニティデザイン」(福岡孝則、松田法子と共同、2014～、富山県氷見市)
著作「文化の居場所の作り方－久留米シティプラザからの地方創生」(監修、久留米シティプラザ編集委員会編、誠文堂新光社、2017年)
2009年日本建築学会教育賞（教育貢献）共同受賞。2014年東日本大震災復興支援「失われた街」模型復元プロジェクトが第40回放送文化基金賞受賞（NHK盛岡放送局と共同受賞)。2015年日本建築学会賞（業績）共同受賞。

未来を考えなければならないだろうと考えた。被災地の悲しみに寄りそって、乗り越えた先は、明るい明日でありたい。だからこそ、新しい街を考えるより先に、私たちが失ったものについて、理解しておかなければならないと思った。そして、その理解を「共有」しておくことが、復興へ向けた基礎鍛錬のような意味で重要なのではないかと考えたのである。

2011年３月11日の午後、わずかな時間の内に私たちが失ったものは、とても「多く」、そして「多様」である。失われたもの全貌を理解する方法があるのかというと、非常に困難であると答えざるを得ない。震災直後、全てが失われた被災地に立っても、それをあらわす言葉さえも失ってしまう様な状況の連続であった。私たちがまずなすべきことはこの状況を建築や都市に携わる者として理解し、共有する努力であろうと感じたのである。そして復興へ向けた真の言葉を取り戻すために、模型を作ろうと話し合った。前を向くために、一度時間を巻き戻し、街を復元する。そしてそれらがすべて失われてしまったことを今一度、理解する。膨大な時間がかかっても、それは社会にとって治癒のプロセスなのだと信じることにして、この膨大な作業に取り組むことを決めたのであった。

## 建築から社会へ、社会から建築へ

思いついた晩のうちに、並行して進めていた建築家による震災復興支援ネットワーク＜アーキエイド＞の準備のためのメーリングリストにこの着想について投げかけたところ、その日のうちに多くの建築家、教授達から賛同と協力の意向を返信でいただき、プロジェクトははじまった。以降、気仙沼市での試験的なトライアルを経て現地の人々との共同方法を探りつつ、TOTOギャラリー・間や東京都現代美術館エントランスホールでの展示の機会で他大学でのコラボレーション方法を探り、以後2012年までに各地で被災地のことを伝える展覧会を10回以上にわたって開催した。震災直後からテレビやインターネットでの動画によって被災時の模様は膨大に伝えられていたが、ジオラマ模型によって伝えられる被災地の空間的な豊かさ、文化的景観などについて反響は非常に大きかった。このことはジオラマ模型の空間的メディアとしての特性をあらわすだけでなく、都市空間、建築空間自体が社会にとって大変重要なメディアであることを間接的に実証している様に思う。





写真２（上）　南気仙沼地区を再現した白模型
写真２（下）　現地ワークショップを経て思い出に彩られた模型

2012年９月、エルメス財団との共同制作の機会を得て、気仙沼市内湾地区を対象に本格的な現地ワークショップ「記憶の街ワークショップ」を開催し、模型を制作した学生達が現地に模型を持参して住民らから模型上に記憶を収集するワークショップ手法を確立する機会を得た。この方法を現地に展開していく機会として、2013年にNHK盛岡放送局との共同で岩手県内10箇所の模型ワークショップを毎月行い、ドキュメンタリー番組を制作するシリーズ「ふるさとの記憶」が大きな助けとなり、以降、宮城シリーズ、福島シリーズと３年間にわたって各地でワークショップを開催していくことができた。当初から掲げている「全て復元」の目標へはまだ遠いが、現地からこのワークショップを求められる機会も増え、多くの人々に支えられながらこのプロジェクトは続いている。

私たちの世代の指導者的存在で昨年惜しくも急逝された建築家・小嶋一浩氏が、恩師・原広司からの教えを受け継ぎ「建築はモノではなくコトである」というテーゼの実践にこだわってきたことを、後輩である私もこのプロジェクトを通して、深く確信する。街は記憶でできている。都市は出来事である。だからこそ建築や都市はレジリエントな社会の創造に貢献できるのである。この認識に立った実践こそ、建築と社会の豊かな関係を紡いでいくと考えている。

（つきはし　おさむ）



写真３　現地ワークショップの風景
2014年　石巻市
（photo Yosuke Otake）

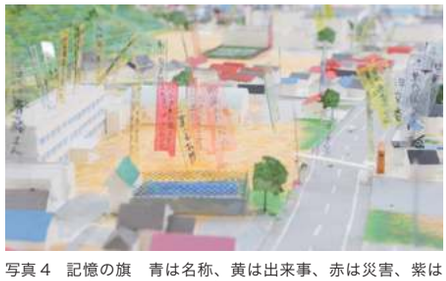


写真４　記憶の旗　青は名称、黄は出来事、赤は災害、紫は歴史に関することを表す
（photo Yosuke Otake）

ルポ 3

# アーツ前橋 コンバージョンによる中心市街地活性化のモデル

吉村英祐

大阪工業大学工学部建築学科教授

## 周遊する散歩道のような美術館

近年、地方都市の中心市街地の衰退が問題となっているが、群馬県の県庁所在地・前橋市もその例外ではない。前橋市は2000年３月に最初の「中心市街地活性化基本計画（旧計画）」を策定して以降、さまざまな活性化事業を推進してきたが、衰退化に歯止めがかからないため、これまでの活性化事業の成果等の評価・検証を行ったうえで、「前橋市中心市街地活性化基本計画」（2011～2015年度）を策定し、新たな前橋の魅力を創出していくことになった。

その中心的な事業の一つとして前橋市が取り組んだのが、美術館構想である。具体的には、活性化区域内に建つ９階建ての「前橋西武WALK館」（2006年閉店）の建物をコンバージョン（用途変更）し、前橋市美術館として活用するためのプロポーザルコンペを実施した。2011年１月31日に水谷俊博氏の提案が最優秀に選ばれ、実施設計から改修工事へと進むなかで、2012年に芸術文化施設運営検討委員会により「アーツ前橋」と命名され、2013年10月26日にグランドオープンを迎えた。

地方都市の美術館は、駅から離れた広大な敷地に建つものが多いが、「アーツ前橋」は衰退しつつあるとはいえ、人口34万人の県都の中心市街地という、美術館にとって圧倒的に有利な立地条件である。「アーツ前橋」は、①施設全体を周遊する散歩道のような美術館とする②既存建物の姿（記憶）を大切にしコンバージョンの魅力を最大限引き出す③展示ばかりでなく市民が積極的に利用できる魅力的な場所づくりをおこなう、という三つの大きな考え方に基づいて計画されたが、その目的は、単に美術館をつくるだけでなく、その存在を街のにぎわいの創出につなげることにある。

## コンバージョンならではの設計の妙味

私は20年ほど前から、用途変更された建築を見て回っているが、「アーツ前橋」が『日経アーキテクチュア』（2013年８月10日号）や『新建築』（2013年９月号）に掲載されたのを見て、たいへん興味を持っていたところ、群馬県高崎市で開催される第62回全国建築審査会会長会議（2015年10月）に私も出席することになった。私は会議前日に高崎市に入り、前橋市まで足を延ばした。JR前橋駅前からバスに乗り、本町バス停で降りて歩くこと数分、正面右手に「アーツ前橋」が姿を現した。

まず目についたのが、既存外壁に沿ってその全面を覆う、無数の円形の孔があけられた厚さ10mmのアルミパンチングメタルである。孔は手が入るほど大きいが、遠目からちょうどよく見えるように計算された寸法である。コーナーや端部に大きなアールがとられていることもあって、あたかも柔らかい衣をまとっているようである。

１階は透明ガラス張りで、通りから中がよく見える。西エントランスから入ると、左にカフェ、右にショップがあり、若い人たちが集まっている。ショップを通り過ぎて左に曲がると、そこは総合案内である。ちょうど「ここに棲む　地域社会へのまなざし」*1が開催中であり、ためらわず観覧料を払ってギャラリーに入る。最初に目に飛び込んできたのが、１階と地下１階をつなぐ細長い矩形の吹き抜けであるが、これがエスカレータを撤去した痕跡であろうことは、すぐに気付いた。展示室の天井は梁や設備機器がむき出しで、壁も含めてすべて真っ白に塗られている。空調ダクト類は、見せる要素としてしっかりデザインされている。地下への階段を下りる途中に、ハンチのついたRC造の梁が空中を跳んでおり、梁の横面には床スラブを撤去した荒々しい痕跡がわざと残されている。これは、さきほどの吹き抜けとともに、「既存建築物の姿を大切にしてコンバージョンの魅力を引き出し、それらを随所に配置」*2したものである。このように、歴史と時間を織り込めるのは、新築では経験できない、コンバージョンならではの設計の妙味である。

## 計り知れない可能性を秘める

地下１階のインテリアも、基本的には１階と同じである。おもむくままに地下の展示を見て回ろうとしたら、「こちらのルートから観てください」と呼び止められた。展示物と空間の関係を考えて、見せ方が計算されているのだろう。エントランスからギャラリーを巡り、再びエントランスに戻るまでの立体的な回遊空間は、まさにプロムナードであり、計

吉村英祐

1955年大阪生まれ。1978年大阪大学工学部建築工学科卒業、1980年同大学院建築工学専攻修了。小河建築設計事務所、大阪大学助手、助教授を経て2007年から大阪工業大学工学部建築学科教授。1992年日本建築学会奨励賞、2007年日本建築学会賞（論文）受賞。博士（工学）、一級建築士。専門は建築計画学、建築人間工学、安全計画。主要共著に建築計画１・２（鹿島出版会）、建築計画基礎（学芸出版社）、建築人間工学事典（彰国社）、阪神・淡路大震災における避難所の研究（大阪大学出版会）ほか多数。

算された展示物の配置の妙味と相まって、美術館としての空間の魅力をさらに高めている。

美術館を出る頃、あたりはすっかり暗くなっていた。外装のパンチングメタルが、うすいオレンジ色に輝いてストリートを柔らかく照らし、１階のカフェとショップが夜景に浮かび上がる夜景は、昼間とは違う魅力を放っていた。

「アーツ前橋」が、中心市街地の活性化にどのくらい効果があるのかを検証するには、もう少し時間を要するであろう。しかし、中心市街地から撤退した大規模商業施設の活用方法を示す一つのモデルとして、計り知れない可能性を秘めていることは間違いない。

（よしむら　ひでまさ）



写真１　交差点の角地に立地する。背後に見える立体駐車場が、かつて大規模物販店舗であったことを示す

**建築概要**

用途：美術館（大規模物販店舗からの用途変更）
竣工：2012年（開館は2013年）
場所：群馬県前橋市千代田町5-1-16
規模：［階　　数］地上２階／地下１階
（改修範囲）
［延べ面積］5,517.38㎡
構造：SRC造（一部S造）
設計：水谷俊博＋水谷玲子／水谷俊博建築設計事務所

＊１　アトリエ・ワン、乾 久美子、Eureka、藤本壮介、水谷俊博建築設計事務所（「アーツ前橋」の設計者）など14組の建築家・アーティストが模型や図面を出展していた。会期は2015年10月９日～2016年１月12日。

＊２　水谷俊博建築設計事務所HPアーツ前橋
http://mizutaniarchi.web.fc2.com/works_artsmaebashi.html



写真２　低層部の外壁をアルミの「パンチングメタル」が柔らかく包んでいる




写真３　パンチングメタルの孔の位置に合わせた「アーツ前橋」のアートなロゴの看板



写真４　階段の途中に現れたハンチのついた梁。側面にスラブを撤去した跡の荒々しい面を残している



写真５　１階と地下階のギャラリーがエスカレータを撤去してできた吹き抜けを介してつながる



写真６　１階ギャラリー天井を走るデザインされた空調ダクト



写真７　地下ギャラリーに降りる階段の裏側天井を階段と同じ仕上げにしている。これもアート？



写真８　西エントランス部分の夜景。左がカフェ、右がショップ

ルポ 4

# 「ごちゃまぜ」のまちづくり Share金沢

本田隆作

株式会社 昭和設計

## はじめに

福祉施設や高齢者施設といえば、どのようなものを想像するだろうか。ほとんどの施設が敷地内に単体の建物があり、その建物内で利用者がサービスを受ける。どちらかというと施設は閉じられた印象だ。

筆者のように設計を生業とする者としては、その用途を問わず、まちに開かれた建物、社会との繋がりのある建物をつくりたいという理想を持っているだろう。しかし、福祉施設や高齢者施設のように、セキュリティやプライバシーを優先する施設は、開かれた建物から遠ざかってしまいがちである。

セキュリティやプライバシーを大事にすることは大切なことであるし、その条件を最優先することが正しい場合もあるだろう。しかし、一番大切なことは施設で生活する人が、自宅で生活する人達と同じように人間らしく生きることだ。社会の中で障がい者や高齢者、健常者が共存し、支えあう世の中が理想的な社会ではないだろうか。そのためにどうすればよいか、真剣に考えなければいけない。

そんな理想を実現した施設が、今日本で注目を集める「Share金沢」である。

## Share金沢の概要

金沢駅から南東に車で約20分。金沢市郊外の若松町に「ごちゃまぜのまち」Share金沢はある。既存樹木が豊かな元国立病院の敷地約36,000㎡に25棟が分散配置されている。障がい児が入所する福祉施設、サービス付き高齢者向け賃貸住宅（以下「サ高住」と略）、学生向けの格安賃貸住宅、商業施設が「ごちゃまぜ」に配置されている。



障がい児の入所施設は定員30名、サ高住は32室、それぞれ満室状態だ。学生の賃貸は８室あり現在 7 室入居中という盛況ぶりである。

安倍首相など著名人が視察に訪れたこともあり、今やShare金沢の知名度は高まっている。

Share金沢は今までの福祉施設や高齢者施設と比べて何が違うのだろうか。Share金沢を運営する社会福祉法人佛子園（ぶっしえん）、share金沢の施設長である奥村常務理事にお話を伺った。

## 佛子園の軌跡

Share金沢を運営しているのは、石川県白山市に拠点を構える社会福祉法人佛子園。

佛子園は戦後、お寺で戦災孤児や障がい児など行き場のない子供たちの入所施設として始まった。その後、社会福祉法人を取得し、障がい児入所施設やグループホームなどの事業を徐々に拡大しながら今日に至る。

そしておよそ10年前、とある町の住民からの相談をきっかけに、佛子園に大きな転機が訪れる。佛子園に相談を持ちかけたのは、小松市内の55世帯（平成20年当時）が暮らす野田町の住民たちである。その55世帯すべてが檀家であった「西圓寺」の住職が亡くなり、500年地域の核として続いた寺が荒れ果ててしまった。その寺跡地を何とかしてほしいと住民たちから懇願されたのだ。

佛子園はまちの人と２年をかけて話しあい、平成20年、西圓寺跡地を福祉施設というだけでなく、誰もが集まれる憩いの場としてよみがえらせた。寺の本堂はカフェになり、まちの新たなコミュニティスペースに生まれ変わった。さらに注目すべきは温泉。まちの住民は無料とし、誰もが利用できるようにした。お風呂あがりはカフェ兼居酒屋で団らん。障がいのある人もない人も老若男女あらゆる人が遊びに来る場所を目指した。食事の準備をするのは障がいのあるスタッフ。障がい者と健常者が当たり前にまじりあう。これが佛子園、「ごちゃまぜ」のはじまりだった。

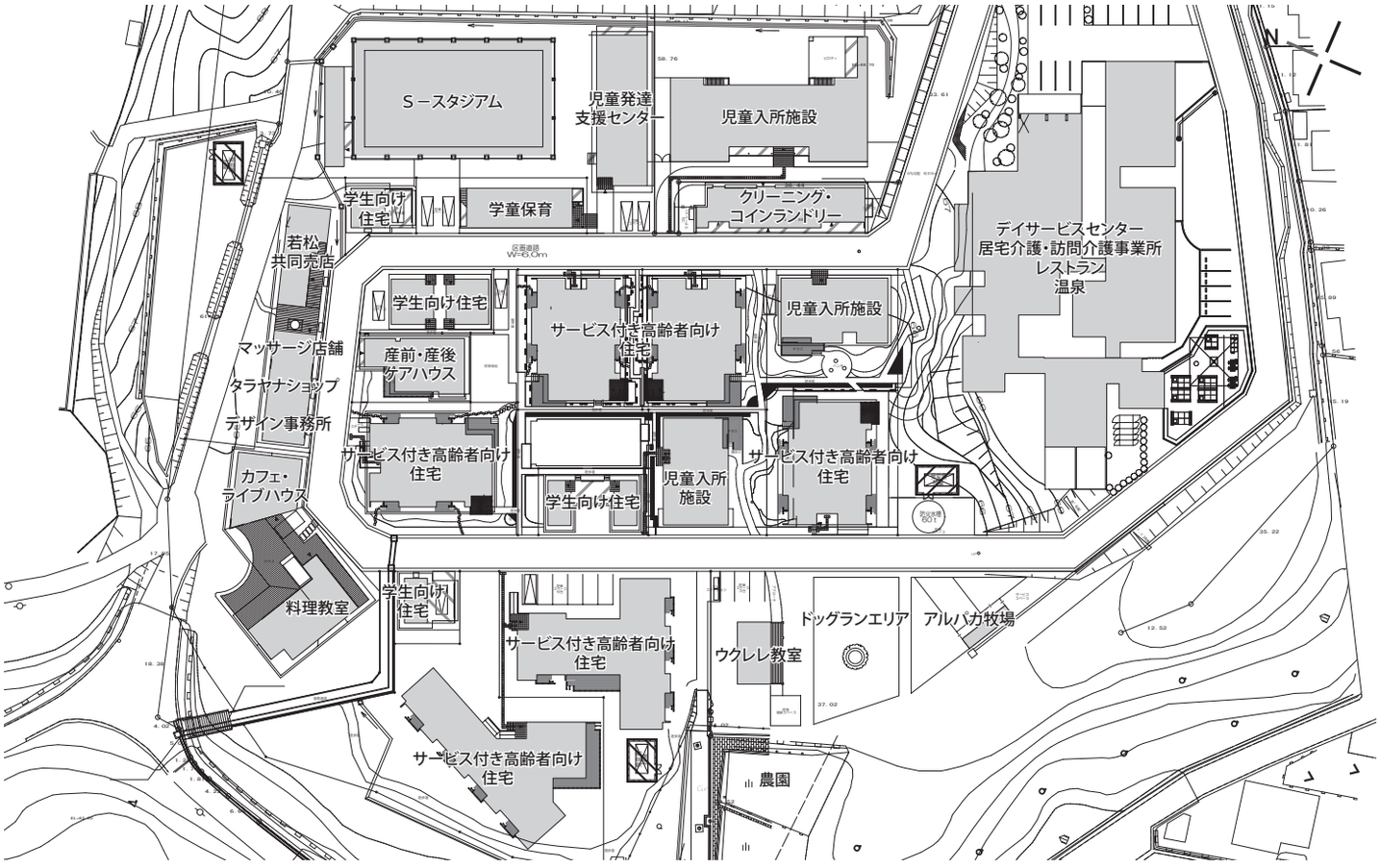
この西圓寺の事業を通して、人と人がまざり合いつながり合う力を目の当たりにした佛子園の取り組みは、その後「ごちゃまぜ」のまちづくりへと展開していく。

## ごちゃませの施設「Share金沢」

西圓寺の事業から５年後、「ごちゃまぜ」の

本田隆作

1982年兵庫県生まれ
2008年京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科卒業、同大学院修了
2008年㈱昭和設計入社、建築設計部主任




コンセプトをより発展させ具体化したのが「Share金沢」である。設計にあたっては、子供たちだけではなく高齢者も健常者も、「ごちゃまぜ」に暮らすことができる施設をどうすれば実現できるか、設計者の五井建築研究所と考えた。

配置図を見ると分かるように、児童入所施設の隣にはサ高住が、その隣には学生向け住宅が配置されている。同じ用途の施設が隣接せず、「ごちゃまぜ」に配置するよう工夫されている。宅地分譲地にあるようなフェンスや垣根は一切つくらないことで、毎日隣に住む人の気配を感じながら生活することができる。

その考えは外観デザインにも影響を与えている。まち並みが均質にならないよう、道路に対して平入りと妻入りを混ぜて配置している。外壁の素材や色も全体のバランスを見て均一にならないようにしている。





「ごちゃまぜ」の考えは敷地内にとどまらない。この建物を実現するには地域との信頼づくりがかかせなかった。Share金沢を開設することが決まってから約１年２ヶ月の間、町会やPTA、小学校、青年団、消防団との対話を重ねた。佛子園は白山市では名前が知られていたが、金沢市ではあまり知られていなかったこともあり、最初はなかなか理解してもらえなかった。それでも何度も説明に行くうちに徐々に理解してもらえるようになった。

町の人と話をしていく中で次のような意見がでた。Share金沢の敷地を通り抜けることができるようにしてほしいというものだ。実は昔、町の人達は国立病院の敷地内を通って隣地の雑木林に果物を採りに行っていたそうだ。国立病院が撤退し、フェンスが設けられてから通り抜けができなくなってしまったと言う。町に対して施設を開きたい佛子園にとっては願ってもない意見であった。その意見を取り入れ、メインの入り口だけでなく、誰もが自由に敷地内に入り、雑木林へ通り抜けられる出入口が設けられたのである。

Share金沢には様々な仕掛けがある。中心となる施設は西圓寺の事業で好評だった温泉とレストラン。その施設にデイサービスを併設させることで、デイサービス利用者と一般利用者との交流が生まれる。実際に温泉に来た



サ高住の住民や、一般利用者が「面白そうだ」と感心を持ち、デイサービスの活動に参加している。

「若松共同売店」では、日用品や生活雑貨、子供たちが喜ぶ駄菓子も売られている。この売店を運営するのは、サ高住に住む高齢者が中心。仕入れから販売までを行っている。サ高住に住むだけではなく、自分が主役となって活躍できる場所がある。近年核家族化が進み高齢者と触れ合う機会が少なくなっているが、この共同売店で子供たちは高齢者と触れ合うことができる。




「アトリエ付学生住宅」は、一見住宅に見える建物がアトリエで、その横に併設されるキャンピングカーが住居だというユニークな住宅だ。学生は条件付きで格安で住むことができる。その条件とは、施設内で月30時間のボランティアを行ってもらうというものだ。しかし決して強制するのではなく、自分でできることを見つけて自主的にボランティアをしてもらう方針である。学生と障がい者や高齢者との積極的な関わりを生み出す仕掛けだ。



その他カフェ・ライブハウスやクリーニング店、料理教室、ボディケア、ウクレレ教室などの個性的な店がある。カフェの前にはスピーカーが置かれており、ここちよい音楽も聞こえてくる。




全天候グラウンドやアルパカ牧場、ドッグラン施設も人々の暮らしをより魅力的なものにしている。地域の子共たちもアルパカに会いによく訪れるそうだ。これらの施設は、「こんなものがあったら楽しそう」と素直に思えるものばかりである。



## 障がい者の働く場所

先述の商業店舗はそのユニークさもさることながら、実はこの地域に建てられていること自体が特筆すべき点といえる。この敷地は第一種低層住居専用地域に属する。つまり通常であればこの地域に商業施設を設けることはできない。この施設でそれを可能としているのは、用途を「就労支援施設（授産施設）」として申請しているからだ。佛子園が運営する障がい者福祉施設の利用者が働く場所になっているのである。

## Share金沢へと繋がる就労支援事業

近年障がい者の就労支援施設が増えてきているが、障がい者の就労問題に真っ先に取り組んできたのが佛子園だ。

就労支援事業は佛子園が県内で103もの事業を運営している中でも、主要な事業の一つである。そうして培ってきた経験の中で、Share金沢の考えに繋がることになった２つの事業を紹介したい。

**日本海倶楽部**

平成10年、石川県の奥能登に障がい者の入所施設を開設した。奥能登は過疎地で、住民の多くが大阪、名古屋に出稼ぎに行く土地柄であったため、障がい者が地域で仕事を見つけることは難しかった。そこで佛子園は、入所施設と職場を一緒につくる必要があると考えた。さらに奥能登で仕事がない人にもそこで働いてもらえればと思って始めたのがビール事業である。

約20年前、大企業以外でも醸造免許を容易にとることができる規制緩和に伴い、日本中で地ビールメーカーが多く誕生した。その流れにのり、奥能登の入所施設のすぐ横にビール工場をつくり、できたてのビールを楽しめるレストランをつくった。

この地ビールは、今では全国170店舗で飲むことができる。平成26年には日本で優秀なビール工場が表彰される「ブルワリー・オブ・ザ・イヤー」を受賞したほどの実力を持つ。

このビール工場とレストランが「日本海倶楽部」であり、佛子園が初めて障がい者の職場づくりに取り組んだ事業だ。

**鬍鬚張魯肉飯（ひげちょうるーろーはん）**

佛子園は障がい者の就労場所として台湾料理のファーストフード店も運営している。「魯肉飯」という、豚のほほ肉を醤油ベースで煮込んでご飯にかけて食べる台湾料理をメイン商品としている。佛子園はファーストフード店の運営経験はなかったが、競争相手が少なかった台湾料理に目をつけ、事業を展開してきた。

**佛子園の考える就労支援**

日本海倶楽部と鬍鬚張魯肉飯に通じる佛子園の就労支援の考え方は、単なる福祉事業としてではなく、ビジネスとして経営を成立させることである。そのために、競争相手が少ない事業に注目した事業展開を図る。また、障がい者が働く場所であるから、一般的な商業店舗のように売れなくなったからといって簡単に閉めることは許されない。事業を継続していくことが何よりも重要だ。

Share金沢も約40名の障がい者が働きに来ている。これまでの就労支援事業や西圓寺の事業を経て、Share金沢というまちが生まれている。

## 「ごちゃまぜ」の考え方

佛子園が使う「ごちゃまぜ」とは、社会的に弱い立場にある人々を排除せず、共に支えあって生活していこうという「ソーシャルインクルージョン」といわれる考え方に通ずる。日本ではこの考え方を地域包括ケアシステムの実現により目指そうとしている。しかし日本の地域包括ケアシステムは高齢者が中心となっているのが実情である。急速な高齢化という日本独自のやむを得ない背景があるとはいえ、本来「ソーシャルインクルージョン」には障がい者や子供も含まれるはずだ。さらに言えば、福祉サービスや医療の提供を受ける必要のない人達も含め、地域のあり方を考えていかなければ、本来の地域包括ケアシステムの実現には至らないというのが、佛子園の考える「ごちゃまぜ」である。

CCRCという言葉はご存じだろうか。アメリカで生まれた概念で、高齢者を元気なうちに地方に移住させ、必要な時に医療と介護のケアを受けて住み続けることができるまちのことである。これを日本では「生涯活躍のまち」という政策で取り組んでいこうという国の動きがある。高齢者の地方移住を促すことで首都圏の人口集中の緩和と地方の活性化を目指す、地方創生の取り組みの一つでもある。この考え方も地域包括ケアシステムと同様、高齢者が中心となっている。

Share金沢は日本版CCRCのモデルとして取り上げられることも多いが、先述の通り、支援を必要とする人も必要としない人も「ごちゃまぜ」にしたShare金沢はより発展的なものであり、CCRCとは一線を画するものといえる。

## 交流人口を増やす

佛子園の考え方に「交流人口」というものがある。通常の福祉サービスの場合、その施設の敷地には従業員とサービス利用者しか立ち入らない。しかしその施設を勇気をもって地域に開放し、地域の人々に来てもらうことで交流人口が増え、多様な立場の人々の相互理解が進む。そして、その施設は地域にとっても大切な場所となっていく。施設にそのような交流人口を増やすことを佛子園は目指している。

Share金沢は準備の段階から６年を経て、地域との関係を着実に築いてきた。七夕の時には、地域の子供たちが短冊を持ってきて、願いごとを書き、高齢者住宅など玄関に飾ってくれる。そして、別の日に短冊の撤去をしに訪れる。学校が指導したわけではなく、子供たちが自発的に話しあって行動しているという。

このように地域の人々から大切な場所だと思ってもらえる施設とするには、絶え間ない努力を必要とする。準備の段階から地域の人々と関係性を築くことが大切である。また施設をつくることがゴールではなく、つくった後も地域の人々との交流を続けていくことがさらに大切なのである。

## 佛子園が目指すこの先 ～B's・行善寺を見学して～

佛子園はさらに歩みを進めている。平成28年には佛子園始まりの地である白山市北安田町に「B's・行善寺」をオープンした。この施設もShare金沢同様、障がい者の就労支援施設であり、地域のコミュニティセンターでもある。



温泉をはじめ、食堂やカラオケ、保育園も整備されている。さらにフィットネスやプール、花屋まである。温泉あがりに一杯飲める「行善寺やぶそば」。筆者もここで食事をさせてもらったが、味にはかなりのこだわりを感じた。ここでも障がいのある青年が接客をしており、元気な声で対応してくれた。

施設の人達は皆元気よく挨拶をしてくれて気持ちがいい。こちらも出会う人に自然と挨拶が出来るあたたかい雰囲気がある。

設計にもこだわりがある。無垢の木材による仕上げや洗練されたデザインがいわゆる福祉施設の硬い雰囲気をなくしている。交流施設としての温もりが感じられ、同時にホテルのような、高級感も感じられる。設計のこだわりが、この施設をより完成度の高い施設としている。

佛子園は北安田町で「B's・行善寺」を拠点として居宅介護や配食サービスなども行っている。またグループホームやサ高住を街に点在させてネットワーク化し、地域全体を「ごちゃまぜ」にすることを目指している。この取り組みは「生涯活躍のまち」構想の中で「タウン型」と言われるタイプであり、地方創生の目指すべき形である。Share金沢でも敷地外にグループホームを１軒新設した。今後は敷地外でさらに必要なものを計画し、最終的にタウン型の実現を目指している。

## 他の地域で「ごちゃまぜ」のまちをつくるには

もし日本の他の地域でShare金沢のような施設をつくろうとする場合、重要となるポイントは何か、奥村常務理事に聞いてみた。

それは、「地域を知ること」である。全国の地域は同じではないので、地域事情の分析を行うことが大事なのだ。地域のキーマンを見つけることや人脈づくり、地域の人達が活躍できるまちにするために何ができるかを考える。地域の人達と交流することで気づかない地域のニーズを教えてくれる。施設の中で完結するのではなく、地域の人達がどう活躍できるかを考えることが重要なのだ。

## おわりに

これまでの福祉施設・高齢者施設との違い。それは「ごちゃまぜ」という言葉の中にある、地域へ開くという運営者の本気の覚悟だ。そして設計者もその覚悟に本気で向き合ってできたのがShare金沢である。

なお、このルポではShare金沢の本質的な魅力を伝えることに注力したために、建物の設計内容にあまり触れることができなかった。設計内容に関しては他誌（新建築2016年７月号、医療福祉建築194号）の記事を参考にされたい。

最後に、今回の取材に関してご協力下さった、Share金沢の奥村常務理事、五井建築研究所の佐藤常務取締役、明石氏に改めて御礼を申し上げます。

（ほんだ　りゅうさく）

ルポ 5

# 山梨文化会館 100年計画

## ―次の50年をめざして―

吉村英祐

大阪工業大学工学部建築学科教授

### あこがれの建築

2015年10月。私は初めてJR甲府駅に降り立った。駅の北口からデッキに出ると、2012年にオープンしたばかりの山梨県立図書館が目に飛び込んでくるが、目的はその東隣に建つ、丹下健三（1913～2005年）の設計による山梨文化会館（1966年竣工）である。山梨文化会館は、学生時代から見に行きたいと思っていた、あこがれの建築の一つである。訪問当時は免震レトロフィット工事中であったが、地下２階柱脚部での中間免震工事のためか、外観からは工事中であることがほとんどわからない。

当日は、あいにく曇天であったが*1、築50年を経た今も変わらぬ存在感に圧倒されつつ、建物の周囲をめぐり、壁に触れ、真下から見上げ、南側に広がる甲府市歴史公園から全景を眺めたりすること１時間余り。見学ツアーがあることは知っていたが、時刻はすでに午後３時を過ぎている。事前に見学申し込み*2をしていなかったが、だめもとで思い切って受付に申し出たら快く見学を許可していただき、広報室の女性の方に、諸室、コア内部の螺旋階段、食堂、庭園、屋上までをくまなく案内していただいた。

内部は竣工当時の状況をとどめている箇所が多く、また傷んだところはていねいに補修または部材の交換が行われているためか、50年という時間の重みが伝わってくる。見学者が一人であることをいいことに、案内の方に質問を連発したが、実に丁寧に答えていただいたことにも感動した。そのときに強く感じたのは、所有者の山日YBSグループ（山梨日日新聞社・山梨放送が中核）とその社員のみなさんの、山梨文化会館に対する熱い想いである。

### 明快に具現化された「コア・システム」

ここで、多くの読者には釈迦に説法であることを承知で、次世代を担う若い読者に向けて、山梨文化会館について触れておきたい。

設計者の丹下健三は、「広島平和記念資料館本館」（1955年）、「香川県庁舎」（1958年）、「東京計画1960」（1960年）、「国立屋内総合競技場」（1964年）などの設計者として知られる、世界的建築家である。その丹下に強い影響を受けた黒川紀章、菊竹清訓、槇文彦、磯崎新、大高正人らの建築家たちが中心となって、1960年代に「メタボリスム・グループ」が結成された。メタボリスムは、生物学用語で「新陳代謝」を意味し、生命が成長・変化を繰り返すように、建築や都市も有機的にデザインされるべきという理念に基づいている。山梨文化会館は、「東京計画1960」で検討された「コア・システム」が、単体建築において最も明快に具現化されたものとして、特筆すべき存在である。

丹下健三は、「建築設計は小さな都市づくりであり、都市設計は大きな建築設計である」との考えに基づき、「都市のように発展しうる建築」を追求すべく、山梨文化会館で垂直コアとしての16本の円柱と梁による立体格子的都市建築を実現した。直径約５mのコンクリート円柱のコア内部に垂直動線（エレベータ・階段）、設備スペース、倉庫などを集約し、そこから梁を南北方向に約17m、東西方向に約15m飛ばして無柱空間を生み出し、空間の自由度を高めるとともに、水平・垂直方向に増床することで、将来の「成長と変化」を可能にしている。中間階に設けられた庭園は、将来の増築スペースとして意図的に残された空隙でもある。

竣工当時の重層的なピロティが与える視覚的インパクトは、幾度かの増築・改修工事により弱まったが、いずれも丹下健三の手で行われており、外観の統一性は失われていない。

「メタボリスム建築」のほとんどが「新陳代謝」することなく老朽化し、あるいは解体されたなかで、2016年に竣工50年を迎えた山梨文化会館は、築100年をめざす「山梨文化会館100年計画」の一環として、2016年12月までの予定で免震レトロフィット工事が進められている（設計・監理は丹下都市建築設計、施工は三井住友建設）。ブレース等による耐震補強ではなく免震化を選択したのは、外観を変えないことと、大地震発生時にも情報発信拠点として機能するための最適解である。

### 100年建築の仲間入りを夢見る

故・林昌二は「私は50年もった建築は100年、100年もったものは200年もつと楽観視しているんです。まずその50年までをもた

吉村英祐

1955年大阪生まれ。1978年大阪大学工学部建築工学科卒業、1980年同大学院建築工学専攻修了。小河建築設計事務所、大阪大学助手、助教授を経て2007年から大阪工業大学工学部建築学科教授。1992年日本建築学会奨励賞、2007年日本建築学会賞（論文）受賞。博士（工学）、一級建築士。専門は建築計画学、建築人間工学、安全計画。主要共著に建築計画１・２（鹿島出版会）、建築計画基礎（学芸出版社）、建築人間工学事典（彰国社）、阪神・淡路大震災における避難所の研究（大阪大学出版会）ほか多数。

せるようにする。しかしそこからは次に使う人が時間を継いでいくしかないと思っています」と述べているが*3、山梨文化会館は、最初のハードルである50年を乗り超えた。日本の近代建築で築100年を経過した現役（竣工当初の用途が変わっていない）の建築は、大阪府立中之島図書館（1904年）、奈良ホテル（1909年）、東京駅（1914年）など、数えるほどしかない。山梨文化会館は、2003年にDOCOMOMO*4日本支部により日本の近代建築100選に選ばれたが、個人的には、世界遺産の登録をめざしている国立代々木競技場とともに、まずは国指定の重要文化財として登録され、50年後に100年建築の仲間入りをする日を夢見ている。山梨文化会館は、建築が使われ続けることの意味と大切さを、われわれに問いかけている。

※本稿で使用した断面図は、山梨文化会館に提供していただきました。記して感謝申し上げます。

（よしむら　ひでまさ）

**建築概要**（見学時にいただいた資料から）

用途：事務所　放送局

竣工：1966年

場所：山梨県甲府市北口2-6-10

規模：［階　　数］地上８階／地下２階

［延べ面積］18,085㎡（竣工時）

［高　　さ］42.9m（塔頂58.3m）

構造：RC造（大梁はSRC造）

設計：丹下健三・都市・建築設計研究所

施工：住友建設

＊1　翌日は一転して快晴になったため、予定を変更して再度現地に赴き、外観写真を撮り直した。

＊2　土・日・祝日を除く平日に限り建築見学ツアーを受け付けている。現在の申し込み方法は、訪問当時（2015年10月）と異なるようである。詳しくは山日YBSグループのホームページ（下記URL）参照。
http://www.sannichi-ybs.co.jp/

＊3　林 昌二：インタビュー 100年後の暮らしを描く、『新建築』2010年４月号、p.67

＊4　DOCOMOMO（Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement）は、1988年に設立された、近代建築と保存を目的とする国際学術組織。パリ本部のほか、日本を含めた40か国以上に支部が設けられている。



写真１　南西側からの外観見上げ



写真２　梁の増築継手が外観にダイナミックに表れている



写真３　さらに成長するかのように屋上を突き破るコア



写真４　螺旋階段を見下ろす。この階段は当時の姿をよく残している



写真５　食堂の床のタイルや家具は今も竣工当時のオリジナルが使われている

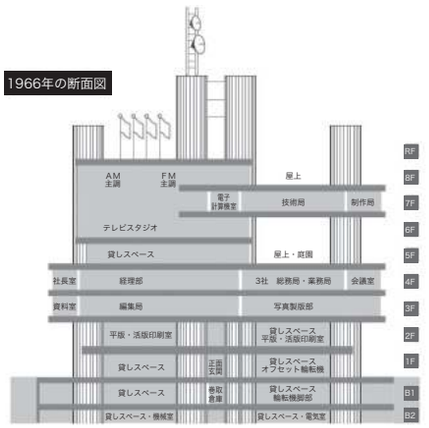



図１　1966年の断面図。５・６・８階の屋上と６～８階の３層吹き抜けが増築用スペース

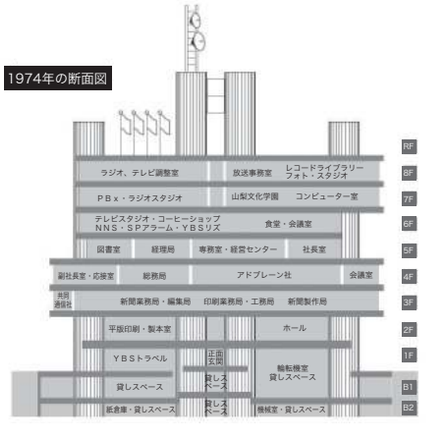



図２　1974年の断面図。北東部分６・７・８階、南東部分５・６・８階を増築

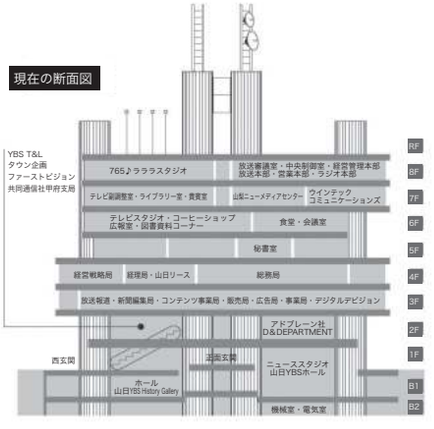



図３　耐震改修前の断面図。耐震改修直前の状態。容積率を使い切り、これ以上の増築はできない

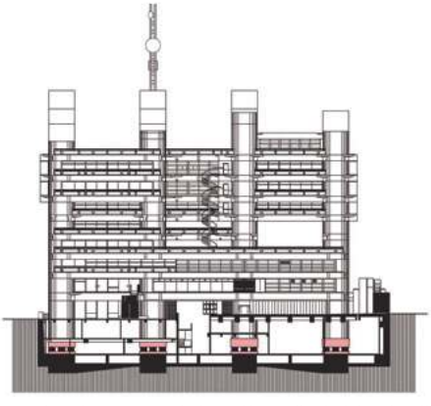


図４　免震計画図。2016年末に、地下２階の柱脚部に免震装置を設置する免震レトロフィット工事が完了予定

ルポ

6

# 都市型実験集合住宅の現在

## ―大阪ガスNEXT21の取り組み―

槻尾輝雅

株式会社 大林組 大阪本店建築設計部

### “元祖”サスティナブル建築

NEXT21は、都市居住のあり方について、環境・エネルギー・暮らしの面から提案、実証するための実験集合住宅として1993年に生まれた。そして20年余り経った現在でも時代に合ったコンセプトを掲げながら、一貫して居住実験を続けている。

このNEXT21は、大阪ガスの実験住宅としては、実は3件目である。１件目は高度経済成長期1968年の「東豊中実験住宅」、２件目は省エネに主眼を置いた1985年の戸建ての「アイデアル住宅NEXT」だが、NEXT21は、地球環境との調和を目的とした環境共生住宅認定制度における民間での認定第１号の集合住宅であり、いわばサスティナブル建築の元祖とも言うべき存在である。

その間、スケルトン=インフィルをベースにしたハイスペックな基盤をもとに、時代の趨勢や都市のライフスタイルの多様化を先取りするかたちで、モジュール化された外壁や間仕切り、設備ユニットを可変させながら幾度も改修を重ね、都市コミュニティをつくってきた。

また特に大阪では少ないとされる緑に関しても約1,000㎡の植栽を立体的に確保し、今では野鳥も飛来するような自然と人が共生する住環境ができている。

住居に必要なエネルギーについても高効率を追求し続けており、ガスを燃焼させて電気を得る時代から、ガスをエネルギー源とした燃料電池へ移行し、その燃料電池も固体高分子形から、さらに効率の良い固体酸化物形へと着実に進化し、電気や熱を住戸間で融通し合う実験にも取り組んでいる。

それらの実験も、現在は第４フェーズに入り、「人と自然の関係性の再構築」、「省エネ・スマートな暮らしの実現」、「人と人のつながりの創出」の３つをコンセプトに、「環境にやさしい 心豊かな暮らし」を目指して、今なお精力的に提案・実証が推し進められている。

### 続けてきたからこその“カッコよさ”

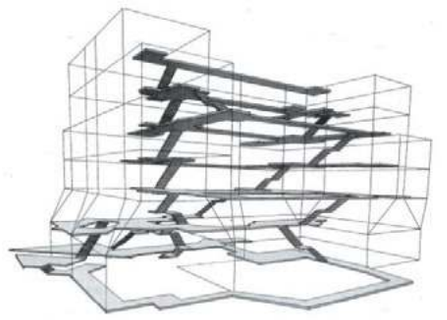
筆者が訪れたのは冬晴れの朝だった。大阪市内の中心部にもかかわらず、思いのほか静かな場所にNEXT21は建っていた。20年余りかけて成長してきた植栽と幾度も変化を重ねてきたであろう外皮が、この集合住宅の表情をつくっている。奇をてらわず真摯に実験を続けてきたことが、片意地張らない温かみを持ちながらも凛とした佇まいから感じ取れる。



NEXT21の外観

世の建築には、コンセプトに謳っていることとは相違してもファサードの美しさや整然さを求めている建築もあるように感じるが、この建築にはそれらとは異なる「最先端の実験住宅」としてのコンセプトを持ち続けてきたからこその“カッコよさ”がある。

大阪ガス エネルギー・文化研究所（CEL）主席研究員である加茂みどりさんに案内いただきながら内部へ足を踏み入れると、擂鉢状に外気に開放された共用廊下や階段が配置され、それに面して住戸の開口部が顔を出し、植栽がステップ状に点在している。ここでは共用廊下や外部階段をあえて「立体街路」と呼ぶ。建物をひとつの街とみなし、地域の街路が連続してそのまま入り込んでいるという考え方をしているからだ。



立体街路のイメージ

そしてその街路と住戸は高断熱Low-Eガラスサッシや太鼓張りの二重障子といった複数の建具の開閉具合を住戸側で自由に調整できる設えとなっており、外部温熱環境と室内、共用部と専用部、来訪者と住人、の距離間を調節しながら関係を結べる中間領域を創り出している。この領域が各住戸の立体街路への

槻尾輝雅

昭和44年９月23日生

富山県立富山中部高校、大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻修士課程を経て、平成６年4月株式会社大林組入社。大阪本店建築設計部課長。平成28年４月より現職。

開き具合に個性を持たせており、まさにひとつの「街区」としての風景をつくっている。



立体街路と街の風景

## 家族という形態が解体していく

この中間領域の考え方と実験は2007年から始まった第３フェーズで具体化するが、そこには急速に変化する家族構成とそのコミュニティの形成における課題への取り組みも重なり合っていた。

NEXT21の竣工当時は1990年代のバブル末期で、この建物の持つ可変性で多様なライフスタイルへの対応を提案するといった、ある意味スタイリッシュな観点からスタートしたところもあるが、その後、徐々に少子高齢化の進行を見越した、家族構成の変化と暮らし方への提案実験に切り替わっていったという。そして第３フェーズで中間領域の特性を活かしながら、この課題に取り組んだもののひとつが、「住み継ぎの家」である。中間領域の考え方を可変する住戸のプライバシーラインの二重化に発展させ、シッターやヘルパーなどの外部サービスが必要な家族形態や来客のある在宅ワークなどのライフスタイルへ対応する住居の実験を行っている。






「住み継ぎの家」

従来の夫婦＋子供２人の典型モデルを想定した住宅供給の時代は終わっており、今後の日本はさらに「家族」という形態の本格的な解体がより一層進むため、そのときの住宅はどうあるべきかという課題に建築家は真剣に向き合っていかなければならない、と加茂さんはおっしゃっていた。つまりは、人が暮らすという形において血縁というものがあまり意味のない、あるいはそれに頼れない時代になるということだろう。シングルマザーやシングルファザーのみならず、高齢の親を持つ独身者、両親を亡くした無職のニート、といった従来の枠にはまらない「解体された家族」が増えていく中で、それらの人たちが外部のコミュニティとどう関係を持ちながら暮らしていくのか、その器としての住居とはどうあるべきかが、我々に問われているのだ。

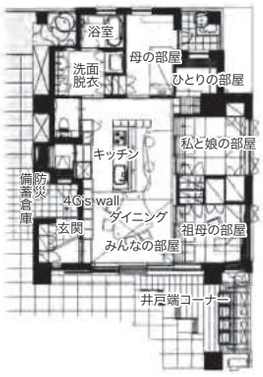





「自立家族の家」

そういった点で、様々な間取りの住戸が提案されている中では、血縁のない人同士のシェアハウスとも受け取れる303号「自立家族の家」は非常に興味深い。また「2020年の住まい」をテーマとしたコンペで選定され、設計された住戸では、世代の異なる４人の女性（4-Girls）が暮らす想定の404号「4G HOUSE」も示唆に富んでいる。もはや血縁が絶対ではない家族の結び付きと暮らし方はどのようになるのか、住居としてのひとつの形の提案と言えるだろう。






「4G HOUSE」

## 集合住宅の いわば“F-1マシン”

ちなみに、NEXT21は大阪ガスの「社宅」である。そして同時に「ハイスペックな実験住居」でもある。加茂さんによれば、前述のコンペの審査員を務められた建築家の先生方からは、「NEXT21は集合住宅界のF-1マシン」だと言われるそうだ。F-1レースの実践で実験を重ねて得た技術は、いつかは大衆車に普及する。NEXT21での実験も、特にエネルギー技術の成果はいずれ一般住宅にも普及するだろう。ただし原因不明のピットインや突然のエンストがNEXT21の住設備でも起こり得る故に、社員が住む前提の社宅なのだが、家族の本格的解体の波は大阪ガスの社員にも例外なく及ぶであろう。また特に都心部では住民の志向の多様性から必然的にコミュニティも重層化・複数化する。そのような状況の中で、今後どのような実験が始まるのか、個人的にも注目していきたい。



現地での加茂さんへの取材風景

（つきお　てるまさ）

ルポ

7

# 地域を変える企業の取り組み

## ―銘建工業社長・中島浩一郎氏に聞く―

岡田　健

株式会社日建設計

戸川勝之

株式会社安井建築設計事務所




図１　銘建工業（岡山県真庭市）の地理的環境

### はじめに

日本随一のシェアを誇る集成材生産を主力事業とした木質建材メーカーでありながら、生産工程で生じるおがくずを用いた木質バイオマス発電や燃料用ペレットの製造・販売に早期から取り組み、所在する岡山県真庭市と官民一体となってバイオマス事業を推進している銘建工業。

藻谷浩介氏のベストセラー「里山資本主義」（NHK広島取材班と共著）で取り上げられたことで一躍全国から脚光を浴びた。その後も大型バイオマス発電所の設立・稼働開始やCLT事業の推進等の取り組みが進行していると言う。その進捗や事業の展開が地域にもたらした変化、また地域に根差した企業として地域社会との関係の在り方について、社長の中島浩一郎氏に話を伺った。

### バイオマス事業が地域を変えた

#### ■銘建工業での取り組み

中島氏の取り組みがなぜ全国から注目を集める画期的なものであるのか。それを理解するには、まず、日本の林産業界・木材業界の特殊な事情を知る必要がある。

今でこそ林産業は斜陽産業の代名詞のような状況に陥っているが、1960年代半ばに始まった住宅需要の急激な高まりの中、1980年頃をピークとした木材バブルが起こり、木材の値段が異常に高騰した時代があった。この時代、住宅用の製材が非常に高く売れたことから、例えば柱の分が取れれば十分な利益が出るため、残った材は廃棄してしまうといったことが当たり前になっていったと言う。

日本人は、かつては木を資源として大事に無駄なく使うことに優れた民族であったが、この木材バブル期を経験したことで「木をす

銘建工業社長　中島浩一郎氏

1952年岡山県生まれ。横浜市立大学卒業後、銘建工業に入社。2004年より現職。小断面、中断面 の集成材では国内トップシェア企業に育てる。98年に大型ボイラーによる木質バイオマス発電をスタート。04年より木質ペレットの生産も手掛け、国内生産約12万トンのうち、６分の１を生産しトップシェア。10年からは新素材のCLTを開発し、中高層建築材として普及に努めている。



中島浩一郎氏

岡田　健

株式会社日建設計　エンジニアリング部門
構造設計グループ　主管

戸川勝之

株式会社安井建築設計事務所　設計部
設計主幹

べて使い切る」という考えが忘れ去られてしまったのだ。その後、木材産業は凋落の一途を辿ったが、バブル期当時のビジネスモデルから脱却できないため、山にお金が残らず、森林の維持管理や設備への投資もできないという悪循環の中にある。

そんな中で、中島氏に転機が訪れたのは、1982年。アメリカの小さな製材所の視察に随行した際、その製材所が木くず・おがくずなどの製材廃棄物を燃料として稼働するタービンを有し、発電していることを知った。自分たちでも手が届く範囲の装置に感じた中島氏は、1984年、175kWの発電機を自社に導入。出力自体は少なかったが、夜間はその発電量で木材乾燥機が大体まかなえた。熱利用も併せて行ったためコストパフォーマンスが非常によく、１年半くらいで初期投資が回収できたと言う。

手応えを感じた中島氏は1998年に10億円を調達して発電に特化した1950kWの発電機を導入。その効果は「里山資本主義」の記述によれば、電気は電力会社から買う必要がなくなり１億円の支出節減、加えて余剰電力の売電によって５千万円の収入、さらには産業廃棄物処理費の支出2.4億円も節減され、合計年間約４億円の利益を銘建工業にもたらすようになったとある。

**■地域を挙げての発電事業**

どこの製材所も当たり前のように産業廃棄物として費用をかけて処分しているヒノキやスギの木の皮などの製材廃棄物を、自分たちで発電する燃料にすることができる。このことを意識し出してから、中島氏はいつか地域を挙げてのバイオマス発電所ができないかということを考えていたと言う。それが実現したのが銘建工業をはじめとして、真庭市や地元の企業・団体が共同出資して設立された「真庭バイオマス発電株式会社」である。銘建工業の約５倍の出力を誇る10000kWのバイオマス発電所は2015年に稼働を開始したが、初年度は98.5%という驚異的な稼働率を記録し、非常に順調な滑り出しを見せていると言う。

中島氏がこの事業で特に心配していたのは、燃料が集まるかどうかであったそうだが、供給量確保のための準備を地域が連携して入念に進めたおかげで、今では鳥取や兵庫、広島の発電所に出荷するほどの燃料が集まっているとのことである。

発電所に併設されているバイオマス燃料集積地には、商材にならない木の皮や枝、小木、そして製材所から出るおがくずを積んだトラックが多い時で１日100台くらい出入りするが、これらはここで発電燃料として購入されることになっている。山で放置されて二酸化炭素になるだけだったものを運びだしてきてここに運べばお金に変わり、エネルギーに変わる。このことが理解されるようになったことで、地域における林産業、木材産業に対する意識が大きく変わってきたと中島氏は言う。

**■バイオマス事業がもたらした地域の変化**

バイオマス事業への取り組みは、銘建工業が所在する真庭市にも大きな変化をもたらした。発電所ができてからというもの、かつて



写真１　真庭バイオマス発電所



写真２　発電燃料となる木くず



写真３　ボイラーで燃料が燃えている様子

は丸太を荷台に乗せたトラックが行き交っていたものが、今では木くずや木の皮、枝といったものを運ぶための箱車が増えたという。

また、メディアへの露出が増えたこともあり、銘建工業の事業に共感して全国から若い人材が集まっていると言う。産業があれば、人も集まり、人が集まれば活気が生まれ、町が変わる。今では真庭市の保育園が不足している状態となっており、合計特殊出生率は今や2.21人（真庭市調べ）。美味しい食事ができる店も増え、どこに行こうか迷うほどだそうだ。

バイオマスへの取り組みは元々、「21世紀の真庭塾」という地元企業の勉強会が発端となって起こった動きだと言う。それが今では行政にも浸透しており、真庭市は「バイオマスタウン・真庭」を掲げ、林業・バイオマス産業課という全国でも珍しい専門部署を設置して、企業の取り組みを支援している。中島氏は、真庭市の場合を「行政はお金・人の両面で、企業の前向きな話に対して応援するのが上手だった」と評価する。このような企業と行政の健全で前向きな関係性が、真庭市の成功の鍵の一つであったと感じられた。

## CLTで林産業界を変える

### ■CLTを取り巻く世界の動き

銘建工業がバイオマス事業と並んで現在力を入れているのが、CLT（Cross Laminated Timber）事業である。CLTは挽き板を並行に並べた板を３層から９層程度重ねて接着したパネル状の木質建材の一種だが、１層ごとに繊維方向が直交するように重ねられている点が通常の集成材と異なっている。ヨーロッパやカナダで現在急速に需要が拡大してきており、従来の木造では考えられなかった10階建の高層建築への適用も事例として出てきている。

中島氏によれば、元々は、オーストリアやドイツ、スイスなどの取り組みが進んでいたが、今では、従来木材産業がほとんどなかったイギリス・ロンドンの郊外で3000棟規模のCLT住宅を建てるプロジェクトが進んでいるそうだ。これまで想像もしなかった動きが次々と出てきているそうで、循環系材料である木質構造材を取り巻く環境が転換点を向かえていると感じているとのことであった。

ヨーロッパでは企業側も急速に体制を強化し人材育成に注力しているようで、中島氏が訪れた企業では、数年前は設計人員が10人足らずだったのが、今では70人規模の設計体制になっていると言う。



写真４　工場に平積みされているCLT

### ■CLTで林産業が変わる可能性

中島氏は早くからCLTの存在に着目し、日本CLT協会を設立して、日本への導入に尽力してきた。その結果、昨年CLT告示が施行され、通常の建築確認の範疇でCLTによる建物の設計が可能となったが、中島氏はさらに日本製CLTの輸出を目論んでおり、準備を進めていると話す。

輸出に関して言えば、ヨーロッパでは林産業、あるいは木材産業が各国の貿易、特に外貨獲得の観点で重要な位置を占めている。中島氏によれば、針葉樹の人工林を有する先進国で、積極的な輸出が実現していないのは日本だけだそうだ。日本の林産業は、かつての木材バブルの影響が尾を引いて数多くの課題を抱えており、輸出に耐えられるような品質およびコスト競争力のある木材を安定的に大量に供給できるような仕組みが整備されていないのだという。

例えば、銘建工業は、森林資源に恵まれた真庭市にありながら、集成材用の木材の多くをヨーロッパから輸入しているが、その理由は、ヨーロッパの林産業は品質・コストともに競争力が高い木材を安定的に供給できる管理体制ができており、資源とお金が循環的に回るためのインフラが整っているためであると言う。

輸出に打って出るためには、世界的な競争に耐えうるレベルの品質およびコスト競争力が必要となる。日本の林産業の現状からはかなり高いハードルと思われるが、中島氏はCLTの事業において、輸出は必須と考えているようだ。驚いたことに、スウェーデンやフィンランド、オーストリアでは年間生育量の60%以上が伐採されているのに対して、日本の森林は年間生育量の約１億㎥に対してたった20%の2000万㎥程度しか伐採されていないそうである。逆に言えば、日本の森林資源はまだまだ使うことのできる余地が十分にあると言うことで、マーケットのニーズに合った品質およびコスト競争力のある木材を供給できる技術および管理体制を整備する方向に業界全体が動き出せば、林産業は地域のみならず日本という国を支える重要な産業に変貌する可能性すらあるかもしれないと感じられた。

## 森林は産業資源であり、経済の糧

今回の取材を通じて、私たちは、森林・木材に対する既存の見方を大きく変えるべき時期に来ている、との思いを強くした。

今回のバイオマス発電事業の事例からもわかるように、林産資源は立派なエネルギー資源である。事実、中島氏によれば世界的には、木材は燃料として見られており、世界で消費される木材のうち、約60%は燃料利用であると言う。例えば、世界第２位の木材消費国はインドだそうであるが、実に90%が燃料として消費される。地下資源に乏しく、また経済的にも原油を輸入する余力に乏しい発展途上国にとって、木材は貴重な燃料＝エネルギー資源なのである。実際に、日本でもかつては、エネルギーは薪や炭として中山間地域から都市に送られており、多くの山は伐採により禿山となっていた。

戦後、エネルギーを地下資源である化石燃料に依存する社会となったことで、林産資源はエネルギー資源としての価値を顧みられることがなくなってしまったが、インドと同じく地下資源に乏しい日本において、エネルギー源を原油や原子燃料と言った地下資源の輸入に頼っている現状は、日本が世界でも有数の森林面積を有する森林国であることを考えれば、いびつな現状であると認識すべきなのかもしれない。

林産資源の最大の利点は、循環系の資源であることである。地下資源である化石燃料は有限であり、いつかは枯渇すると考えられているが、林産資源は生育量の範囲で伐採すれば、永続的に資源を得ることができる。日本は地下資源を外国から輸入し続け、木材市場も外国産材に奪われてきたことで、自国の地上資源である森林資源がかつてないほどの豊富な蓄積量に達するという結果となっているが、それを使う術を失っているのが現状である。逆に言えば、使う術が整えば、将来に大きな可能性を有している現状とも言えるだろう。

もちろん現実は厳しく、木材をエネルギー用に伐採して採算が合うのは発展途上国であり、先進国では、単にエネルギー利用だけでは産業としては成立しないと考えられている。発展途上国では木材生産量の８割が薪炭用材であるのに対し、先進国では薪炭用材は15%程度であり、残りは建材やパルプなどの産業用材であることがそれを物語っている。

しかしながら、銘建工業のバイオマス発電事業の事例からわかるように、木材をエネルギー資源として利用することは、企業体力を改善し、結果として製材業での競争力を向上するには十分な貢献を果たしている。木材のエネルギー資源としての利用法は発電に限らず、例えば、銘建工業ではおがくずなどを薬のカプセル剤程度の大きさに固めた燃料用の木質ペレットを製造・販売しているが、燃料として熱利用を考えれば、マーケットはさらに拡大し、その利用効率を高度化することができる。林産業が今後、産業として成立するためには、木材をエネルギー資源として高度に利用し尽くすことが欠かせないというのが中島氏の認識であった。

日本は国土の約2/3が森林という世界有数の森林国である。しかしながら、私たちは普段森林を目にする際、その四季の変化の情緒的な美しさや自然環境的な意義を感じている一方で、そこに石油や石炭、鉄鉱石などと同じような産業資源として経済的価値を見ているだろうか。製材くずを廃棄物と見るか、資源と見るか、といった生産者側の意識の転換と同様に、緑の山々を風景と見るか、日本を支える可能性のある資源と見るか、利用者側の私たちの意識の転換も必要であると感じた。

## おわりに

### ■地域社会を支える企業の在り方

例えばかつての炭鉱の町の繁栄が示すように、産業およびその産業の主体となる企業の存在は地域活性化のきわめて有効な起爆剤であるのは間違いない。その観点から、これまでも数多くの企業誘致が日本全国で行われているが、昨今ではその根差す地域社会といかに良好な互恵関係を構築できるかも注目されている。企業はそのビジネスの舞台であるグローバルな社会と地域のローカルな社会をつなぐパイプ役でもある。地域社会を持続的に支え、常に外部と交流し、継続的に地域を活性化していくことができる存在として、地域に根差す企業の在り方が問われていると感じた。

取材の最後に、地域社会を支える企業の在り方について中島氏に問いかけてみた。返ってきた答えは次のようなものであった。

「一つは『続けること』だと思います。そして、損ばかり出していても続かないのは確かですが、どこかで『幸せ』みたいなものと繋がっていないと続かないわけです。今の時代、『幸せ』は複雑でわかりにくいが、逆に『不幸』というのは非常に具体的です。具体的な『不幸』から極力遠いところにある、というのが『幸せ』につながっているのではないかと思っています。そして『幸せ』と言えば、勉強する幸せ。わが社にもこのところ様々な人材に来ていただいていますが、意識して社外や外国に行って見させることができるようにしたいと考えています。地域は個人であろうが会社であろうが、やはり元気のある個体数が大事。元気のある個体数が増えれば、かなり良くなるんです。」

（おかだ　けん・とがわ　かつゆき）

ルポ

8

# 空き家再生等を通した過疎化が進む村・まちの活性化

田口太郎

徳島大学大学院総合科学研究部
准教授　博士（工学）

田口太郎

1976年　神奈川県生まれ。
1999年　早稲田大学理工学部建築学科卒業。
2001年　同大学院修了。
2002年　小田原市政策総合研究所。
2004年　早稲田大学理工学部建築学科助手。
2006年　新潟工科大学建築学科准教授を経て、2011年10月より現職。
専門は地域計画。
市民による主体的なまちづくりのプロセス研究をテーマとして研究及び実践を行っている。



「移住」のため借り受けた空き家

## はじめに

現在、地方創生が様々な分野で叫ばれているが、その影響が特に大きいといえるのはこれまであまり光の当たってこなかった過疎地域である。多自然居住地域とも呼ばれ、自然の中でのびのびと暮らすライフスタイルは、都市部でキャリアップを目指すライフスタイルと対比して見られ、あこがれでもあり、老後の夢とも思われてきた。しかし、2011年３月の東日本大震災に伴う原発災害を契機に東京を始めとした都市部での生活に疑問を持った層が多く出現し、都市から田舎、という人の流れが大幅に拡大した。地方に移住した若者たちは、地域に埋もれていた様々な地域資源を外に発信することで価値化し、地域の可能性を実践を通じて表現している。

本稿のタイトルにもなっている「空き家再生」はまさに地域に埋もれた資源であり、その再生を通じて様々な場が作られている。筆者も築80年の民家を借り受け、リノベーションした上で家族とともに生活しているが、それも含めて紹介したい。

## 地方創生の中での移住者獲得競争

2005年をピークに我が国の人口は減少局面へと転じている。さらに2015年に日本創生会議により発表された「消滅可能性自治体」のランキングは人口減少に悩む過疎地域に大きな衝撃をもたらした。国はまち・ひと・しごと創生本部が中心となり、各自治体に「人口ビジョン」「地方創生総合戦略」の策定を求め、大半の自治体がそれをまとめている。

過疎化に悩む地域は人口ビジョンの策定の中で、人口獲得の切り札としての「移住」を取り上げ、今日ではさながら「移住者獲得競争」が繰り広げられている。東京を始めとした大都市で開催される「移住フェア」には全国の自治体がブースを構え、趣向を凝らした移住者誘致が行われている。本来、都市から地方への人口の流れを作り出そうと始まったこういった取り組みは、いつしか地方同士の消耗戦ともなりつつある。もともとは、都市部への人口集中への懸念、人口減少に対する課題意識から始まったはずの移住促進において、過疎地同士がしのぎを削る構図はいささか矛盾にも見えるのである。

また、「お試し居住」と称する移住体験施設も古民家改修により多数整備されるようになった。移住者にとってはかつてと比較にならないほど多くの情報や支援制度の中で移住先を選択することが出来るようになった。この事自体は地方移住のハードルが大きく下がった点、都市にとって非日常でしかなかった過疎地（多自然居住地域）が身近な存在となり、ライフステージを過ごす一つの舞台として現実味を帯びてきているという点で大きな可能性をもたらしたとも言える。

## “諦め感”が広がる地域と移住者の役割

一方、地域の現場に目を向けると、移住の受け入れに対して必ずしも積極的ではない地域が多くある。というのも、過疎・高齢化に悩む地域は1950年代からただひたすら人口減少が続いており、移住者といえば配偶者として移り住んでくる程度であった。それ故、地域には「諦め感」と言われ、人口減少が進んでしまった現在となってはもはや手の打ちようがない、という雰囲気が広がっている。「地方創生」の名のもとに地域に新しい活動を生み出そうにも、地元から返ってくる言葉は「何をいまさら」であることも多々ある。つまり、地域の側にとって多自然であることや歴史的な文化や技術があることはいわば当たり前であり、価値のあるものではない。故に外から見れば宝である様々な歴史や文化、生活上の知恵も地域からすればただの“古臭いもの”と認識されていることも多い。

こうした地域に都市から移り住む若者が入っていく、ということはどういうことか。最初は地域の側も「どうして、こんな何もないところにわざわざ住むのか」という疑問を持ち、不思議な人として見ている。しかし、移住者と地元住民のコミュニケーションは、移住者の地域を選択する動機（つまり地域の価値を評価する声）の伝達により、地域住民自身の地域に対する再評価を生み出す。これまで当たり前としてみていた地域は、いつしか自分たちの誇りとしての地域へと変わっていく。地域づくりの世界では、おうおうに「ソトモノ」や「若者」の役割として外部から地域を評価する、ということが言われている。移住者は、地域にとって最も身近な外部者で

あることから、地域にとっては自らの価値を再認識するための触媒的な役割を担うのである。

## 地域における「空き家」の意味

昨今、空き家の増加は社会問題化し、空き家対策特別措置法の施行もあり、その活用は社会的課題となってきた。過疎地域でも空き家は多く存在しており、移住者の貴重な受け皿となっている。一方で、空き家の存在自体は持ち主にとって大きな懸案事項というわけでもないことからそのまま放置されるケースは多い。移住者が借りようとしても、空き家には多くの家財道具が入っていることもあり、なかなか借りることは難しい。また、いったん放置されてしまうと建物の状況は一挙に悪化することから、多くの自治体では空き家を多数把握していても、実際にすぐ住むことが出来る空き家自体は限られているのが現状である。

とは言え、過疎地域における空き家は伝統建築であることも多い。地域における伝統的な住宅建築はその地域の気候条件や建築文化をベースに造られているため、それ自体が地域の価値とも言える。また、こうした伝統的な建築群の存在が地域の豊かな景観を形成し、都市住民にとっての地域の価値ともなっている。

地域にとって空き家は、かつてそこに居住者が居た証拠でもあり、空き家の増加は地域から人が居なくなっている現実を地域が認識を強くするメディアともなっている。空き家化することで、集落から灯りが消え、草が生える事により景観は悪化する。日常的な風景の中に荒廃した景観が入り込むことにより、景観を通じた地域の衰退を感じ取るのである。

こうした状況にある地域に移住者が入り、空き家が再び活用されることは、暗くなった集落の夜に再び明かりが灯ることを意味することでもあり、地域にとっては文字どおり明るくなる材料ともなる。

## 空き家の改修を通じた地域の活性化

筆者は徳島県佐那河内村（さなごうちそん）、という人口2,300人ほどの村に一昨年、空き家を借り、改修した上で移り住んでいる。「移住」というと大都市から農村部への移動をイメージするが、我が家にとっての「移住」は徳島市から隣接する「村」への転居であった。徳島県は四国東部に位置する小さな県である。筆者は徳島市の大学に地域計画を担当する教員として勤めており、当初は市内に居を構えていた。しかし狭い徳島県である。道路はかつてとは比べ物にならないくらい整備され、農村部への調査も気軽に行けるようになった。ともなれば、農村部から都市部への通勤も比較的楽に行うことも出来る。実際に徳島県唯一の「村」である佐那河内村は役場から徳島市役所や徳島県庁まで車を使えばわずか30分という好立地にある。であるならば、と家族ともども子育て環境も考えて村に移り住んだのである。

村の移住交流支援センターから借りられるが改修が必要な空き家の紹介を受け、半セルフビルドで改修を行った。もともと地域社会との交流を強く希望した移住であることや、筆者自身が地域づくりを研究テーマとしていることもあり、自宅ではあるが、地域づくりの実践の舞台としての改修である。移り住んだ集落は筆者の転居前で９世帯。高齢化率は50％を超え、私よりも若い住人は居なかった。一方で、佐那河内村には古くから常会（じょうかい）という町内会組織のような組織があり、すべての集落で毎月欠かすことなく集会が開かれている。筆者も改修中から常会には参加しており、こうした会合や草刈り、川掃除などの出役を通じて集落との交流を図っていたこともあり、地域との関係は転居前から良好。転居した後は集落の方々が度々我が家に寄っては野菜や果物などそれぞれの家で収穫したものを届けてくれる。筆者は地域の祭りを始めとした行事にも参加することで地域との関係を育んでいった。結果として、地域は活力を取り戻す、とまでは言えないが外部からの移住者に対して多少なりとも免疫がついたと思われる。先日、ついにもう１軒あった空き家に筆者よりも若い子育て世代が入居した。地域として大きく変わったわけではないが、こういう些細な変化が地域の再生においては極めて大きな一歩となるだろう。

諦め感が広がりつつある地域であるが、しばらくなくなっていた外部との交流が昨今の移住の流れの中で進み、住民自身による地域の再評価が進んでいる。「消滅可能性自治体」などと言われ過疎地域は揶揄されているが、地域に入ってみると人々は皆たくましく楽しく暮らしているのである。依然、空き家の存在は我が国の社会問題であるが、この空き家を“負の遺産”として捉えるのか、“新しい可能性の器”として捉えるのかによって、それぞれの将来は大きく変わってくることだろう。

（たぐち　たろう）



徳島市と佐那河内村の位置


改修前の様子


自宅兼交流スペースとして改修
地域内外の様々な人が交流する

ルポ

9

# くまもとアートポリスとUDで地域を支える

田中直人

島根大学大学院特任教授
博士（工学）

## はじめに

豊かな自然と歴史文化に育まれた熊本には、地域に対する誇りと愛着の熱き心の取り組みがある。全国にさきがけて建築に着目したくまもとアートポリス（以下「アートポリス」という。）やユニバーサルデザイン（UD）などの建築プロジェクトもそのひとつであろう。

2003年２月に発刊された熊本県の「建築のユニバーサルデザインのガイドライン」策定の監修を担当させていただいたことを契機に、県下の各地でのUDワークショップなどユニバーサルデザインプロジェクトに関わってきた。熊本駅前空間デザイン会議では、アートポリスのコミッショナーである伊東豊雄氏（以下「伊東コミッショナー」という。）らとともに、ユニバーサルデザインの視点から参加させていただいた（**写真１**）。たまたま、2011年３月11日、九州新幹線の開業の前日に熊本駅前にて空間デザイン会議開催中に、東日本大震災が発生した。この後も、全国各地で災害が多発している。そして熊本においても2012年７月の熊本広域大水害、そして2016年４月に熊本地震が発生している。

本稿は、豪雨災害や震災を経て熊本においてどのような地域復興へ向けた取り組みが展開しているのか。今回は、熊本県庁建築住宅局のアートポリス・UD班の担当者へのインタビューや被災地の仮設住宅団地を2016年末に訪問し、仮設住宅団地においてアートポリス事業として計画された「みんなの家」に着目して取材した結果を報告するものである。筆者は、1995年１月の阪神・淡路大震災で被災しているが、熊本県でのユニバーサルデザインプロジェクトの経験を踏まえ、熊本県におけるアートポリスの取り組みを考察したい。



写真１　熊本新幹線口（西口）駅前広場（設計：佐藤光彦）

## アートポリスの考え方と経緯

### ①アートポリスの創設

アートポリス事業は1988年から始めた熊本県独自の建築文化事業であり、県政の大きな柱である。当時の細川護熙熊本県知事が前年にベルリンIBA（国際建設展覧会）を視察したことにヒントを得て、建築をはじめとする環境デザイン全般に対する意識、都市文化・建築文化の向上を図ることを目的としてはじめられたプロジェクトである。

画一的になってしまった日本の町並みを反省し「熊本らしい田園文化圏の創造」を目標として掲げ、後世に残し得る文化を熊本県で実現させることを目指して、磯崎新氏をコミッショナーとして創設されたものである。これまでに、90件のアートポリス参加の建造物や143件のアートポリス推進賞の施設など、多くの建築物などが県下全域に存在している。

### ②アートポリスのプロジェクト事業

現在のコミッショナーの伊東氏のもと熊本県下を舞台に豊かな自然や歴史、風土を生かしながら、後世に残り得る文化的遺産としての優れた建造物を造り、人々の都市文化、建築文化などへの関心を高め、地域の活性化に資する熊本独自の豊かな生活空間を創造しようとするプロジェクトが展開されている。

そのシステムとしては①プロジェクト事業②顕彰事業（アートポリス推進賞）③企画・広報・人材育成事業の３つの事業から構成されている。プロジェクト事業の実施では、コミッショナー制度を導入し、コミッショナーによる建築家の推薦や設計競技の実施による選定を行っている。選ばれた設計者は多くの関係者とのコミュニケーションを繰り返しながら進めているということである。

## ユニバーサルデザインによる建築とまちづくり

アートポリスに加え、熊本県では潮谷義子前知事の県政からユニバーサルデザインに取り組み、県全部局において関連する施策をすすめられてきた。とりわけ、建築部局においては積極的にユニバーサルデザインに関するガイドラインの策定などの啓発活動や具体的なデザインの実践につながるワークショップなどで、官民を問わず、県下の建築物などのユニバーサルデザイン実現を図ってきた。

その対象施設としては、前述のアートポリ

田中直人

東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程修了。博士（工学）
神戸市にて福祉のまちづくり計画のほか、神戸博ポートピア‘81やニュータウン、舞子駅前計画などを担当の後、神戸芸術工科大学教授、摂南大学教授を経て2013年より現職。
各地での福祉のまちづくりやユニバーサルデザインの計画に携わる。
著書に「建築・都市のユニバーサルデザイン－その考え方と実践方法」（彰国社）－日本建築学会著作賞受賞、「ユニバーサルサイン（学芸出版社）、「五感を刺激する環境デザイン－デンマークのユニバーサルデザインに学ぶ」（彰国社）、「ユニバーサルトイレ」（彰国社）等。ユニバーサルデザイン監修や作品に、ビッグ・アイ、イオンレイクタウン、奄美海洋展示館等。

ス作品も含まれている（**写真２**）。



写真２　清和文楽邑（設計：石井和紘）でのワークショップの風景

ここではユニバーサルデザインとして、アートポリス作品の芸術性や文化性に加え、多様な利用者にとっての安全性や使い勝手などの「やさしさの配慮」をワークショップ形式で、建築家を含め、住民らとともに関係者みんなで現地にて意見交換し、検討を重ねるものであった（**写真３、４**）。みんなのためという視点とともに、みんなで考えるという協働の姿勢が特徴的であったと言える。一連のワークショップを経て、ユニバーサルデザインの基本的な考え方や進め方について、地域の住民の方々とともに担当した県職員の方々にとってもその後のアートポリス事業の意義を高める貴重なプロセスであったと考える。このワークショップの取り組みは、現在も不特定多数が利用する県有施設の設計において「UDアドバイザー制度」という形で実践されている。



写真３　清和文楽邑道の駅（設計：小材健治）



写真４　座談会風景（左から田中、石井、小材）

## みんなの家の建設の経緯

熊本県では、「くまもとアートポリス事業」の一環として、東日本大震災や熊本広域大水害の際に「みんなの家」を提供するプロジェクトに取り組んでいる。「みんなの家」とは熊本地震において被災者の痛みを最小化し、日常的なコミュニケーションが生まれるよう、仮設住宅団地内に計画された集会所もしくは談話室である。仮設住宅団地にアートポリス事業として「みんなの家」が建設されるまでの経緯等について、応急仮設住宅団地建設の中心となった熊本県土木部建築住宅局の田邊肇局長をはじめ、小路永守氏、西村親明氏らからお話をうかがった。

**①日本大震災におけるみんなの家**

2001年３月の東日本大震災に際し、伊東コミッショナーから「みんなの家」建設の話があり、蒲島郁夫熊本県知事の了承を得て、熊本県により宮城県仙台市内被災地に集会所「宮城野区のみんなの家」が建設された。これが第１号の「みんなの家」である。

**②2012.7の熊本豪雨による阿蘇での土砂災害（熊本広域大水害）**

2012年には阿蘇市で仮設住宅団地内に２棟の「みんなの家」が県内に初めてつくられた。その後、仮設住宅は必要がなくなったので、阿蘇の「みんなの家」は別の場所に移し、公民館などとして使われている。

**③2016.4の熊本震災**

今回の震災では、早々と全仮設住宅団地に「みんなの家」を建設する方針が決定された。熊本県は応急仮設住宅の建設にあたり、熊本広域大水害などでの経験を活かして、伊東コミッショナーやアドバイザーの桂英昭熊本大学准教授らの助言を受けながら、配置計画などを工夫して「みんなの家のある仮設住宅」づくりを進めることになったそうである。

伊東コミッショナーが県を訪問する前に、建築住宅局では既に「みんなの家」建設の費用やスケジュールなどを検討し、建設費は１棟平均1000万円程度。従来のプレハブの集会所と同様に、国の補助の対象となるよう関係部署に交渉して道筋を付けていたそうである。

## 仮設住宅の住戸の配置計画

蒲島知事の「被災者の痛みの最小化」として、居心地のいい仮設住宅をつくりたいという考えのもと、今回の仮設住宅団地では、ゆったりとした住棟配置が特徴的である。伊東コミッショナーらの助言を受けた田邊局長らによってできるだけ住棟の間隔を広げる検討がなされた。今までは６戸が１列であったものを３戸ずつで隙間を空けることにした。

その間に小路（コミュニティ動線）を設けて、木製ベンチを配置するほか、憩える空間を整備することになった。従来は住戸の奥行約６ｍに対して隣棟間隔約４ｍが通常だが、隣棟間隔を約６ｍに広げる（**写真５**）。１戸当たりの敷地面積でいうと、従来は平均約100㎡だったものが約150㎡と、1.5倍になる。住棟間に「みんなの家」や駐車場の配置に配慮し、空いたスペースにはベンチなどを置いて憩えるよう工夫している。

このゆったりとした住棟配置により、より大きな敷地が必要になったが、県の考えを丁寧に説明し市町村の理解を得たという。これまでの過密な住戸配置を見直し、住環境の向上とコミュニティの形成に配慮した「あたたかさ」と「ゆとり」、そして「ふれあい」のある仮設住宅団地の実現をめざしてきたことは、これまでの災害時における仮設住宅計画に比して、画期的な取り組みであると言える。

さらに住みよい環境となるよう、入居者と大学とで話し合い、家具を作ったり、花壇を整備し、それぞれの団地に会った整備内容を検討し、ワークショップなどを通じて団地での暮らしを豊かにする環境整備を進めている。九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト（KASEIプロジェクト）として、熊本地震の被災地に建設された仮設住宅地の環境改善活動を行い、居住者に安心感のある住環境と、それら一連の活動を通じて豊かなコミュニティを築くことを「加勢（かせい）」している。



写真５　ゆったりとした隣棟の間隔の仮設住宅

## 住戸内部の計画

熊本の気候風土を考慮し、快適で、コミュニケーションが図られやすい住宅計画とするため、以下の計画を実施している。

①全戸に県産畳表を用いた和室を計画
②腰壁の一部、台所の床に県産木材を使用
③コミュニケーションが生まれやすいように、全戸に南側に掃出し窓と縁側を設置
④高齢者等に配慮し、全戸の玄関、トイレ、浴室に手すりを配置。また、全体の１割の住戸にスロープを配置
⑤全住戸間に隣の音が聞こえにくい壁を設置
⑥断熱性を向上させた壁や天井の計画
⑦遮音性に優れた二重窓などを設置
⑧風通しのために玄関に網戸を設置。また雨対策として雨どいを設置
⑨エアコンと追い炊き機能付き給湯器を設置

## みんなの家の概要

「みんなの家」は被災者にやすらぎを感じてもらう空間として、仮設住宅団地内に整備する。住戸約50戸に対して１棟の割合で木造の「みんなの家」を建てる計画に取り組んでいる。今回、熊本県全体では約90棟以上の「みんなの家」が建つことになる。

また蒲島知事から、仮設住宅自体にもできるだけ木造にしたいと言われたそうである。仮設住宅4303戸のうち、16％にのぼる683戸が木造でつくられた。

「みんなの家」の計画にあたり、これまでの「みんなの家」プロジェクトの経験を活かし、２つの型に分類している。

**＜規格型＞**これまでの経験を活かした「みんなの家」（**写真６**）

伊東コミッショナーらが設計し、住宅の完成とほぼ同時期の完成を目指す。（60㎡タイプ、40㎡タイプ）



写真６　規格型「みんなの家」（西原村小森第１仮設団地）

**＜本格型＞**入居者とつくる「みんなの家」（**写真７**）仮設住宅の団地に複数棟建設する「みんなの家」は、コミッショナーから推薦があった建築家が、入居者との意見交換を進めながら整備する。（60㎡、100㎡）



写真７　本格型「みんなの家」（西原村小森第２仮設団地）

## 現地ルポ：仮設住宅団地にみんなの家を訪ねる

### ①被災状況と被災地の様子

益城町など被災地の現状としては、地震発生から８カ月が経過しているにもかかわらず、まだ多くの倒壊家屋が残されていた（**写真８**）。しかしながら、撤去された現場の空地が目立つほか、道路などの修復が未整備の箇所が多くみられた。阿蘇地域では被害の大きい道路の仮設的な迂回道路が設けられていた。



写真８　未撤去の倒壊建築物が目立つ被災地

### ②仮設住宅団地の様子

仮設住宅団地の整備は完了していた。プレハブでつくられたものよりは、木造の方が落ち着いた環境を実現していたようである（**写真９**）。計画された「みんなの家」も整備されていた。「みんなの家」は、集会所は60㎡、談話室は40㎡というおよその規模を想定されて建設されている。

2016年12月２日には地震に強く県産木材を使用した「くまもと型復興住宅」のモデル住宅が完成し、益城町テクノ仮設団地内で展示されている。復興住宅に向けたモデル住宅の展示や仮設住宅団地内の店舗が配置されたセンターエリアでは、それらが計画されていない他の団地よりも活気が感じられた（**写真10**）。仮設団地であっても、生活者にとってコミュニティがあり、必要な利便性が確保されていることの重要性が再確認できた。



写真９　県産の木材を使用した南阿蘇村下野山田仮設団地（写真提供：熊本県）



写真10　益城町テクノ仮設団地内の店舗

仮設住宅団地では高齢者の姿が目立った。バリアフリー住宅（**写真11**）を導入した団地もあったが、団地内の歩行路面の舗装や階段などの基本的なバリアフリーは残念ながらまだ不十分だと感じた。仮設とは言え、生活環境としてより安全快適な配慮が求められる。



写真11　バリアフリー住宅（益城町福富仮設団地）

### ③みんなの家の様子

「みんなの家」は多くの利用者で活気を呈しているところと、閑散として鍵のかかっているところと差が大きい。「みんなの家」のうち、談話室は利用者の利用割合が低いようで、集会所のほうが良好な利用状況であった。建築的な要因でなく、これは「みんなの家」を管理運営するリーダーの資質、キャラクターによると思われる。とりわけ、訪問したテクノ団地の「みんなの家」はお互いに打ち解けた、文字通り「みんなの家」として機能しているようであった（**写真12**）。この背景には発生直後からの避難所におけるコミュニティを継続した生活環境づくりの観点で取り組まれているのも大きな要素であると思えた。今

後の活性化へ向けて、わざわざ「みんなの家」に出向かずとも住宅の棟の間に計画された小路などのコミュニティ空間の環境デザインや管理運営の方法を再検討されることも課題であると感じた。



写真12　みんなの家の活用風景

## アートからコミュニティへ

今回のルポでは、被災地における仮設住宅団地の集会所や談話室をアートポリスの取り組みの「みんなの家」として、展開されていることに感銘を受けた。

もとより、アートポリスは建築をはじめとする環境デザイン全般に対する意識、都市文化・建築文化の向上を図ることを目的としてはじめられたプロジェクトである。画一的になってしまった日本の町並みを反省し「熊本らしい田園文化圏の創造」を目標として掲げ、後世に残し得る文化を熊本県で実現させるという考えでスタートした建築や環境デザインの取り組みである。

しかしながら明らかに今回の「みんなの家」プロジェクトでは、建築のみならずまちづくりとして、被災地の生活者や建築関係者がともに取り組む姿が大きくなった点が特徴的であるように思える（**写真13**）。このことは2014年２月９日付のアートポリスコミッショナーの伊東豊雄氏の新しいアートポリスのテーマとしての言葉「自然に開き、人と和す」-新しいくまもとアートポリスへの期待-からもうかがい知れる。以下、引用。

「熊本県は日本でも有数の豊かな自然に恵まれ、また人と人の温かいつながりを大切にしてきた地域だからです。したがってこの地域らしさをそのまま建築にすることができれば、それが即ちこのテーマにふさわしい建築になるはずです。ところが久しく、建築家達は東京のような大都市にあるべき建築こそが最先端の建築と考え、熊本にもそのような建築をつくるべきだと信じてきました。言い換えれば20世紀的とも言うべき、即ち技術に全幅の信頼を置いて自然から隔離した性能のみに固執したモダニズムの建築をつくろうとしてきたのです。しかし東日本大震災以降、自然再生エネルギーの活用が問われ、人と人の素朴で親密な絆が求められる時、従来からの建築の価値は揺らぎ、地域に密着した建築のあり方が根底から問い直されなくてはならない時代となりました。」

そのような問いかけの第一歩として震災直後に「みんなの家」を提案し、実現したのである。




写真13　地元の高校生が書いたみんなの家の表札

## これからのアートポリスと地域の建築

これまで、アートポリス参加プロジェクトは数々の賞を受賞するなど、建築界での評価を得ている。一方、デザイン重視の計画で生活を無視しているのではないかとの意見や住民参加をさらに重視すべき、などの意見もある。今後さらに「点から線へ、線から面へ」とアートポリスの目標とする環境デザインを広げていくことが期待される。

その際、その地域を支えるのは建築だけではなく、基本は地域を支える人の絆であると思われる。今回の「みんなの家」の現地ルポでは、アートポリスの県下における広がりだけでなく、作り手主導から、使い手主導にシフトした変化を感じた。この背景には熊本県で長く積極的に取り組んできたユニバーサルデザインの取り組みの実績が大きいことを確認することができた。

とりわけ、潮谷前知事の時代から担当されてきた田邊肇局長ほかのアートポリス・UD班での取り組みは、地域における住民をはじめとするユーザーや専門家を巻き込んだワークショップでのみんなで高め合う仕組みなど、経験の蓄積が大きいと感じた。

地域とのつながりながら、地域の文化を大切にするアートポリスがこれからめざそうとする方向性は「みんなの家」の意味を改めて考えることでより明確になるだろう。

今回のプロジェクトでは、東北と熊本のつながりや支え合い、これに絡む専門家の存在が大きい。言うまでもなく建築が地域に果たす役割や社会的貢献を確かにする根本に、英断し指導力を発揮する知事の存在は大きい。

また、避難所から仮設住宅団地に至る地元の住民の支え合いの状況をみると、やはりコミュニティの重要性や震災復興のまちづくりにみる建築のはたす役割や使命はあらためて大きいと痛感する。

建築は単なる建築家をはじめ作り手の作品ではない。単純な「アート」ではなく、地域の生活や文化を大切にし、向上させる美しくて、人にやさしい環境としての建築を目指すべきであると思う。それは私が熊本県庁の担当の方々と目指してきたユニバーサルデザインの考え方でもある。

ユニバーサルデザインも特定の障害者対策となるバリアフリーを基準どおり処理するための狭いものではなくて、すべての人にしあわせをもたらす理想を絶えず持ち続け、少しでも実現することをめざしてさらに進化させていくものである。

これからの「くまもとアートポリスの」の発展を願い、一日も早く復興を遂げられることを願っている（**写真14**）。　（たなか　なおと）

謝辞：今回の取材に協力いただきました田邊肇局長をはじめ、県の関係者、現地の皆様に感謝申し上げます。



写真14　くまもんも復興を願う（JR熊本駅）

ルポ
10

# 「奄美ミュージアム構想」から世界遺産をめざして

田中直人

島根大学大学院特任教授
博士（工学）
奄美観光大使

田中直人

東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程修了。博士（工学）
神戸市にて福祉のまちづくり計画やニュータウン開発などを担当後、神戸芸術工科大学教授、摂南大学教授を経て2013年より現職。
各地で福祉のまちづくりやユニバーサルデザインの計画に携わる。著書に「建築・都市のユニバーサルデザイン」（彰国社）－日本建築学会著作賞受賞等。
ユニバーサルデザイン監修や作品に、ビッグ・アイ、イオンレイクタウン、奄美海洋展示館等。




図１：ルポ施設の位置
数字はルポ１～ルポ18までの位置を示す。

## はじめに

奄美群島は豊かな自然、世界的にも貴重な動植物、個性的な伝統文化、健康・長寿・癒しに関する資源など、他の地域にはない魅力と特性に恵まれている島々である。

「奄美ミュージアム構想」は地域をまるごと博物館にみたて、地域住民が主体となり、その地域の自然環境や文化、生活、歴史などの魅力を再発見し、地域の財産として守り伝えていくエコミュージアムを奄美で展開するために平成17年３月に奄美群島広域事務組合により策定されたものである。

奄美については縁があり、奄美海洋展示館の計画以来、学生をはじめ多くの人たちと何度も訪れている。

今回、ルポ取材のため、あらためて、現地を訪問してみた。本稿でルポ紹介する施設は**図１**のとおりである。

## 「奄美ミュージアム構想」の核として情報発信する

### ルポ１ 奄美パーク

奄美大島空港を降り立つ。「いもーれ奄美」のサイン。真冬の寒波に震えていた体にはやさしい甘い香りの空気が出迎える。この甘さは何だろうか。まずは奄美パークへ向かう。冬でも奄美の海は碧い。

田代浩二事業課長、新島純一郎主査から、奄美パークおよび田中一村記念美術館について、お話しをうかがった。

奄美パークは奄美の美しい自然や多様な文化、歴史をビジュアルに紹介する施設で平成13年９月に開園して15周年を迎えている。総合展示ホールや奄美シアター、人々の交流の場となるイベント広場からなる「奄美の郷」と、奄美の自然を描き続けてきた日本画家、田中一村の作品を紹介する常設展と企画展、創作体験展などを開催する「田中一村記念美術館」（**写真１**）の２つの施設を核にする奄美群島の観光拠点施設である。

建築としては、奄美の地域イメージを環境デザインに展開しているのが特徴である。「奄美の郷」を構成する建築の屋根の形状は海洋生物のシャコ貝（白い貝殻）を、梁は「琉球松」の集成材で「ソテツの葉」を、美術館は奄美の伝統的建築の高倉をイメージしているという。３つの棟を連結する施設は奄美の海をイメージした池の水面にそのシルエットを映している。また、館の周辺には一村の作品の世界を亜熱帯の植物で６つのスポットで再現している一村の杜がある。結構発育がよく生い茂って絵の通りには行かず、剪定作業が大変とか。奄美の各地に見られるサンゴ石を用いた壁面や床材は年月とともに黒ずみながらも奄美の雰囲気を醸し出す。もともと空港跡地を利用しているので、管制塔のイメージで高さ20メートルの展望台がある。



写真１　水辺に浮かぶ田中一村記念美術館

奄美の郷展示としては、はるか海の向こうにある豊穣の国（ネリヤカネヤ）から神様がやってくる玄関口にあたる海の道、集落（シマ）の暮らしぶりを紹介するシマの道、集落の背後の森を紹介する森の道 などから構成されている。奄美大島のみならず、喜界島、徳之島、沖永良部島、ヨロン島などの島々を紹介するアイランドインフォメーションで、多くの来場者へ奄美群島の情報を発信している（**写真２**）。



写真２　奄美群島めぐりの情報がある展示コーナー

**―奄美パークはミュージアム構想でどういう役割がありますか。**

空港に近いので、最初に立ち寄る施設として観光客が多く、年間10万人くらい入館者があります。奄美の歴史文化を勉強していただく発信基地、奄美の情報を提供する総合観

光センターとしての機能を有し、奄美群島全島々を紹介しています。

**―田中一村さん以外の奄美にゆかりのある芸術家の紹介はいかがですか。**

奄美関連の方々の作品の紹介は企画展で設けています。奄美を描く美術展を毎年開催し、島内の方ばかりでなく全国から公募してます。

**―観光面とともに奄美の歴史や文化について地域の子どもたちが学ぶ機会はありますか。**

島内の小中高生については１日遠足として利用していただいていますし、県外の中学校からの修学旅行、特に関西からが多いですね。

**―海外からの方々への対応が求められますね。海外からはアジアの人が多いですか。**

外国の方々に対応する英中韓国語を中心にした多言語化とAR（拡張現実）を活用出来ないかと検討中です。海外からは、ヨーロッパとアジア半々という印象ですね。

**―施設の活用や展示で、もう少しこうしたいとか将来へのお考えはいかがですか。**

平成30年の世界自然遺産登録を目指し、各島々を紹介しているスペースを中心にリニューアルし、世界自然遺産としての奄美群島を紹介することを計画しています。

**―ミュージアムとして、展示型と体験型や参加型に大別されますが、奄美パークではどういったところに重点を置いて展開していますか。**

奄美の自然文化歴史を紹介する趣旨で観光客向けの体験型は今のところ想定はしていませんが、まずは奄美を知っていただく観光客誘致のキャンペーンを各地でやっています。

**―離島にある文化とか生活圏として成熟した塊の中にミュージアムとして見せるポイントが点在していますね。今後の奄美パークにはその中で中心的な情報発信のセンターとして機能することを期待したいと思います。**




写真３　茅葺ののあまじいのやー（家）

## 奄美の自然・歴史・文化を紹介する

### ルポ２　奄美博物館（黒潮館）

奄美大島を中心に奄美群島の自然・歴史・文化を紹介する奄美市立の博物館である。訪れた時に、エントランス１階吹き抜けの伝統的小型船の実物展示が目を引く（**写真４**）。２階には暮らしと歴史について、民具で生活の様子を、３階については標本で生物や鉱物の展示が構成されている。屋外には明治27，8年ごろ建築されたという瀬戸内町から移築された奄美の民家が展示されている。実際の住宅を身近にみて、奄美の民家の様子、生活がよく理解できる。



写真４　伝統的小型船の実物展示

## 生活文化を体感する多様なミュージアムのスタイル

奄美の各地には多くの集落がある。そこには神の道があって山に神がいるとか。集落のコミュニティ空間として、ガジュマルの大木のもとの緑陰や川辺・浜辺に集う暮らしの空間もある。身近な生活環境にも多くの遺跡や地域での行事などがある。これらの伝統的な生活文化を継承発展することも人口減少など地域の変化によって困難な場合も予測される。それでも各地には奄美での「衣・食・住」に関わる生活文化を紹介するミュージアムが点在する。自治体による施設のみならず、民間の事業者による奄美の生活文化を紹介し、子や孫に、そして島外から訪れる人たちにわかりやすく、親しみやすく理解していただく事例も多い。その代表的なものを紹介する。

### ルポ３　「群倉（ぼれぐら）」

穀物などをネズミの害や湿気から防ぐために造られた釘を使わない高床式の建築で群倉は火災から守るために集落のはずれに集団で建てられていたという（**写真５**）。この群倉は大和町役場近くの道路にそって残っている。伝統建築を理解する貴重なミュージアムといえる。各地の集落にも高倉は見ることができるが、このような群倉は珍しくなっているそうだ。



写真５　各地の高倉の様子がわかる倉群

### ルポ４　カトク美術館（元嘉徳小学校）

嘉徳集落は、奄美大島本島の瀬戸内町の山深いエリアにある集落である。人口減少で、2004年度に嘉徳小学校は休校、2016年度には廃校となった。同校は同町出身の歌手・元ちとせさんの母校でもある。「元さんとのつながりを大切に、芸術家の活動の場として広く活用したい」ということで、地域のミュージアムとして活用されている（**写真６**）。

もとの校庭には立派なアカギの木あり、校庭の片隅には、炭焼小屋があった。集落の小路を抜けると太平洋の大海原につながる砂浜が広がる。マリンスポーツに興じる若者の姿と高齢化、人口減少が進む集落の静けさが対比的であった。奄美の集落（シマ）の生活環境の移り変わりの姿を理解し、シマの生活文化を記憶にとどめる嘉徳ミュージアムの今後が注目される。




写真６　旧正門にあるミュージアムのサイン

**ルポ5 奄美の生活文化を体験できる「ばしゃ山村」**

ばしゃ山は、美しい奄美の海に面したホテルやレストラン、そして道路をはさんで、山に広がる奄美民俗村（ケンムン村）など、いろいろなアミューズメントがそろった総合リゾートである。ケンムンとは奄美に昔から伝わる自然の守り神である。

奄美民俗村では、国の文化財にも指定されている100年前の民家・旧安田邸（**写真７**）をはじめ、再現した奄美の風俗・文化を見学できる。オプションで島人体験、古代焼き体験、お菓子作り体験もできる。旧安田邸は、奄美のユカリンチュ（格式高い人）の家として江戸時代末に建てられた家をUターンして来た若者などスタッフが解体作業を行い、地元の宮大工の力を借りて移築したもの。ここでは毎日地元のおばあが菓子を作りレストラン隣接の売店で販売している。

敷地にある高倉は、地元の方の寄付。朽ちかけのものをスタッフが解体し移築したという。民間の施設ではあるが奄美の生活や文化を体験型で示す貴重なミュージアムである。



写真７　移築された民家・旧安田邸

**ルポ6 奄美の「衣」伝統文化を体験する「夢おりの郷」**

夢おりの郷では大島紬に関する各種体験とともに、「子どもの記憶に大島紬の機織りの音を残したい」ということで保育園を併設している。南祐和社長と奥様に聞いた。

**―大島紬の伝統的工芸を若い人たちにどう継いでいくのか、国内外の人にどう知っていただくか。展示や体験とかにどのように取り組んでおられますか。**

東京から戻り、親父の製造業を継いだのですが、これからの大島紬は製造だけではなく観光や体験が必要だと考え、草木染の植物が豊富で染色もできるこの地へ名瀬から移ってきました。この建物は奄美の建築の高倉、大和村の群倉（ぼれぐら）のイメージで、100年前の高倉をメインにして本物の茅葺で作っています。国道からの神の道があり山に神がいる、そこに集落をつくるということで郷を付けて夢おりの郷としました。名前の夢おりの「夢」は僕の夢であり、何をやってもいいと言う意味での夢で、「おり」というのは作っていくと言う意味で、そういう集まれる場所と言う意味の名前にしました。

**―生活の場面として保育所を作られたと言うことですが、最初からですか。**

最初はレストランで、生活の基本である衣食住をテーマに考えていました。しかし、経営が成り立たなくて閉めた後に、大島紬を残すには子供たちに関心を持ってもらうことが必要だと考え、保育所にしました（**写真８**）。うちは養蚕からやっているので、桑やりを園生にやらせながら蚕を育てるところを見せている。おもちゃも杼（ひ）や管（くだ）で遊ばせたりして、出来るだけ紬に触れさせられたらなと思っています。



写真８　大島紬の杼や管で遊ぶ子どもたち

**―もともとの伝統的な建築が少なくなっています。建築というのが影響する側面って大きいと思うんですが、奄美らしさってどういうものですか。**

違和感がなくて、場所に溶け込んでいくのが一番いい建物かな。ひとつは素朴さ。ひとつは洗礼されていないバター臭さ。100％ではない、「アーしたらいいのにな」と周りが言うくらいのものが逆にいいと思う。夢おりの郷の場所にある川の水を利用して水車を回した力でサトウキビを挟んで汁を出していた。水があるときは水力で、ない時は馬にひかせて汁を出していた。そこで水車をモニュメントにしました（**写真９**）。



写真９　モニュメントの水車

**―大島紬は高価ですが、泥染めや織りなどの工程を考えたらむしろ安いですね。**

大島紬は高価だが、まさに感動産業なんですよ。その一つの過程が島唄だったり島料理を食べたり、奄美に来てもらって島の人と友達になる。そこで感動したら買うわけでしょう。加工をみせて、泥染めを体験させて、「わー、こんなに大変」と感じる。感動のひとつに外国の糸ではなくて、奄美の桑を食べた蚕さんから取った糸では感動が違う。

**―今後の奄美の観光でイメージされていることはいかがですか。**

各集落を回り集落のものしり爺ちゃんところにふらっと寄ったら昔の話をしてくれる。さらに島唄があれば、旅行者はどんな料理よりも一番印象に残る。それが奄美の観光だと思う。そのためには島内の行政区分を超えたひとつの奄美としての発想が大切と思います。

**ルポ7 奄美の伝統文化を体験する「泥染め公園」**

奄美大島の伝統文化である大島紬は、絹糸を泥で染める手法を用いるが、本場奄美大島紬泥染公園では、泥田を整備・保存しており、泥染めの行程を見学できる。シャリンバイを煮出したのにつけて、泥で染める。シャリンバイのタンニンと泥の中の鉄分が化学変化をおこしいい色合いを出す。一般の観光客の方も気軽に泥染めを体験でき、オリジナルのTシャツやハンカチなどを染めたりもできる。

長年、ゼミ旅行などで学生たちも体験させていただいている。そのたびに管理人で伝統工芸士の野崎松夫さんからは丁寧にアドバイスしていただき、奄美で思い出の作品作りに励もうと泥染めの泥田に入り作業に熱中する（**写真10**）。

周りの山々に奄美の野鳥の声が響き渡る。出来上がる作品を待つ間、松崎さんの奥様から奄美のお菓子やお茶をいただきながら、奄

美のこと、大島紬のこと泥染めのことなどなど話がはずむ。いつも温かいおもてなしに感謝。奄美の大自然に育まれた泥染め公園は自然と文化の総合公園である。なにより、野崎さんや奥様の人柄、やさしさに包まれる奄美で過ごすしあわせのひと時であった。



写真10　泥染め公園の泥田

**ルポ8　奄美の伝統文化をデザインする**
**「愛かな工房」**

泥染め職人のご主人は伝統工芸士。こちらでも泥染め体験が出来る。大島紬を作り上げるにはいくつもの工程があり分業制となっている。製糸から製造販売までを一貫して行うことがないため、収入も乏しく大島紬だけでは暮らしが成り立たず、ほとんどの職人は兼業している。大島紬の洋装も販売している。洋装を手掛けるのは奥様。デザインから販売までを手掛けている。デパートなどでも販売している。そのため、奥様は全国どこでも催事の際には出かけている。

愛かな工房は道路に面した敷地の少し奥まったところにあるが、現在その前面の一角に旅行客用の宿泊ハウスを検討しているとか。西郷隆盛が龍郷に蟄居していた時の家と同じものを再現したいとのこと。水回りは完備するが、食事の提供はしない。ちなみに、愛かな工房の名前は、西郷隆盛の現地妻の名前「愛かな」から取っている。帰り際、工房の入り口にたわわにパパイアが実っていた。島の各地に見られる果実の風景である。

## 自然のミュージアム

奄美には海や山に豊かな自然環境をまるごと体験する施設やゾーンが広がる。島の至るところに特徴ある海岸の景観を展望するスポットが広がる。マリンスポーツを楽しみ、豊かな海に育まれたサンゴや魚の姿を観ることができる場所も多い。有数の規模を誇るマングローブの森をカヌーでクルージングしたり、シーカヤックやヨットで青い海原を走行することもできる。まさに島全体が自然公園として、多様な出会いと体験のチャンスを備えている自然のスポットいっぱいのミュージアムと言える。その代表的な施設をルポしてみた。

**ルポ9　マングローブパーク**

黒潮の森マングローブパークは亜熱帯の気候で育つマングローブ原生林と貴重な動植物とふれあう自然を基本とした自然回帰型の公園施設である。カヌーで貴重なマングローブ原生林の生態環境を体験することができ、公園全体が生きた自然ミュージアムと言える（**写真11**）。

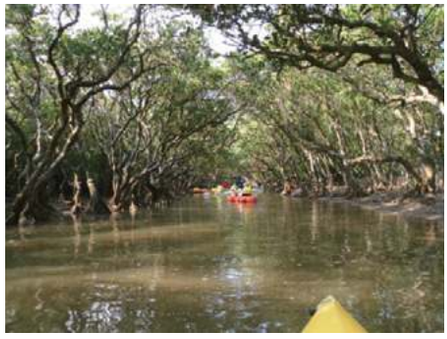


写真11　マングローブの森をカヌーで体験

**ルポ10　奄美自然観察の森**

緑豊かな自然とふれあいながら学習ができる。森の館のほか、貴重な種類の昆虫の生息する森、ドラゴントリデなど高台の展望台からは周辺のすばらしい緑濃い湾にひろがる碧い海の輝きを観ることができる。また、ふもとのエリアに群生するバショウやソテツの様子は貴重な植生を示す。

**ルポ11　奄美フォレストポリス**

亜熱帯の森林公園でふれあい、水辺、渓流、キャンプの4つのゾーンから構成され、学術的な自然体験学習や森林浴ができる。近くにその昔から神秘的な太陽の滝つぼとして有名なマテリアの滝（**写真12**）がある。今回の訪問では真夏とは違う静かな佇まいであった。



写真12　神秘の森に流れ落ちるマテリアの滝

**ルポ12　金作原原生林**

ヒカゲヘゴが生い茂り、映画「ゴジラ」の誕生の舞台となった金作原の原生林は美しい海を育む源となる緑の原生林である。あらためて圧倒的な迫力で、自然環境のあり方を実感できる自然の学びの場である。

**ルポ13　奄美の海の生き物と出合う**
**「奄美海洋展示館」**

奄美海洋展示館（**写真13**）は、小さいながらも奄美固有の生き物に焦点をあてた海と人の営みをわかりやすく紹介したミュージアムである。基本構想から基本設計までを依頼されて、奄美の自然環境に溶け込む建築デザインをめざした。大島紬の糸車をずらしたような平面形態と周辺の島の風景を写し込むような曲面の屋根。奄美のサンゴ礁の海、砂浜、海辺の断面を立体的にみせる奄美エコラマの大水槽と生きたサンゴたちの水槽とタッチプールなど、魚やウミガメに触れることができる。立地する大浜海浜公園には生きたそのままのサンゴ礁が広がり、奄美海洋展示館と自然のミュージアムとしてつながる。小さいながらも四方を海に囲まれた島・奄美から世界の海に神秘の扉を開く展示館となることを期待したい。



写真13　奄美海洋展示館

**ルポ14　自然で育む健康生活のミュージアム**
**「タラソ奄美の竜宮」**

奄美の海水は極めて清浄で、海のミネラルがたっぷりと溶け込んでいる。タラソ奄美の竜宮（**写真14**）は、母なる羊水を再現した健康づくりとして、タラソーテラピーで島のエネルギーと海の恵みに包まれ癒される施設である。最高の自然環境である奄美の白い砂浜とサンゴ礁の碧い海、東シナ海に沈む夕日を見ながら、奄美の海水に浴して身も心も島とひとつの宇宙になる。自然体感のミュージアムと言える。



写真14 海水で自然体感への誘い・タラソ奄美の竜宮

**ルポ15 ハブと愛まショー「原ハブ屋」と奄美観光ハブセンター**

ハブは、奄美や沖縄に生息する毒蛇で、咬まれることによって死に至る脅威がイメージ的に高い。しかし、奄美の山林にハブ退治で投入されたマングースによる奄美のクロウサギへの危害など新たな問題などの指摘もあり、自然界における生き物のあり方が問われる。

毒蛇ハブは、直接、人間の生命に危害を加える怖い存在であるが、一方で、このハブがいるため、シマの人々はハブの棲む山（森林）を恐れ、いたずらに野山に入ることがなく、結果として豊かな自然を残してきたと言える。ハブについての生態的な知識やハブの人間生活における活用の実態を理解する機能を果たすミュージアムとして、ハブに関する専門店の存在が注目される。ハブに関する情報提供やショー、物品販売などがある。

**ルポ16 奄美きょら海工房**

青年が黒糖を作っている。「こんにちわ」私の声で、道路に面した工場で作業していた手を休めて、非常に詳しく説明してくれた。奄美きょら海工房（**写真15**）では目の前の海水から奄美のサンゴ海水塩を、さらに自社農園のさとうきびを使用し、素材にこだわる。

島のいいものを伝えようとする姿勢から自然のぬくもりが体感される。これが社長の考え方ですと言う。やり方としてはオープンにして道路側に作って、作っているところを見せている。それは碧く広がる海を臨むミュージアムスポットでもある。



写真15 奄美きょら海工房

**ルポ17 水間黒糖**

島ではサトウキビを刈り取る風景をこの時期、何度も目にする。道路沿いに積み上げられたサトウキビの奥の建物から甘いかおりの白煙が上がる。「こんにちは」のあいさつで、工場を見学させていただいた（**写真16**）。出来たての黒糖をぐるぐると混ぜる機械の傍らで、へらでかき混ぜている。「もう少し、待ってね」という言葉で見とれていると「出来たてを食べてみて」と勧められいただく。何とも言えない上質のやさしい甘みが広がる。まさに奄美の甘みだ。奥に出るとそこは山の緑に包まれたサトウキビ畑。商品となった黒糖を販売するだけでなくここは黒糖を産み出すプロセスを体感できる食のミュージアムと言える。



写真16 甘い白煙に包まれる黒糖の工場

## 歴史のミュージアム

奄美には琉球王国統治時代以前から琉球王国統治時代、そして薩摩藩統治、明治・大正・昭和前期、アメリカ統治時代、本土復帰後から現在にいたるまで、大陸と島々の関係をはじめ、日本や琉球からの社会的影響を受けた歴史がある。各地域には史跡をはじめ、歴史資料館なども多数点在する。

笠利町には奄美市の歴史民俗資料館がある。宇宿貝塚史跡では、石囲いの住居跡など奄美の縄文時代後期の生活環境がわかる。

**ルポ18 旧日本海軍の特攻震洋の格納壕**

第二次世界大戦では奄美大島を軍事要塞化、沖縄に次ぐ砦としての遺跡が瀬戸内町を中心に島内に残る。加計呂間島では日本海軍の特攻震洋（**写真17**）を格納壕でみることができる。美しく豊かな自然に目が行きがちであるが、戦争の痛ましい歴史のあとも奄美には残されていることを忘れてはならない。瀬戸内町の奄美戦史模型資料館には館内に100を超える日本海軍の軍艦模型の展示がある。



写真17 格納壕の特攻震洋

## 6.「奄美ミュージアム構想」から、世界遺産をめざして

「奄美ミュージアム構想」は平成16年から25年の10年計画で、その後の取組みが島の各所で展開している。「奄美ミュージアム構想」から現在、世界遺産をめざして取り組む状況について、これまで奄美大島の中心的な企画や計画を担当されてきた奄美市役所東美佐夫総務部長にお話を伺った（**写真18**）。

**―奄美ミュージアム構想は、建築単体ではなくて、島まるごとミュージアムですね。東さんにお話を伺いたいと思います。まず、奄美ミュージアム構想のいきさつと将来どうかという説明をお願いします。**

昭和29年「奄振法（奄美群島振興開発特別措置法）」という特別措置法で、奄美群島が国家・国民にいかに貢献するか、奄美群島の地域発展と豊かな地域住民の生活を図るかという２つの柱があります。その中で離島の特性の活用、一般離島との差別化をどう見せながら発展していくかが取り組まれました。その後、平成６年に、「奄美文化列島博物館をめざして」の調査があり、世界自然遺産登録に向けて、特化した自然の多様性である貴重な動植物を活かし、登録出来たら国民の癒しの場が出来る、それが来島者と住民の共生につながる。そこを踏まえて宝探し事業「自然共生プラン」を平成15年に、平成16年から25年のこの10年の間で「奄美群島ミュージアム構想」として宝の活用と保存の方法について４つの柱を掲げ、これらを具体的に進めるために46のアクションプログラムを作りました。

さらに、平成25年２月に10年計画の「奄美群島成長戦略ビジョン」を策定し、前期計画の５年で重点３分野の、観光、情報、農業に文化と定住を加えた５分野で進めることとしました。付加価値を高めていくのが奄美の文

化だと思うし、人が大事なので人材の確保ということで定住を加えたところです。全体を包括し、その価値を高めると言うところで世界自然遺産登録になる。自然遺産登録の特徴は自然の多様性にプラス生活文化、すなわち環境文化型。この環境文化型を環境省にPRしたところです。

**―海外からの人が増え、国際的な対応が求められ、人材の資質の問題、コミュニケーション技術もとても大切と思いますが。**

奄美では人づくりで語り部を育てたり、島のコンシェルジェづくりがありますが、まずは島のことを知るということで、島唄や島内のことを学ぶ講座ができました。外国語を話す方々によるNPO国際懇話会があり、外国の方々が来島された時には通訳をしています。

**―世界自然遺産としてのこれからの奄美についてはいかがですか。**

世界自然遺産登録に向けて島々の中で集落からまちを歩きながら体験する事業を実施しています。例えば住用の三太郎峠を越えて先人が昔歩いた小道を散策するモデルコースなどの奄美世界自然遺産トレイルを整備していきます。

自然遺産と言ったら自然を中心に保存活用するためと設定するらしいですけど、今回は環境文化という、人々の暮らしと自然とが繋がりあって今の自然が成り立っていると言うところを強調しようとしています。環境省が良くいうのは奄美の自然を今までよく保存されたのは暮らしの中で人々が守ってきたからだ。それがやはりすごいと言うことで環境文化という言葉が生まれています。鹿児島大学が国際当初教育センターという分室を設置し、その活動が認められて、地域研究コンソーシアム（JCAS）が行う地域研究コンソーシアム賞を受賞しました。この研究のひとつに世界自然遺産登録への後押しを学問的に実践したことも評価されたと思います。

**―世界遺産を観光誘致策に使い、最初は観光客が多く、だんだん閑散とするところもある。奄美の場合は世界遺産の前からも評価される実績をうまくつなぐ、これからそういう作業が求められると思いますが。**

まさに、単発でやっていたことを紡ぐと言うことですね。ちょうど風に乗り始めたところ。ソフトやハードのインフラがちょうど出来上がって、そこに活用という、発展する仕組みをつくればいい形になるのかなと。

**―奄美に限らず、その場所に足を運ぶからこそ分かる良さ、感動がある。まさに現場に来てくださいと言うミュージアムにしないとだめで、それが魅力づくりだと思いますね。**

ミュージアムの大枠はそういうところですが、それが成長戦略に繋がっている。つないでいったことでLCCの交付金にも発展している。国の方も認めてくれているということで、これまでの積み重ねでこのようになっているのかと。

**―人材という話がありましたが、内部的な人材だけでなく外部的な人材と交流しながらマンパワー的に上げていく。そとからの目線で刺激を与えていただいて中の目線を上げていく、高めた目線をまたみていただくことも大切ですね。**

実践で動くのは地元の方々かもしれませんけど、外からの目線でモチベーションを上げていかないといけないかなと思いますよね。やろうと言う気持ちが大切。まずは自分の住んでいるところを好きになってもらわないとだめですからね。

**―ありがとうございました。この町が好きだ、帰って来たいという気持ちが大切だと思いますね。**



写真18　対談風景（奄美市役所にて。右 東氏、左 田中）

## おわりに

奄美ミュージアムとして、奄美はまるごと一つであるようだけど、地域ごとに個性がある。そして年々、島の姿は変わりつつある。空港降りてから名瀬のまちへ向かう道路の風景はもちろん、中心市街地の名瀬の町も変化している。長いトンネルの建設による道路整備が集落（シマ）と集落の距離を縮め、利便性が高まったが、地域の自然や生活環境は変わりつつある。

島外から多くの方が訪れ、奄美の自然や生活文化を体感する環境整備も進みつつある。建築的には特に際立つものも少ないが、島の代表的な食文化を味わえるような専門店をはじめ、衣文化としての大島紬、泥染め体験など。これまでの施設に加え、新たな施設が登場している。そこで出会った方々は、いろんな経緯を経て、奄美のことを想い、これからの世代につなぐ生活文化や環境整備のあり方を真剣に考えている。

将来的には官民を問わずそういう島全体をエコミュージアムとして街並みも奄美らしく整えていく仕事が次のハード面の関係ではある。それをサポートする官民関係なくやる人材的な対応が課題といえる。

奄美海洋展示館の設計の際、建築だけでなく、もっと広げて奄美全体の環境全部を見せる。場合によっては離島を線でつないでいくやり方があるのかなと思った。それがまさに後からのミュージアム構想の行きつくところだったと思う。行政がいちいち言わなくても意識の高い方々が奄美には多くいらっしゃる。すなわち、素晴らしい環境以上にこの奄美に想いを抱く人が多くいるということ。これからのミュージアム構想のエンジンになり、世界自然遺産としての奄美をより、魅力的で多くの人に愛される島へ発展させたい。ミュージアム構想から世界遺産をめざす奄美に期待することは大きい。

奄美にももうすぐ春がくるこのシーズン、島のあちこちでサトウキビを刈り取り、絞り、黒糖の生産時期であった。甘い香りに送られてルポを終え、奄美を立つことにしよう。

今回のルポで取材にご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

**ありがっさまりょーた。**

（たなか　なおと）



写真19　奄美の碧い海と青い空

座談会

# 「建築と社会を繋ぐ」プロジェクトから見えてきたもの

## ―現在・未来・人―

日　時：2017年２月６日（月）
19：30～22：00

場　所：日本建築協会　会議室

岡田　健
日建設計

勝山太郎
日建設計

佐藤達保
竹中工務店

田中直人
島根大学大学院

槻尾輝雅
大林組

戸川勝之
安井建築設計事務所

本田隆作
昭和設計

三谷帯介
鹿島建設

**編集会議を終えた後、ルポ対象プロジェクトのうち、Arts Towada、銘建工業、くまもとアートポリス、奄美ミュージアム構想、Share金沢について、担当者がそれぞれの体験を語り合った。その模様を編集後記に代えて収録する。**

### Arts Towada

**三谷：**記事に書いたように、美術館が一つできたから町が劇的に変わるほど、そんな簡単な問題ではなくて、人口が減少し過疎化していく地方都市を盛り上げるというのは、もっと人の想いとか住民の協力とか、いろんなものがないとうまくいかないというのはあります。とはいえ、この美術館があるのとないのでは全然違って、もしなかったら僕らもここに行くことはなかったと思うし、十和田市の方も「なかったらと思うとぞっとする」と。やはり建築の力はすごいなと思うし、限界点との両方を見た感じがします。

**佐藤：**最初に十和田市の観光課の方に話を聞いて見方が変わったのですが、十和田市自体は通過点にしかなってなくて、町として寂しくなってきたのとあわせて、まずはこの官庁街通りを景観的にも、観光的にもなんとかしようよ、というところが始まりだと。その時にうまく実現できたのは、市長さんの「アートでなんとかしよう」という、そんな発想はなかなかないと思うんですけど、それを根気強くやられたのがよかったのかなと。もちろん現代美術館はすごく良い建物で、町に開いている感じもコンセプトが体現できていてすごくよかった。ただ商店街の人がそれを自分たちの生活に落とし込めているかと言うと、たぶん、アートに触れて、とか、子どもと触れ合えて、とか、そういう人の幸福度みたいなものはすごく向上しているのかなと思うんですけど、それでこの町が生活レベルで活性化しているかと言ったらちょっと寂しいところもあるのかなと。

そういうことは市も認識しておられて、人はものすごく来るようになったり、人口６万人台のところに年間10何万人も来るけれど、人口は減り続けていると。そういうところに誰か住みたいなと思ってくれるようになるかどうかというのが本来の目的だと思うので、そういうところにはまだまだ時間がかかるのかなというところをお話しておられました。

**三谷：**本田さんがルポを書いてくださっている松本茶舗というお茶屋さんがあって、その店主自身は「こういうアートがこの町にきて、すごく人生が楽しくなった」と。それとタイアップをしていろんな人が町に来てくれて、お金は生んでいないかもしれないけど、幸せだとおっしゃっていました。でも住民の中にそういう風に感じられている人が何割いるかというとまだ少なくて、やはり一般の人からすると多少まだ自分とは遠い世界というか、それに乗れている人と乗れていない人の差がはっきりあるのが現実かな、という感じです。ただ、十和田市観光課の工藤課長とか、松本さんとか、元気なキーマンがすごく大きな役割を担って、町を元気づけているなあと感じます。人の力によっているところはすごくありますね。

**田中：**それは私が行った奄美でも感じましたね。まさに人ですね。自然とか歴史とか、資源があるにしろ、そういうものを大事にして、子供たちも含めてつないでいこうという、やる気のある人、前向きな人がやっぱりキーパーソンとして必要だと思いました。

**三谷：**当初は住民からの反対は結構多かったみたいなんですよ。こんな小さい町にアートによる町づくりとか美術館が必要なのか、とか。そういう中で、市長さんを始めとする種をまくキーパーソンがいて、やっぱり思いを持っている人、自分たちで「我が事」としてやった人が熱を持っているし、とても魅力的だなあと思うんです。

一方でこの松本茶舗さんなど推進してきた人たちが引退された時に、誰がそれを引き継ぐのかという下地作りがすごく大事だし、そういう人が何人かでもいないと、なかなかドライブできていかないんだろうな、というのも同時に感じたかなと思います。

**佐藤：**この町づくりのコンセプトは、最初に美術館を建てて、これを柱にして、次にアート作品で人を呼ぼう、３つ目にアートプログラムで回していこうという話で、今その３つ目でいろいろ考えられているところです。４つ目があるとしたらこの３つで人を呼べたあとに、地元の人にどれだけの値打ちを提供で

きるかっていうところですよね。

**三谷：**実際ここで運営に携わる学芸員・美術館スタッフの方２名にもついていただいてお話を聞いたんですけど、この女性の方は十和田以外の町からわざわざこの仕事のために引っ越してこられたりと、人を集めているのも事実で、こういう人たちがまた今後企画をやっていかれるのかなと期待はできますね。

**田中：**聞いていると行きたくなってきますね(一同笑)

**三谷：**ちょっと建築とは離れますが、日本の都市が今後選別されていくというか、東京には人口が集まり続けるけれど、他の町はどんどん減っていくことになるのだと思います。その中で人口４～５万人規模の町は今後どうなっていくのかという問題はあると思うんですね。そうすると町同士が人口の取り合い、要は競争ということになってしまうのかなと。その町の人にとっては死活問題だけど、日本全体を見た時にその状況が幸せなのかなというのはちょっと気になるところですね。

**本田：**そうですよね。人口が減るっていうのはやむを得ないことだと思うんです。減った中で、そこに住んでいる人たちがどう幸せに思えるか、というのが大切になってくるんじゃないかなと。松本茶舗の松本さんのように、自分で動いて、いきいきとやれると、すごく幸せに生きられていると思うんですよ。そういう人たちが増えて、経済的には苦しくても、幸せに暮らせるっていう状況が理想なんだろうな、と。

**田中：**よく地方の再生とか活性化ということで話題になるんですけど、最近僕もたまたま島根に行って、そこは大阪などとは環境が全然違うんですよね。でも逆にそこに魅力を感じて移り住むＩターンの人が増えているように思うんですよ。その切り口は、外の目から見た資源を活用したもの。例えば「こんなところに高級なフランス料理店があるのか」というような、そこの地元の食材にこだわるとか、あるいはそういう場をつくっていくような建築的な仕掛けとか。今までの施策とは違った形で、そこにないものを生み出すとか、あるものを活かすとか、いろんなやり方があって、元々あったものを活かすだけじゃなくて、なかったものを呼び込んでいくような、かなり刺激の強いもの、インパクトのあるものですね。今の話だと、そういうものの一つに建築がなったのかなという感じがしますね。仕掛けとしてね。

## 銘建工業

**戸川：**先ほどの十和田は建築が町なり地域を元気にするという感じでしたが、ここはある企業の取り組みが行政ともうまく協力できて、すごく元気を生み出しているっていう一つの事例かと思います。

**三谷：**一つの企業が人口５万人くらいの町の出生率を増やすというのは、その企業のおかげだけではないでしょうけど、すごいことですよね。文章の中で、スウェーデンやフィンランド、オーストリアでは年間生育量の60%以上が伐採されているのに対して、日本の森林は20%程度しか伐採されていないとのこと。マーケットの広さの問題もあるのでしょうが、一方で、日本では木を切る事が悪であるとか、木材を燃やすことがよくないとか、環境的にどうなの？と思っている人が多いような気がします。社会の価値観も木材消費に反映されているんじゃないでしょうか。

**岡田：**日本全体として、林業が産業として意識されていないのが大きな問題だというのが今回の取材から感じたことです。昔は柱などの製材がものすごく高く売れたから端材や製材くずを捨てても儲かっていたんですけど、そうではない時代になっているのに、産業資源として意識されていないから、簡単に儲からないなら手を引いてしまう、という印象です。

**戸川：**もったいないですね。そもそも昔の日本人は、木とうまいこと付き合っていたと思うのですが。

**田中：**最近では建築でも木材を使おうという動きが強いのは事実ですね。それをもっと、例えば教育の分野では、構造でも木構造を学科の特徴としてやっていこうとか、企業の場合も、地場にある資源をうまく使って回していくとか、特色を出せる可能性を感じます。できればそれがもっと具体的にわかるアクションがあれば、それは建築でなくてもいいんですけど、さらに関心が高まるんじゃないかなと思います。

**勝山：**木を使うということがこうやって広いビジネスになっていくという視点で、もっと僕たちも勉強しなきゃいけない。ただ環境にやさしいから木を使いましょうというのとはちょっと違う話で、面白いと思います。

**佐藤：**木そのものがもっと安くなると、もっと使えますよね。この地域でこれだけ具体的な取り組みがあれば、よその地域でもできる話ですよね。今は、木はむしろ高い材料になっています。建築で木を使う時も、ついつい節とか気にしてしまうのもあるだろうし、法的な話もあったりしますが。日本人って、木を使う時にやっぱりそのままあらわしたくなるじゃないですか。CLTが普及しているヨーロッパなどでは、そういうのがないって聞いたんですよ。木は材料だと。仕上で隠すものだと。日本で耐火建築に木を使うのが難しいのは、それをデザイナーとして、あるいはアピールとして、みんなあらわしたくなるから。そうすると、技術的には劇的に難しくなる。そういうマインドの違いも大きいですね。

**槻尾：**CLTのようなもので木質材料の市場が開拓されていけば、間伐材とか端材みたいなものがバイオにいくっていう形で回り始めるような気がしますね。

**岡田：**CLTの市場という点で、輸出という話では、日本は基本的に自動車産業とかの加工貿易じゃないですか。材料を輸入して、加工して輸出しているので、輸入原価がかかっているんですよね。だから外貨の獲得という意味では意外と少ない。林業というのは、ほとんど国内の資源を使って外貨を獲得できるという意味では、日本の経済にとってひとつ面白い見方かなと思いました。

**三谷：**面白いですね。そういう風に木材の普及が進めば…。多くの林業の町は過疎化が進んでいて、「限界集落」と言われて真っ先にイメージするのはそういう町だったりしますよね。そういう地域が元気になれる可能性が生まれるという意味では、地域の問題だけではなくて日本全体に対する問題提起でもあるし、非常に面白い事例だと思いました。

**勝山：**これだけの資源、日本の唯一の資源といってもいいようなものなので、なぜもっと使わないんだろうと思いますね。

**田中：**小国町なんかは木材で建築をどんどん

作っていますよね。木材でこれだけできるんだということを見せつけるようなことをされている。ああいうシンボリックなプロジェクトというのは、地域の中に建築の力でもう1回元気を引き起こしていく起爆剤になるんじゃないかと思うんですけどね。どなたかそういう建築をぜひ作ってください（笑）

**勝山：**あとは町でビルに使わないと爆発的には増えないでしょうね。そのためにも、もっとこういう背景をきちんと理解した上で、木を使うことが日本を救うことになるかもしれないというぐらいの意識が必要と思います。

**岡田：**環境的配慮から「地産地消」という考えがありますが、産業という観点からはもっと大規模にやって輸出も見据えた方が有効なのは間違いないですね。木材自体は広範に流通することができる材なので。

**勝山：**林業の復活に貢献するために、もっとビジネスの視点を大切にする必要がありますね。

**三谷：**最後の社長さんの言葉が深いですね。続けること、持続可能性の方法と価値…。哲学的だけどすごく深い言葉だと思います。

**勝山：**木を使うことによって社会が変わるということをみんなで共有し、木材を使うことの意義をもっと深く知り、勉強することが大事だと思いました。

## くまもとアートポリス

**田中：**当初の意図としては、くまもとアートポリスは紹介すべき建築作品が多いということで熊本県に連絡したんですが、意外にも、自分たちが今取り組んでいる「みんなの家」を紹介したいから、そこを案内すると言われました。そういうことで単純にアートポリス作品の話じゃなくて、復興という中で、地域の人とどういう風に建築の力を発揮するかという話です。熊本県が東北の被災地を支援しようと、コミッショナーの伊東先生と「みんなの家」という形で、みんなで考えて、みんなで計画して、みんなが使う、みんなで育てるというやり方で作ったんですね。その後の熊本の水害、そして地震があった後に熊本の仮設住宅すべてにそういうものを作る。作る時に規格的なものと、建築家が関わって頑張って作るものとの二種類を考えた。その中で建築が関わるところにおいてコミッショナーが「あなたはここでやってくれますか」ということで頑張って、しかもそれは全部木造でやるということを決めて。地場産の材料等を中心に木造で、みんなの手でやると。それでどういう状況か見てくださいということでした。

**勝山：**うまくいっている、いっていないというのもあるのでしょうか。

**田中：**ありますね。規模で集会室と談話室とを分けていますが、談話室が少なく、それより大きな空間の集会所ではみんな集まって賑やかでしたね。明らかに活気のあるところと、そうでないところとの違いですが、そこで世話をしている人たちに温度差があるなと思います。活気のあるところで話を聞くと、避難所の時から一緒に活動していると。そういうコミュニティの連続でやっている中でさらに「みんなの家」をみんなで作るということで盛り上がっていったそうです。

**勝山：**元々地域のコミュニティの集まり方にも左右される一方で、作る側とのコミュニケーションの問題と、両方あるのでしょうか？

**田中：**そうですね。それと住まい手、被災者だけじゃなくて、熊本、地場の学生さんの関わりがすごく大きいですね。サポートするために、ベンチとか、家具とか、それこそ県産の木材を使って手作りで、ワークショップとか、そういうことをずっとやっていますね。今までは敷地があったら目いっぱい戸数を稼ぐ仮設住宅を建てるところですが、間引いて通路を作って、コモンスペースを取るような形で、伊東さんがスケッチをされて、ワークショップを繰り返して。そういうところはだいぶ違うと感じましたね。

私が気にしたのはやっぱり建築の作り方、作られ方がずいぶんと変わってきたと。地元の人の関わり方が密になっていると感じましたね。

**三谷：**昔の「大先生が作るアート」みたいなものから、住民とか社会とつながっていこうという風に、建築全体にもそういう大きな流れがあるのかなと。

**田中：**公共建築の公共とは一体なんだろうと。例えば、「みんなの家」というのは仮設住宅団地ですから、住宅ですよね。プライベートですけど、そこにコモンスペースがあり、それはみんなが集まって使う公共空間なんですね。そこにどういう仕掛けを作ったらいいのか。作る時だけじゃなくて、維持管理のことも含めて、非常に実験的なことをやっておられて、その辺がすごく面白いと思いました。今、復興住宅も木造でモデル住宅を作って展示していますが、それも含めてずっと復興に至るまでのプロセスで、住民を仲間として、建築家が一緒に取り組んでいく。そういうモデルができていくという感じがしました。

**三谷：**そこは地元の建築家が関わっている例が多いですか？

**田中：**ほとんど地元ですね。その時に、建築士会とか組織的に関わっている設計グループもありますね。もし大阪で何かあった時に、日本建築協会が同じように関わることができるかどうか。熊本の建築家関係のグループの社会的使命を果たす熱き想いを感じます。私は阪神淡路大震災の時に、打ちのめされたような気分を味わいました。熊本の人たちもそういう中で、立ち上がったんじゃないかと思いますね。ただ“伊東豊雄先生の「みんなの家」”ということしか出てきていない。背景にどういうことがあったか、それを私は知らせるべきだと思います。それは知事の判断も大きいですね。

**勝山：**これからのあるべき建築家と地域の人との関わり方のモデルケースになりますね。

**三谷：**飛行機で熊本に向かっている時、目が覚めたらちょうど下に熊本城が見えて、空港に近付いたらブルーシートのかかった家ばかりで。そこが被害のひどかった益城町で、つぶれている家もまだまだ多く残っていて、復興、復旧という意味ではあまり進んでない。

**田中：**建築だけじゃなくて道路とか、護岸などのインフラもすごい被害ですね。

**三谷：**そういう中で「みんなの家」はできているわけですね。

**田中：**そうです。それはもう素晴らしく早かったです。あのチームワークのよさはすごいですね。

**勝山：**それはすごいですね。阪神淡路大震災の時にはまだそういう活動は目立たなかったように思います。

**田中：**初めてのことでしたからすべてが。

**三谷：**あの震災までは、「ボランティア」という言葉自体まだ定着していなかったですよね。

**勝山：**そういう時でも建築が役に立つことが出てきているという一つの例ですね。

**田中：**だからそれをモデルにして、また何かあった時にはぜひ立ち向かってほしいなと思います。

そういうことで今回の取材は「みんなの家」を中心にしながらも、ユニバーサルデザインの部分でかかわったものを自分の手の届く範囲で紹介させてもらおうと思って、ユニバーサルデザインの導入を試みたアートポリス作品のひとつである清和文楽の邑なども紹介させてもらいました。考え方として新たなアートポリスの方針というのを出されていまして、地域の人たちと一緒に、地域のいいところを活かして、みんなで作るんだ、といったことを書いた文章をいただいたんです。だからそれを今回も紹介させていただきました。アートからコミュニティへという建築のスタンスの違い、それは背景には以前から熊本県が力を入れていたユニバーサルデザイン、地域の多様性の中で住みよい安全・快適な環境を作るという、そこに帰着していると思います。ずっと以前から知っている県の建築職、担当者の方にインタビューして、まとめさせてもらいました。

## 奄美ミュージアム構想

**田中：**奄美はエコミュージアムとして、地域そのものをまるごと博物館・美術館・ミュージアムにするという構想を受けて、民間の意識を高めていきながら、町づくりが取り組まれています。まもなく、奄美群島全体が世界遺産になりそうです。ミュージアム構想から世界遺産へということもテーマで、関係するところを取材しました。その中で美術館、博物館などのほか、例えば自然だと、マングローブの森でカヌーで生態系を観察する、あるいは食のミュージアムとして黒糖焼酎とか、黒糖を作る。そういうものを村として展示している。それは民間運営なんですよ。役所が作る「なんとか博物館」じゃなくて、エリア全体をテーマパークのようにして民間がビジネスにしている。外から来た人も、地元の人も、子供たちも、そこで学ぶ。そういうミュージアムを紹介していこうと思いました。さらに自然とか歴史とか普通のミュージアムだけじゃなく、戦争ミュージアムもありました。第二次世界大戦中、アメリカ軍が大島海峡を行くときに、魚雷の体当たりはよくご存知ですけども、ボートに爆弾をいっぱい積んで体当たりをする。そのために、島の洞穴みたいなところに身をひそめて、敵の船を待ち構えているという。それが遺跡になっているところがあります。群島全体が世界遺産になるんですが、それは自然遺産のことだけじゃなくて、日本にとって、あの地域にとって、大きな歴史ミュージアムですね。

また、大島紬が高価だといわれるけれど、これだけいろんな人の手をかけてやっている仕組みなんだということを、数少なくなっているけれども、一つのミュージアムとして見せる。そういう意気込みを持つ方に出会ったので、そのあたりを中心に書かせてもらいました。結果として６ページになったんですけど、ぜひ碧い海、青い空が伝わるカラーページを希望したいなと（一同笑）

**勝山：**そこに建築関係の人は関わっているんですか？

**田中：**私は奄美観光大使として関わっていますが、会社は内地の大手事務所と地元がJV（共同企業体）の形で仕事をするパターンが多いみたいですね。

**勝山：**そのミュージアム構想を推進しているのはどのような…

**田中：**奄美群島協議会という別の組織があって、奄美大島だけではなくて、徳之島とか、沖永良部島とか、全部入れて基本的には観光関連のことを眼目にしてやっていますね。私がなぜ奄美観光大使を拝命して関わっていったかというと、以前、奄美海洋展示館の基本構想、基本設計などのお話があって、そこからの付き合いなんです。その時にここだけで点的に作るんではなくて、島全体をミュージアムとしてやったらどうですかと提案したんです。それがのちにエコミュージアムということになっています。今回、実際に島の中でどういう変化が起こっているか、それを取材しようと思って拾っていったら20カ所ぐらいになってしまいました（笑）

**勝山：**それだけの広がりを持ったのは田中先生のプランが良かったという以外に、どういうところに要因があったのでしょう。

**田中：**まあ折に触れ、そういう話を黒糖焼酎を飲みながらしゃべっていたという、熱き語らいが大きいんじゃないかなと（一同笑）

**勝山：**それで人がどんどん出てきてという。

**田中：**それと、奄美に同行する方々による外からの刺激、情報が結構大きい。結構オープンですから、いいことは取り入れてやろうというすごく前向きなところがある。

**三谷：**奄美自体は観光業がやっぱり主力産業ですか。

**田中：**今はね。昔は大島紬。建設業のウェイトも大きいですね。それと健康食品。すごくヘルシーなものがたくさんあります。長寿の島ですね。

**三谷：**産業構造が変化していくと、地元の人と外から来る人との間での、コミュニティの分断が起こったりする心配もあるんですけども…

**田中：**そうですね。外から来た人で、マリンスポーツばかりやって、あまり地域の人と付き合っていない人もいるという話を聞いたことはあります。しかし、去年の４月にデンマークの友人が奄美の自然を味わいたいのでぜひ行きたいとのことで、障がい者の方を含め43人で来られた際に、地元の人に相談したら早速、受け入れ実行委員会を作って、食べることから寝ることからいろんな施設を点検して、みんなでバリアフリーチェックして、「おもてなし」していただきました。奄美にはそういう、人を大事にするという風土性がすごくあるなと思いましたね。だから今おっしゃったような新旧の分断とかコミュニティの問題とか、奄美に関していえばそんなにないような感じを私は持っています。むしろウェルカムで、昔からの友達のようにいきなり盛り上がって、一緒に夜になったら踊りまくるとか歌いまくるとか、そういうところはありますね。

関西に多いですよ、奄美出身の方。大阪とか神戸に。去年、建築協会の関係の方にも来ていただきました。たいへん勉強になったとおっしゃっていました。

**勝山：**最初の十和田の例と比較すると面白い

かもしれませんね。

**三谷：**昔からそこにお住まいの方と、新しいコミュニティとの関係がうまくいっているというのは貴重な例でしょうね。奄美大島の風土が影響しているのかもしれない。

**田中：**まだよく見ないとわからないと思いますが、そういう風土性はありますね。親しみやすいというかね。そういう「甘み（奄美）が強み」ですね（一同笑）

**勝山：**いろんな環境、資産、歴史も全部フルパッケージで出しながらうまくやっている例として、面白いですね。さっきの十和田とは良い意味で対照的な例だと思います。

**田中：**元気の出るところですね。明るいです。

**勝山：**やっぱり人ですね、最後は。人にスポットが当たるまとめ方になったら面白いんじゃないですか。

**田中：**人と人、人と地域のつながりですね。そこで建築はどう介在して、どういう仕掛けで、どういう役割を果たしたかという現象ですね。確かに人ですね…

**勝山：**奄美はまさにそういう感じですね。

**田中：**それこそ奄美でのインタビューでは2時間ぐらいずっと話されていましたよ。録音はしたんですけど、文字起こしが大変で（笑）

**勝山：**人の輪が大きくなったということなのでしょうね、奄美は。十和田はこれから大きくなっていくことが期待されます。

**三谷：**これから広がっていくと思います。

## Share金沢

**本田：**社会福祉法人佛子園の施設長と、五井建築研究所で設計を担当された方に、お話を伺いました。佛子園は、石川県白山市のお寺から始まり、戦災孤児や障がいのある方、身寄りのない子供たちを受け入れる施設としてスタート、その後社会福祉法人の認可を取得して、施設を運営するようになりました。市内で103件くらいの様々な事業をやっておられますが、このShare金沢につながる面白いプロジェクトがあります。一つは西圓寺という事業で、住職が亡くなって荒れていた寺を、町の人たちからなんとかしてほしいと言われて、２年くらい話し合って、誰もが集まれる憩いの場としてよみがえらせました。寺の本堂をカフェにしたり、町のコミュニティスペースとして作り上げたのが「ごちゃまぜ」の考え方の始まりです。

小松市は全体が人口減少地域になっていますが、唯一西圓寺のある野田町がこの９年間で、55世帯から71世帯まで増えているそうです。

Share金沢はいろんな用途があります。サービス付き高齢者向け住宅、児童入所施設、児童発達支援施設、就労支援施設、学生向け住宅、学童保育や自立支援施設、通所施設、いろんな施設が点在した町を作っています。

Share金沢でなぜ「ごちゃまぜ」の提案をしているのかというと、高齢者や学生等、様々な人に住んでもらって障がいを持つ子供たちを支えてもらおうというのが主な理由です。そこには施設内の人だけではなく、地域の人たちも含まれているのがポイントです。

私は最初、Share金沢という町の中に施設が点在し、その中で閉じられているのかと思ったんですけど、そうではなく、町全体のことを考えて、町の人たちともコミュニケーションを取り、敷地内に入れる入口も作って、町の人たちが普通に遊びに来られるような場所を作っています。デイサービスに通所される方に混じって地域の人たちが一緒に活動をされているそうです。

印象に残ったのが、「交流人口を増やす」という言葉です。施設に様々な人が来てもらえるような場所を増やしていこうという考えです。そのためには地域に開放する。地域の方々に来てもらい交流が増えると、相互理解が進み、地域にとっても大切な場所になります。人生に目的がある高齢者とない高齢者とでは要介護度に大きな差が出てくるというデータがあります。歩行障害の発生率は４倍、認知症の発生率も3.5倍くらい変わってくるそうです。地域の人たちが外に出る仕掛けというのもこのShare金沢が担っているようです。

Share金沢では地域の高齢者が施設に来るきっかけづくりをしています。最初は強引に施設に連れてきて、突然、一緒に歌をうたいましょうとか、そのようなことを増やしていったら、少しずつ地域から来てくれる人が増えているそうです。

**田中：**長い間、福祉の町づくりとか、地域のコミュニティとか、バリアフリーとか、そういう細かいレベルじゃなくて、高齢者になった時にだれとどこに住んだらいいんだろうとか、本当は町づくりでどういう町がいいんだろうとか、一生懸命考えていますが、絶えず法律とか制度の縦割りというものがあって。自分の親をどうこうすると考えた時でも、ないんですね、ぴったりのものが。自分で作るわけにもいかないし。今お話を聞いていて、100%じゃないとは思いますけど、相当な部分、理想のものをこの「ごちゃまぜ」の形式の中に、地域の人が訪れるような仕掛けとしてやっているという、すごくいい事例かなと思いました。

**本田：**みんな生き生きと元気な声で挨拶されていました。健常者も障がい者も関係なく普通に、一緒に生活している感覚がすごいなと思いましたね。

**佐藤：**運営費用はどうやって捻出しているのですか？

**本田：**詳細は聞けていませんが、就労支援施設としてレストランなどの様々な事業で障がい者の方が働いてお金を生むこともやっているみたいですね。佛子園は奥能登でビール事業をやっていて、そこでは年間2,000万の酒税を収めているようです。鬍鬚張魯肉飯（ひげちょうるうろうはん）という台湾料理のファストフード店を経営していたり、他と競争が少ないニッチなところを事業化しているというのも戦略の賢いところだなと。

**田中：**なかなかやり手ですね。環境としてはどうでしたか？空間として。

**本田：**空間はとても質が高かったです。福祉施設は「施設っぽい」ということをよく言われると思いますが、そういうのはまったくなく。洗練されたデザインがあるから、障がい者も健常者も違和感なく、一緒にすごすことができる空間だなと思いました。

**勝山：**それは大事なことなんですよね。確かにこの写真、町のおしゃれなカフェって感じでいいですね。

**本田：**設計事務所の代表がすごくこだわりを持っていて、偽物の木材は絶対に使うなと。25棟の敷地内に市道を通し、接道させて全部敷地を分けて建物を建てているんですけど、なぜそういうやり方でやったのか聞いたんですね。すると、一団地で設計すると耐火性能基準が厳しくなるため、建物としての質が保

たれないから、あえて敷地をわけて木造で建てたと。設計側のこだわりが相当あると思いましたね。

**田中：**お店などは自営ですか？

**本田：**お店は自営と、テナントも入れていますね。ジャズ喫茶があったり、居酒屋もあります。ちゃんとコンセプトを理解してやってくれる事業者を集めているそうです。そこで障がいのある方も一緒に働いている。

**田中：**それぞれのやり方についてかなり専門的な知識とか経験がいると思うんですよね。どういう人的なチームでやっているか、そういう興味があります。

**本田：**WHOが「高齢者にやさしい都市づくりガイド」という論文でエイジフレンドリーシティというのを提唱しているんですけど、安心して高齢者が暮らせる場所には８つの要素があるそうです。屋外スペースと建物、交通機関、住居、社会参加、尊敬と社会的包摂、市民参加と雇用、コミュニケーションと情報、地域社会の支援と保健サービス。この中で社会福祉法人ができるのは、保健サービスと、住居の提供の二つだけ。残りを実現するために、テナントさんとか、住民の方に協力をしてもらうんだとおっしゃっていました。

**三谷：**従来の「管理する」という観点からの福祉の考え方だと、どうしても施設自体がどちらかというと人を寄せ付けないように作られてしまう。ここはその概念とは逆で、これまでの福祉の目線とは違うところからやらないと、こうはならないんだろうなという感じがします。管理をすればするほど不完全なところがいっぱい目について、もっと管理しなきゃってなるんだけど、一回こういう風にシステムを作って外に開いたら、実は人の目が入ったり地域コミュニティとつながっている方がむしろ安全な場所になっているということもあるかもしれないですよね。これから日本は高齢者の方が増えていくし、社会的弱者の方にどういう環境をつくっていけるかいうのはすごく大きな課題になっていくと思うんですけど、社会全体として核家族化が進み、それぞれが閉じていっているような現在の状態の中で、一つの解決策としてすごく理想的な感じがしますね。

**勝山：**それを理想論だけではなく、ちゃんと経営的にも成り立たせているというすごさがありますね。

**本田：**相当な労力をかけておられると思います。Share金沢のモデルを他の地域でどうやったら展開していけるかというポイントをお聞きしましたが、地域によって条件がまったく異なるので、同じことが都心部でできるかといったら、できないのではないかと。Share金沢は郊外なので土地も安いため、広い敷地に平屋の施設を点在して作っていけたっていうこともありますが、まずはその町をちゃんと知ることだと。町の特性をちゃんと理解して、キーパーソンを見つけて、そういう人たちと地域と一緒に町づくりをしていくというところが大事だと。

**田中：**かなりのスタッフが必要になると思いますが、そういう人たちの研修、教育、仕込みとか、どうやっているんでしょうか？スタッフは全員地元の方ですか？

**本田：**恐らく地元の方だと思います。

**田中：**やる前にモデルになった事例があるんでしょうか？それともまったくオリジナルなんでしょうか？

**本田：**オリジナルだと思います。西圓寺の事業の経験等、こんなのがあったらいいよねと思えるものや、地域のニーズをくみ取って作っていくことがShare金沢につながっていったということですね。

**田中：**きわめて素直な発想ですね。建築の分野で、建築学会などでは「建築企画」という分野があるんですね。計画とか設計の前に。企画のポイントとして何に着目するのかとか、その企画を実行するためにどういう手立てがあったのかとか、そういう研究テーマがあるんですけど、この場合はそのいろんなことの示唆に富んだ事例かなと思いますね。

**勝山：**ごちゃまぜっていうのがなかなかすごいですね。革新的な気がします。

**田中：**今の時代、違ったものが共存するというのは難しいんですが、素晴らしいと思います。

## 座談会を終えて

**勝山：**どれも面白いですが、なんとなく共通して見えるものってありますよね。

**三谷：**キーパーソンの存在とか。

**勝山：**そこでの建築の関わり方。

**三谷：**建築だけでうまくいくわけではないけれど、やっぱり建築がちゃんとしていないとうまくいかない。

**勝山：**そういう意味ではやっぱり建築の果たす役割って大きいですよね。

**田中：**たぶんこれまでの建築の作られ方で欠落していた部分が、相当大きなウェイトを持って求められていて、たぶん地域とか人とか、そのつながる仕組み、仕掛け。たぶん建築というのは一つの空間形態ではありますけど、その空間以上に人と人がつながる何か。その何かをどうやって作るのか。生み出すのか。それは建築家一人の問題じゃないなという感じがしますね。あるいは建築家が何かをもっと勉強するヒントというか手がかりがありそうな気がしますね。だからずっと事例の話を聞いていて、重ねていったらなんとなく大事なことがあぶりだされているような感じがしますね。

**勝山：**これだけのことがいろいろやれているんだっていう中で、そこにちゃんと建築が介在して進んでいるっていうことはすごく元気になる話ですし、素晴らしいことだと思います。

**田中：**この特集は壮大な特集だと思ったけど、やってよかったですね。

**勝山：**そうですね。面白いです。今の話を聞けただけでも。

**田中：**これで終わりにしないでやりましょう。続編を期待して（一同笑）

**勝山：**本日はありがとうございました。



# ■日本の「建築と社会を繋ぐ」プロジェクト100

| No. | 都道府県 | 所在地 | プロジェクト・建物名等名称 | 内　　容 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 北海道 | 札幌市 | 札幌大通地下ギャラリー500m美術館 | ・殺風景だった地下通路を日本最長の500m美術館として生まれ変わらせたプロジェクト |
| 2 | 北海道 | 岩見沢市 | 岩見沢駅 | ・全国発の公募型駅舎デザインコンペで選定。市民と公共建築を繋いでいく様々な手法が注目された |
| 3 | 青森県 | 八戸市 | 八戸ポータルミュージアム　はっち | ・八戸市民や観光客の交流拠点。地域の資源を大事にしながら新しい魅力を生み出すことをコンセプトに |
| 4 | 青森県 | 十和田市 | Arts Towada | ・美術館を核としたアートによるまちづくりプロジェクト |
| 5 | 岩手県 | 紫波郡紫波町（シワチョウ） | オガールプラザ（オガールプロジェクト） | ・補助金に頼らない公民連携による地域活性化プロジェクト。ホテル・体育館・図書館・カフェ・産直マルシェなどが入居する施設群 |
| 6 | 岩手県 | 北上市 | 北上市文化交流センターさくらホール | ・アートファクトリーと呼ばれる大小様々な多目的ルームが地域に開かれ、芸術文化活動の拠点となるような空間づくりが活かされている。2006年日本建築学会賞 |
| 7 | 宮城県 | 仙台市 | せんだいメディアテーク | ・地上７階地下２階建。館内には図書館やギャラリー、スタジオ等があり文化活動の振興を担う。構造体がユニークで建物自体にも魅力があり、その吸引力から周辺地域の様子が変化しつつある。2000年竣工 |
| 8 | 宮城県 | 仙台市 | 卸町コミュニティプラザ「ほるせ」 | ・流通団地の再生。16年かけて住民とともにつくりあげた計画。流通の場に生活の場が生み出された |
| 9 | 宮城県 | 気仙沼市 | 「失われた街」模型復元プロジェクト | ・東日本大震災により失われた、街や村を模型で復元。暮らしの中で紡がれてきた記憶を保存・継承 |
| 10 | 秋田県 | 秋田市 | 秋田駅の木造バスターミナル | ・地場産の秋田杉をフル活用し、地域修景に貢献する公共交通機関施設 |
| 11 | 秋田県 | 秋田市 | 古民家 [シェアビレッジ] | ・消滅の危機にある古民家を村に見立てて再生。補助金に頼らず100年先を見越し、都市と田舎をシェアしあうコミュニティの形成 |
| 12 | 山形県 | 東田川郡庄内町 | 庄内町新産業創造館クラッセ | ・庄内町の６次産業化を支援する目的で建てられ、地元作物や製品の販売所のほか、共同利用可能な施設も整備 |
| 13 | 福島県 | 耶麻郡猪苗代町 | はじまりの美術館 | ・築130年の酒蔵を改修した美術館 |
| 14 | 茨城県 | 茨城県北地域６市町<br>日立市　高萩市<br>北茨城市　常陸太田市<br>常陸大宮市　大子町 | KENPOKU ART<br>茨城県北芸術祭 | ・茨城県北６市町（KENPOKU）の豊かな自然と町を舞台にした国際アートフェスティバル。自然と対話するアート、科学・技術を利用した先進的なアートに焦点を当てる |
| 15 | 栃木県 | 塩谷郡高根沢町 | ちょっ蔵広場 | ・大谷石を積んで造った古い石蔵を保存。コミュニティの活動の中心となる、新しい駅前広場 |
| 16 | 群馬県 | 前橋市 | アーツ前橋 | ・大規模物販店舗を改修した美術館。地域の芸術文化活動の支援や振興を担う施設として再生 |
| 17 | 群馬県 | 富岡市 | 上州富岡駅 | ・世界遺産に登録された富岡製糸場の最寄り駅。「駅まち会議」で方向性を議論 |
| 18 | 埼玉県 | 川越市 | 川越蔵の会 | ・若手商店主や研究者、建築家などによる川越の蔵造りの街並みを保存するため勉強会 |
| 19 | 千葉県 | 千葉市美浜区 | 千葉市立打瀬小学校 | ・1995年に入居が始まった「幕張ベイタウン」内にある。同年４月に開校した小学校で校門や塀を設けず街と一体化したオープンスクールの先駆け |
| 20 | 千葉県 | 柏市 | UDCKまちづくりスクール | ・これからのまちづくりの担い手を育てることを目的とした市民講座。東京大学、千葉大学、柏市、三井不動産、柏商工会議所、田中地域ふるさと協議会、首都圏新都市鉄道の７つの「構成団体」により、共同で運営 |
| 21 | 東京都 | 武蔵野市 | ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス | ・図書館、生涯学習支援、市民活動支援、青少年活動支援、の機能を併せ持った施設。カフェや様々な空間を提供することで多種多様多世代が情報を共有・交換し、知的な創造や交流を生み出しまちの活性化を目指す |
| 22 | 東京都 | 渋谷区 | 代官山ヒルサイドテラス | ・長い時間をかけたまちづくり。良質な環境・景観の維持と周辺まちづくりへの展開 |
| 23 | 東京都 | 千代田区 | 東京駅の復原 | ・日本の顔となる拠点の整備 |
| 24 | 東京都 | 台東区 | 国立西洋美術館 | ・世界遺産に登録された現代建築　ル・コルビュジエが日本に残した唯一の建築作品 |
| 25 | 神奈川県 | 横浜市 | 京浜急行電鉄黄金町高架下新スタジオ+かいだん広場 | ・高架下空間を活用し文化芸術スタジオを建設するプロジェクト |
| 26 | 神奈川県 | 横浜市 | 横浜赤レンガ倉庫 | ・ストック活用・リノベーション建築の先駆け |
| 27 | 神奈川県 | 横浜市 | 横浜大さん橋国際客船ターミナル | ・客船への乗降に必要な高さを確保しつつ、山下公園側あるいは赤レンガ倉庫側からの横浜港の眺望を妨げないように配慮。柱のない大空間、バリアフリーを採用 |
| 28 | 新潟県 | 十日町市 | 十日町市市民交流センター「分じろう」<br>十日町市市民活動センター「十じろう」 | ・新潟県十日町市の中心市街地に建つふたつの建物の改修。マーケット広場と呼ばれる半外部空間は両施設に設けられ、道路と建物の間に位置する活動の場を提供する |
| 29 | 新潟県 | 長岡市 | アオーレ長岡 | ・市役所、ホール等の交流施設、屋根付き広場「ナカドマ」を擁する木とガラスを多用した美術館のような複合交流施設。ナカドマを取り囲んで市役所、アリーナ、多目的ルームを配置 |
| 30 | 富山県 | 富山市 | ①富山市コンパクトシティ計画<br>②富山市まちなか賑わい広場<br>「グランドプラザ」 | ①公共交通・パブリックスペースを軸としたコンパクトシティの先駆的取り組み<br>②中心市街地に計画されたガラス屋根の全天候型多目的スペース。昇降式のステージが設けられその下部は収納庫になっている。使わない時は収納庫を地下へ埋入させ、スペースを有効活用している |
| 31 | 富山県 | 氷見市 | 氷見市庁舎 | ・体育館のリノベーションから生まれた、公民連携を具現化する庁舎。窓口のワンフロア化、ガラス張りの市長室、ワークショップスペース等設置など開かれた空間を目指す |
| 32 | 石川県 | 金沢市 | 金沢21世紀美術館 | ・『まちに開かれた公園のような美術館』をコンセプトに、円形デザインの建物には表と裏のないガラスのアートサークルが採用され、トップライトや光庭など明るさや開放感にも十分に配慮している |
| 33 | 石川県 | 金沢市 | Share金沢 | ・高齢者・障がい者・若者らが共に支えあって生活できる新しいコミュニティのかたち |
| 34 | 福井県 | 敦賀市 | 敦賀駅交流施設　オルパーク | ・駅機能の一部を補完し、且つ公民館の機能を持たせた交流施設。地元に親しまれた２代目駅舎の特徴「２つのウイングと中央の玄関」の構成を木材で仕上げた「２つの箱」で再現しガラスの外壁で包まれた外観 |
| 35 | 山梨県 | 甲府市 | 山梨文化会館改修・免震化工事 | ・近代建築の名作が街の資産となり次の50年を生きる<br>・DOCOMOMO JAPAN選定 日本におけるモダン・ムーブメントの建築選定作品 |
| 36 | 長野県 | 上高井郡小布施町 | まちとしょテラソ | ・「学びの場」「子育ての場」「交流の場」「情報発信の場」の４柱による「交流と創造を楽しむ、文化の拠点」という理念で建築された町立図書館。大きなワンルームのような空間構成で音楽も流れるおしゃれな図書館 |
| 37 | 長野県 | 塩尻市 | えんぱーく | ・中心市街地活性化の拠点として整備された図書館、交流センター、子育て支援センター等の複合施設。4つの大きな吹き抜けを通じて自然の光が降りそそぐ空間が広がる |
| 38 | 長野県 | 茅野市 | 茅野市民館 | ・数多くのワークショップを重ね、市民による、市民のための新しい公共施設のあり方を提示 |
| 39 | 岐阜県 | 岐阜市 | みんなの森　ぎふメディアコスモス | ・市立中央図書館、市民活動交流センター、多文化交流プラザ及び展示ギャラリー等からなる複合施設。岐阜の県産材である「東濃ひのき」を使った特徴的な「木製格子屋根」 |
| 40 | 岐阜県 | 中津川市馬籠 | 藤村記念館 | ・第１回日本建築学会賞受賞。地域資源により住民参加でつくられた。今年受賞の堀部氏が受賞時に語った作品 |
| 41 | 静岡県 | 磐田市 | 豊岡中央交流センター | ・市町村合併に伴う既存施設の更新。案作成を住民・行政と広く共有して設計。子育て支援施設を併設した市民活動やイベントのための多目的ホール・会議室・調理室・健診室を持つ |
| 42 | 静岡県 | 富士宮市 | 日本盲導犬総合センター | ・富士山麓につくられた盲導犬の育成や引退犬が暮らすための施設。2009年日本建築学会賞 |
| 43 | 愛知県 | 名古屋市 | 久屋大通公園 | ・名古屋市のシンボルロード100m道路「久屋大通」の中央部にある、南北約2kmにわたる帯状の都市公園。市の木クスノキに統一し景観を演出、記念モニュメント、噴水・流れを配置し中心地に名古屋テレビ塔がそびえる |
| 44 | 三重県 | 伊勢市 | おかげ横丁 | ・伊勢神宮皇大神宮（内宮）前にあるお蔭参り（お伊勢参り）で賑わった江戸時代末期から明治時代初期の門前町の町並みを再現した観光地 |
| 45 | 滋賀県 | 近江八幡市 | ラ コリーナ近江八幡 | ・ゆったりと長い年月をかけて人と自然を繋ぐプロジェクト。メインショップは天然芝が屋根を覆う外観で、背景の山々と時を同じくし彩りが移ろう。敷地内は工事が進行中で、その土地であるべき未来を目指している |
| 46 | 滋賀県 | 近江八幡市 | 一粒の会（滋賀県） | ・ヴォーリズ建築の保存活動による文化の継承 |
| 47 | 滋賀県 | 近江八幡市 | 「波打ち際」の風景ができるまち | ・八幡堀をはじめとした風景の再生、「水郷風景計画」。まちづくり活動に取り組む様々な市民組織の形成。ヴォーリズ建築の再生等 |
| 48 | 滋賀県 | 守山市 | セトレマリーナ琵琶湖 | ・ホテル、バンケット、チャペルからなる複合施設。琵琶湖のエコトーン（湖から陸地にわたる生態遷移）を再生させるために、前面に内湖（ビオトープ）、背面に里山育成林をつくりその間に建築を配置している |
| 49 | 京都府 | 京都市 | 京都国際マンガミュージアム | ・日本で初めての総合マンガミュージアム。生涯学習、観光誘致、人材育成や新産業創出等、地域社会の還元・貢献できる形態 |
| 50 | 京都府 | 京都市 | 町家再生で職住一体のまちづくり | ・京町家ネット、NPO法人古材文化の会、町家倶楽部ネットワーク、関西木造住文化研究会（KARTH）、京都府建築工業協同組合等による町家の保全・再生・活用策の自主的な展開。「京町家ファンド」の設立等 |
| 51 | 京都府 | 京都市 | 京都御所 | ・古来の内裏を保存している建築物。現在のものは安政２年（1855年）の造営。平安時代以降の建築様式の移りかわりを見ることができる |
| 52 | 京都府 | 舞鶴市 | 舞鶴赤レンガパーク | ・1901年（明治34年）旧海軍舞鶴鎮守府の開庁から大正期にかけて建設された赤れんが建造物が建ち並ぶ公園。「赤れんが倉庫群」のうち８棟が国の重要文化財に指定 |
| 53 | 大阪府 | 大阪市 | 梅田スカイビル | ・２棟の頂部を連結するように円形の空中庭園展望台を設置した構造が世界的にも珍しい特徴を持つビル |

これらの100項目は、様々なすばらしいプロジェクトがある中で、特別編集委員会の委員により、選出しました

| No. | 都道府県 | 所在地 | プロジェクト・建物名等名称 | 内　　容 |
|---|---|---|---|---|
| 54 | 大阪府 | 大阪市 | てんしば | ・PPP、民間活力（民活）の利用による公園の整備。約7,000㎡の芝生広場、カフェ、コンビニエンスストアなどテナントも整備され、集客力の向上や新たな魅力の創出を目指している |
| 55 | 大阪府 | 大阪市 | イケフェス大阪 | ・「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」現在使用されている、大正末期から昭和初期に建設されたモダン建築から現代建築までを見て回り、一味違った大阪を感じる催し |
| 56 | 大阪府 | 大阪市 | 大阪ガスNEXT21 | ・1994年からロングスパンで暮らしと環境を探求する実験集合住宅 |
| 57 | 大阪府 | 大阪市 | 豊崎長屋等の大阪市立大学の取り組み | ・長屋建築の改修を通した新たなコミュニティの創出 |
| 58 | 大阪府 | 吹田市 | 市立吹田サッカースタジアム | ・市民参加によるスタジアム建設事業。スタジアム建設募金団体が３万人以上の個人、700社以上の企業から集めた募金と、スポーツ振興くじの助成金などを活用して建設したスタジアム |
| 59 | 兵庫県 | 宝塚市 | ゼンカイハウス | ・阪神淡路大震災によって「全壊」判定を受けた築95年の木造長屋の１棟を重量鉄骨によって補強し、オフィスとして修復、再生した |
| 60 | 兵庫県 | 芦屋市 | ヨドコウ迎賓館 | ・F・Lライトの作品。世界遺産登録への道を歩む建築 |
| 61 | 兵庫県 | 神戸市 | 灘五郷 | ・日本酒の名産地。阪神・淡路大震災で多くの蔵を失った。跡地はビルが建つなど景観は一変したが、往時の面影を守ろうと、地域住民が力を合わせて取り組む |
| 62 | 兵庫県 | 神戸市 | 人と防災未来センターの取り組み | ・阪神・淡路大震災の経験と教訓を後世に継承し、国内外の災害による被害の軽減に貢献 |
| 63 | 兵庫県 | 城崎町 | 城崎国際アートセンター | ・舞台芸術に特化したアーティスト・イン・レジデンスによる地域活性化事例 |
| 64 | 兵庫県 | 淡路市 | 戦没学徒記念 若人の広場 | ・第二次大戦中に戦没した約20万人の学徒を慰霊する全国唯一の施設。阪神淡路大震災の影響などにより閉鎖されていたが2015年に改修、再開園された。ペン先をかたどった記念碑は丹下健三設計 |
| 65 | 奈良県 | 奈良市 | 唐招提寺 | ・南都六宗の一つである律宗の総本山。金堂は８世紀後半、完成したといわれている。奈良時代建立の金堂、講堂が天平の息吹を伝える貴重な伽藍となっている |
| 66 | 奈良県 | 奈良市 | 奈良町南観光案内所<br>「鹿の舟」 | ・観光案内だけでなく「これからの生活をつくる」をテーマに、様々な情報や文化を発信する新しいスタイルの観光案内所 |
| 67 | 奈良県 | 香芝市 | Good Job! Center KASHIBA | ・障がいのある人と共に社会に新しい仕事を創り出す施設「街並みをつくるアートの森」 |
| 68 | 和歌山県 | 和歌山市 | 和歌の浦アート・キューブ | ・芸術文化活動の育成と支援を目的とした市民参加型芸術文化施設。古来からの景勝地の海岸沿いにキューブ型の建物が不規則に並ぶ |
| 69 | 鳥取県 | 米子市 | 東光園 | ・DOCOMOMO JAPAN選定。皆生温泉にある観光ホテル。設計、菊竹清訓。鉄骨鉄筋コンクリート（SRC）造で、客室階である５、６階を大梁からつり下げる構造形式 |
| 70 | 島根県 | 出雲市大社町 | 出雲大社庁の舎 | ・DOCOMOMO JAPAN選定。1953年に焼失した舎の再建で境内の中で不燃化が求められたことから、コンクリートが用いられている。設計、菊竹清訓。構造とデザインの一体。老朽化が課題 |
| 71 | 島根県 | 益田市 | 島根芸術文化センター<br>「グラントワ」 | ・美術館と劇場が一体となった建物。島根県が誇る石州瓦を壁に使用した全国で初の建物。耐久性が高く、時間によってうつりゆく壁の表情が豊か |
| 72 | 岡山県 | 倉敷市 | ①倉敷国際ホテル<br>②倉敷アイビースクエア | ①DOCOMOMO JAPAN選定。浦辺鎮太郎が和と洋の融合を意図して設計。1964年の第16回日本建築学会賞作品賞を受賞<br>②工場を観光施設へと改修。敷地内のホテルは倉庫をコンバージョンしている。赤レンガの外観に絡まる蔦は室温調整の役割を果たし、工場であった時代から用いられているという |
| 73 | 岡山県 | 加賀郡吉備中央町 | nap village | ・過疎化により廃校となった分校校舎をリノベーションした複合施設 |
| 74 | 岡山県 | 真庭市 | 銘建工業の取り組み | ・製材くずなどを利用したバイオマスエネルギー事業や、新しい木質構造材であるCLTの開発・普及を通じて、木材資源・林産資源の新しい価値を社会に提案する |
| 75 | 広島県 | 広島市 | 広島平和記念資料館 | ・DOCOMOMO JAPAN選定。「外国人に人気の日本の観光スポット」の第１位 |
| 76 | 広島県 | 広島市 | 広島市環境局中工場 | ・美術館設計のノウハウを応用し、ゴミ焼却場のイメージをひっくり返した施設。ガラス越しに稼働中のゴミ焼却装置を見ることができる「エコリウム」 |
| 77 | 広島県 | 福山市 | とおり町Street Garden | ・江戸時代から親しまれてきた歴史ある商店街の活性化プロジェクト。アーケードの鉄の柱を活かしながら全長440mの上空へ7000本のステンレスワイヤーを施し、新たな連帯感を再創造 |
| 78 | 広島県 | 尾道市 | ONOMICHI U2 | ・「瀬戸内しまなみ海道」はサイクリングコースとしても人気があり世界中から人が集まる。ONOMICHI U2は、自転車ごと泊まれるホテルを中心とした複合施設として海運倉庫をコンバージョンして開業。“その場所だからこそ実現可能な体験”を提供中 |
| 79 | 山口県 | 萩市 | 萩まちじゅう博物館 | ・江戸時代に形作られたまち全体を博物館ととらえる観光地づくり |
| 80 | 徳島県 | 上勝町 | RISE & WIN Brewing Co. BBQ & General Store | ・ゴミ集積所にあった建具や家具を再利用した地産地消的な建築設計のアプローチ。ゴミの削減を目的とした「量り売り」を実施する上勝百貨店のリニューアルオープン |
| 81 | 徳島県 | 佐那河内村 | 空き家再生と村の活性化 | ・空き家を再生した移住で過疎化が進むまちを再生 |
| 82 | 香川県 | 高松市 | 香川県庁舎 | ・DOCOMOMO JAPAN選定。コンクリートによる水平ラインの積み重ねが美しい建物 |
| 83 | 香川県 | 高松市 | 高松丸亀町商店街振興組合の取り組み | ・長期的視点に立ったまちづくりとしての商店街再生 |
| 84 | 香川県 | 直島町 | ベネッセアートサイト直島 | ・自然や、地域固有の文化の中に、現代アートや建築を置くことによって、どこにもない特別な場所を生み出していくこと |
| | 香川県ほか | 直島町ほか | 直島・犬島・豊島 | ・直島＝地中美術館や家プロジェクトなど、犬島＝犬島精錬所美術館や犬島「家プロジェクト」など、豊島＝豊島美術館など。建築＋アート＋αを巡る瀬戸内海の旅をとおして、不法投棄や過疎高齢化等の社会問題を抱える島々について考えを巡らせる |
| | 香川県 | 直島町 | 直島ホール | ・瀬戸内トリエンナーレの新たな目玉に。地域体育館、観光地化 |
| 85 | 愛媛県 | 今治市 | 伊東建築塾<br>大三島ライフスタイル研究所<br>今治市伊東豊雄建築ミュージアム | ・建築教育をきっかけとした地域の魅力作り |
| 86 | 高知県 | 梼原町 | 雲の上のホテル・梼原町総合庁舎など | ・高知の山間の小さな町に、ホテル・公共施設など建築家・隈研吾の作品が複数建ち、新たな魅力作りに成功している。誰も知らない、普通であれば過疎化が進みそうな町が、建築によって全国から人が訪れる町に |
| 87 | 高知県 | 高知市 | 藁工ミュージアム<br>(アートゾーン藁工倉庫) | ・アールブリュット作品を扱う「藁工ミュージアム」、土佐の食材を用いた地中海風料理を提供する「土佐バル」と多目的スペース「蛸蔵」が軒を連ねる<br>・障がい者の就労支援<br>・歴史的建造物を活用した地域再生 |
| 88 | 福岡県 | 福岡市 | キャナルシティ博多 | ・運河を擁する大型複合施設。「都市の劇場」をコンセプトに1996年４月に開業。年間約1400回ものイベントを実施し、過ごす時間を楽しむ「時間型消費」を実践して人を集め、地域の活性化に貢献している |
| 89 | 佐賀県 | 武雄市 | 武雄市図書館・歴史資料館 | ・官と民が連携し、「新・図書館構想」を実現。図書館とカフェなどが融合し、居心地の良い場の提供やコミュニティの創出に一役買っている。新たな図書館像を提示した |
| 90 | 佐賀県 | 佐賀市 | 佐賀市街なか再生会議<br>「わいわい!!コンテナ」プロジェクト | ・街なかに賑わいを取り戻す、誰もが自由に楽しむことができる「空き地リビング」 |
| 91 | 長崎県 | 長崎市 | 軍艦島 | ・明治日本の産業革命遺産の構成資産として世界遺産に |
| 92 | 長崎県 | 佐世保市 | ハウステンボス「変なホテル」 | ・先進技術を導入し、ワクワクと心地よさを追及した世界初のロボットホテル |
| 93 | 熊本県 | 熊本市 | くまもとアートポリス | ・建築の力で地域に文化をつくるプロジェクトは1988年から時間を重ねた先駆的まちづくりとして取り組まれてきた。熊本の震災では、熊本県がアートポリスとして東北大震災で取り組んだ「みんなの家」をさらに発展させ全仮設住宅団地にて建設されている |
| 94 | 大分県 | 大分市 | 旧大分県立大分図書館（アートプラザ） | ・DOCOMOMO JAPAN選定。建築家・磯崎新の初期代表作「大分県立大分図書館」が紆余曲折を経て、「アートプラザ」として改修 |
| 95 | 大分県 | 大分市 | 大分県立美術館 | ・街に開かれた縁側としての美術館。稼働する壁によって美術館は街と一体化した施設となる |
| 96 | 宮崎県 | 日南市 | 宮崎県日南市飫肥杉再生プロジェクト | ・市役所が中心となり地場産業と大企業、デザイナーなど飫肥杉を愛するさまざまな職種がコラボするプロジェクト |
| 97 | 宮崎県 | 延岡市 | 延岡駅周辺整備計画 | ・ワークショップにより、住民と対話を重ねてつくりあげていくプロセス　※現時点では基本計画のみ |
| 98 | 鹿児島県 | 鹿児島市 | マルヤガーデンズ | ・地域のコミュニティが活動できるフリースペース「ガーデン」を設置した「繋がり」を生むデパート |
| 99 | 鹿児島県 | 奄美市 | 奄美ミュージアム構想 | ・奄美群島を丸ごとエコミュージアムとする環境資源を活かした地域振興のまちづくりである。豊かな自然や歴史の資産だけでなく、人々の熱き想いと共に島の資源を生かした衣食住にわたる生活文化を体験し、体感できるミュージアムの宝庫である |
| 100 | 沖縄県 | 名護市 | 名護市庁舎 | ・地域社会の風土と調和した建築の先駆け |

連載 No.555

法令コーナー

# うめきた２期区域のまちづくり

福永篤史

大阪市都市計画局企画振興部うめきた整備担当
担当係長

## はじめに

関西圏の中心、大阪・梅田のど真ん中で実現させるべき「みどり」と「イノベーション」の融合とは？

現在、うめきた２期区域では、次代のニーズやこの国の将来のあり方などを見据えながら、ここでしかできない新しいまちづくり「みらいづくり」にチャレンジしている。

うめきた地区は、関西の発展を牽引するリーディングプロジェクトであり、西日本最大の交通ターミナルであるJR大阪駅に隣接する旧梅田貨物駅のエリアになる。

２期区域は、既にまちびらきした先行開発区域の西側であり、土地区画整理事業と併せて、区域西側の地上を南北に走行するJR東海道支線の地下化・新駅設置事業等による基盤整備とともに、土地有効利用事業による民間開発の誘導に取り組んでいる（**図１**）。

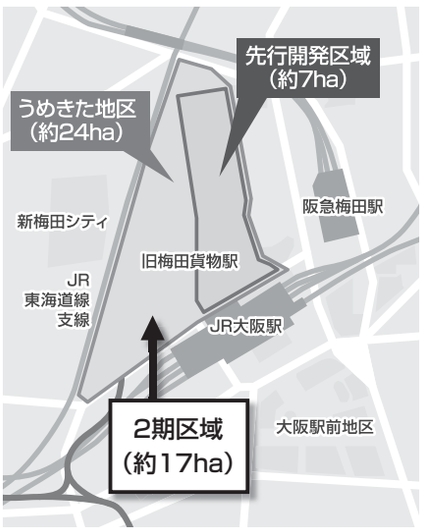



図１　区域図（出典：UR都市機構パンフレット（一部追記））

## これまでの経過

うめきた地区では、2002年に実施した国際コンセプトコンペを基に、2004年に「大阪駅北地区まちづくり基本計画」を策定した。

先行開発区域は、2013年にグランフロント大阪としてまちびらきし、知的創造拠点「ナレッジキャピタル」では、感性と技術の融合による新たな価値創出や、エリアマネジメントによる賑わい創出やイベント開催など、多彩で先駆的な取り組みを展開している。

## まちづくりの方針の決定

一方、２期区域では、2015年に「うめきた２期区域まちづくりの方針」を決定し、まちづくりの目指すべき方向性について、基本的な考え方をまとめた。

当方針では、『「みどり」と「イノベーション」の融合拠点』をまちづくりの目標に据えて、比類なき魅力を備えた「みどり」が新しい都市景観を創出するとともに、この「みどり」を積極的にイノベーション創出に活用し、多様な活動、新しい価値を生み出す源となることで、都市として国際競争力を強化・獲得することを目指している。

## 比類なき魅力を備えた「みどり」

当方針では、「みどり」を「すべての人々に開かれ、誰もが自由にアクセスでき、そこで人間の活動が豊かに展開される緑豊かなオープンスペース」と定義した上で、地区中央部の地上における概ね4haのまとまった「みどり」と連続し、円滑にアクセスできる建築物と一体化した「みどり」を合わせて、地区全体で概ね8haを確保することで、まち全体を包み込む「みどり」の実現を目指している（**図２**）。




図２「みどり」模式図
（出典：うめきた２期区域まちづくりの方針）

## ライフデザイン・イノベーション

当方針にあるイノベーション創出に必要な「新産業創出」「国際交流・集客」「知的人材育成」からなる中核機能については、2016年４月にイノベーション拠点のテーマとして、人々が健康で豊かに生きるための新しい製品・サービスを創出する「ライフデザイン・イノベーション」とすることを確認した。

中核機能の実現に向けた取り組みについては、その後も引き続き検討を進めている。

## 最近の話題

2016年10月より２期区域の一部スペースを活用して、まちづくりのプロモーションや周辺エリアの活性化等に資する暫定利用を実施している（**写真１**）。

暫定利用では、庭園や市民参加型・体験型のイベント等、開始３か月間で延べ13万人以上が来場し、一般の方々がエリアを体感する機会が増え、新たな賑わいが生まれている。

また、比類なき魅力を備えた「みどり」の実現に向けて、2016年12月より新たな寄附事業「うめきたみどり募金」を開始した。より多くの皆さまとともに、うめきたの未来の「みどり」を育んでいきたいと考えている。



写真１　暫定利用の状況（一例）

## 今後に向けて

今後は、開発事業者及び事業計画を募集・選定するとともに、中核機能の実現に向けて先行的にプロモーション活動やプロジェクト実施等の取り組みを進めながら、2023年春頃のJR東海道支線の地下化切換・新駅開業以降の順次まちびらき、そして2026年度の基盤整備の完了を目指している。

間もなく完成80周年を迎える御堂筋の機能と景観は、構想当時の「100年先を見据えた先見性」があったからこそ実現した。

この御堂筋のように、後世に大阪のランドマークとして「愛されるうめきた」を実現すべく、うめきた２期区域のまちづくりは、産学官、多方面の方々のご協力を得ながら着々と進めているので、今後の展開に是非ご注目いただきたい。

（ふくなが　あつし）

福永篤史
1973年生まれ。1999年名古屋大学大学院工学研究科博士前期課程修了。1999年大阪市役所入庁。

連載 No.415

# 構造の頁

# ネパール地震被災地の震災復旧現況

向井洋一

神戸大学大学院工学研究科建築学専攻／
レジリエント構造研究センター

## はじめに

2015年４月25日にネパール・カトマンドゥの北西約80km、深さ15kmを震源とするMw7.8のネパール・ゴルカ地震が発生した。ここでは、首都カトマンドゥの東約12kmに位置し、ユネスコ登録の世界文化遺産「カトマンドゥ盆地」の中で、王宮広場から東に向かう旧街道を中心に旧市街全体が保存地域に登録されているバクタプル市における、震災と復旧の状況についてお伝えしたい。

## 被災地域の状況

ネパール政府の災害リスク低減ポータルサイトによれば、震災１年後時点で、ネパール全域で、死者・不明者8,959名、負傷者22,302名の人的被害、約78万棟の建物が全壊、約30万棟の建物に部分的損傷を生じたと報告されている。バクタプルでは、死者・不明者333名、負傷者2,101名の人的被害とともに、28,513棟の建物が全壊、9,105棟の建物に部分的損傷と報じられている。

バクタプル旧市街域は、盆地内を東から西に流れる２本の河川流域に挟まれた丘陵地に位置しており、建物は、主にシルト系粘土、泥炭、軟弱な粘土質の堆積地盤上に建設されている。調査地域は、今回の地震により特に煉瓦造建築物の甚大被害が集中的に発生した旧市街の中でも東縁のエリアであり、以下にその概況を報告する。

**写真１**のように調査エリアでは、もともと細い路地に面して３～５階建ての建物が密集する街並を形成していた。地震によって隣接する建物群が一斉に全壊・倒壊したために、2015年10月の段階では、建物の瓦礫が撤去され、数ブロックにわたる空き地状態となっている（**写真２**）。このエリアを中心に約2,000棟の煉瓦造建築について、建物外観により、「大破以上」：小屋組ないし層の破壊を生じているもの、「残存」：構造的な破壊の有無によらず、外観上は小屋組まで残存しているもの、で分類すると、大破以上が約半数を占める。

多くの建物が築100年以上であるが、建替や増築などを経た際にRC床板、RC梁柱により補強された建物も見られる。これら補強煉瓦造の建物の被害は比較的軽微であった。

## 伝統的煉瓦造建物被害の特徴

崩壊を免れ建物の全体ないし一部が残存した無補強煉瓦造建物でも、耐力壁に甚大被害を受けたケースが多数見られた。典型的な損傷の特徴として２点挙げられる。

一つは、耐力壁の面外への座屈である（**写真３**）。伝統的構法の煉瓦造建物の多くは、耐力壁が内部壁と外部壁とに分離した構造となっており、それらの空隙部には破砕煉瓦等を心材とし、粘土・砂・石灰等を練り混ぜた繋ぎ材が充填された２層壁として構築されている。風化作用で劣化しやすい外側壁に焼成煉瓦を用い、内部壁は日干し煉瓦を用いて施工される事例が多いが、内外いずれかの壁面が面外に大きく孕みだし座屈したケース、あるいは建物全体が前方に傾斜するような大きな残留変形を生じている建物も多く見られた。こうした建物が以前（最近では、1934年、1988年にも大地震の被害を受けている）の地震以降もそのまま残存し、その状態のままで利用されてきたケースも少なくない。

もう一方は、建物の住戸間壁（妻面壁）の脆弱性である。大半の建物群が通りに面してファサードを横に連ね、町屋型の建物が密接して建設されている。こうした住戸群の派生過程に由来して、建物のファサード方向である桁行きの耐力壁は、壁面に開口を有するも、隣接住戸の桁行壁と連続して構築されている。

一方、専ら住戸間の境界壁となる妻面壁は隣接建物間に独立して建つ一枚壁状態となり、一般に桁行壁とも構造的に一体化されていない。そのため実際、妻面壁が桁行壁に先行して崩壊した事例が数多く見られた（**写真４**）。

## 被災地域の復旧状況

ネパールの伝統的住居は３階建てで、近年４階ないし５階に増改築されたものも多い。建物は、階ごとに用途が決まっており、１層目に倉庫や手洗い、２層目が寝室、３層目がリビング、ペントハウスにキッチンが設けられる。上増築建物では、２、３層目が寝室となる。このように、居住機能は縦方向に階層があり、例えば、相続の際にこうした機能が平等に按分されるため、一つの建物が縦に分割されていく独特の慣習がある。このことが狭小間口の住宅増加の要因ともなっている。

2016年９月に再度調査エリアを訪問し、住宅の再建状況について調べた。１年前には、建替はほとんど始まっていなかったが、**写真５**のようにRC補強建物の再建が始まっている。但し、土地の所有権の関係により区画整理などはなされず、従前の狭小化した区画に沿って無秩序に個別の再建がなされている状態である。前年度の調査エリア内にある約600棟の現況を調べたところ、再建中および再建が完了した建物の棟数の比率は、全体の８％程度、３階以上が残存した建物棟数を除いても、10%程度にすぎない（**図１**）。

## おわりに

ネパール・ゴルカ地震から２年を経ようとするが、ようやく被災地復旧が始まったところといえる。但し、生活の復旧が徐々に進みつつも、建物の復旧という意味では、今後の地震に備えたまちづくりがなされているわけではない。被災した建物の被害パターンを詳細に検証しつつ、当該地域の伝統的な生活習慣や建設施工管理の実情を理解し、より適切な建物の補修・補強に目を向けた技術支援の必要性を感じている。

（むかい　よういち）



写真１　バクタプルの街並

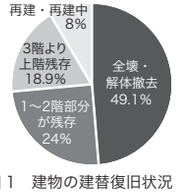



図１　建物の建替復旧状況



写真２　建物群が街区ごと滅失した甚大被害エリア



写真３　残存する建物で見られた耐力壁の面外座屈



写真４　残存する建物で見られた妻面壁の剥離崩落



写真５　被災地内で再建中の建物

連載
建築と社会を考える
NO.17

# 御堂筋 メインストリートの現在・過去・未来

橋爪紳也

大阪府立大学21世紀科学研究機構教授
大阪府立大学観光産業戦略研究所長

橋爪紳也

1960年大阪市生まれ。
京都大学工学部建築学科卒・大阪大学大学院工学研究科博士課程修了、建築史・都市文化論専攻。工学博士。
大阪府立大学21世紀科学研究機構教授、大阪府立大学観光産業戦略研究所長、大阪市立大学都市研究プラザ客員教授、国際日本文化研究センター客員教授。『「水都」大阪物語』『広告のなかの名建築　関西編』『ツーリズムの都市デザイン』『瀬戸内海モダニズム周遊』『大京都モダニズム観光』など、都市や建築に関する著作は50冊を越える。
イベント学会副会長、IR＊ゲーミング学会理事、大阪府河川水辺賑わいづくり審議会会長、光のまちづくり推進委員会会長、京都観光振興計画2020マネジメント会議委員長、大阪商工会議所都市活性化委員会副委員長、（公財）大阪観光局評議委員、ダイビル株式会社取締役など兼職多数。大阪における水と光のまちづくりを始め、関西における観光集客政策立案や都市再生に関するキーパーソンとして活躍。日本観光研究学会賞、日本都市計画学会石川賞など受賞。

## 御堂筋と私

2016年、御堂筋が竣工してから、80年の節目を迎える。56年目となる私の人生にあって、これまで何度、御堂筋を横断したことだろう。また専門誌や著書において、幾度、御堂筋について想いを綴ってきたことだろう。

私が育った家は島之内にあり、母校である南中学校はかつては御津地区、現在のビッグステップに位置していた。NHKの連続テレビ小説が終わると同時に自宅を飛び出して、堺筋を渡り、さらに御堂筋を西に横ぎる。まだ清水町通りとの交差点に信号機がなかった頃、遅刻しないように、行き交う自動車の隙をねらって、うまく走り抜けていた。

御堂筋をうたった歌詞にあるように、梅田から難波まで試しに歩いてみたこともあるけれども、南北に散策する道筋は主に心斎橋筋であった。もっともアメリカ村がにぎわいを見せ、長堀通や御堂筋に面してブランド店も出店、盛り場の回遊性が高まってからは、御堂筋を遊歩することが増えた。

私にとって御堂筋はまた、季節を感じる場所であった。道路ではあるのだが、公園に近い存在であった。新緑の頃、並木はこれ以上ないほどに鮮やかになり、また秋には美しい黄色の帯を創りだす。銀杏の落ちる頃には、独特の臭いとともに冬の近さを知ることになる。分離帯には鳥が飛来し、見たこともない虫も発見できた。街路樹は、大都市にあって貴重な「自然の切片」であったわけだ。

また御堂筋という街路は、ある種、誇りの拠り所でもあった。南北の御堂、松尾芭蕉終焉の地を示す石碑、北端のランドマークである梅田換気塔、高島屋前にあって南端の象徴である「都市美の女神」像など、沿道にある歴史的なシンボルは、都心で育った私たちの郷土愛の源であった。

地域の住民にとっては、御堂筋は都心を通過する自動車交通をさばく動脈という以上に、多様な意味をもっている。単なる街路としてではなく、文化的・象徴的な意味あいも強い都市基盤である。この多義性が、実は街路の竣工時にあって、すでに運命づけられていたものである点に注目したい。

近年、大阪市がすすめている「御堂筋の道路空間再編」による側道の歩行者空間化、平成26年１月に策定された「御堂筋デザインガイドライン」による品格のある賑わい機能の誘導など、新たな美観を創出する仕事にあって、私は中心的な役割を担ってきた。また「御堂筋イルミネーション」の立ち上げなど魅力向上に関するイベントの創出、タウンマネジメントのネットワーク構築にあってもキーパーソンとして尽力をしてきた。都心で生まれ育ち、半世紀以上、御堂筋を利用してきた専門家としての宿命であるように思う（**図１**）。

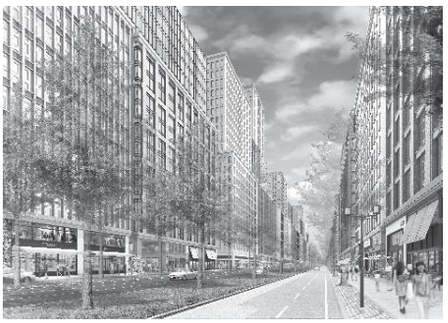


図１　大阪市御堂筋デザインガイドライン（御堂筋本町北地区）

## 都市計画と廣路

御堂筋の歴史を、簡単に回顧しておきたい。アジア有数の商工業都市として発展、人口の急増をみた大阪では、道路網の再編成が強調されていた。大正10年、内閣の認可を得た第１次都市計画事業によって、40路線の整備と81の橋梁掛け替えなどが認可される。なかでも大阪の都心を貫通する、24間幅の新しい目抜き通りである「廣路」の建設事業が注目された。のちに御堂筋という名で親しまれる道路が、ここに現実味を帯びる。

当時、大阪の幹線道路は、金融・証券のセンターであった北浜を貫く堺筋であり、ついで明治時代において主要なビジネスセンターであった出入橋近傍・西梅田から、南大阪と都心を結ぶ鉄路のターミナルであった湊町・難波に至る南北線（四つ橋筋）であった。御堂筋は、市電の走る路線として拡幅を終えていた堺筋と四つ橋筋のあいだにあって、ほぼ中央となる位置を真っ直ぐに抜く新道として想定された。計画路線は阪神梅田駅を起点に南海難波駅まで、全長４キロあまりにおよぶ。

御堂筋は大正15年に着工された。昭和２年４月、最初に竣成したのは阪急梅田駅から大江橋北詰までの区間、いわゆる「梅田新道」である（**写真１**）。ついで南への延伸が始まる

が、建設工事がすべて順調にすすんだわけではない。用地買収も難航したようだ。



写真１　昭和初期の梅田新道（橋爪紳也コレクション）

まず船場地区にあって、東西の商店街が分断されるという苦情が寄せられた。また建設に際しては、関一市長の確信のもとに、沿道の土地を持つ人々に受益者負担金を課した。道路ができると地価が上昇し、不動産の所有者はおのずと利益を得る。それに応じて工事費用を分担するべきだという理屈である。

大正９年に施行された都市計画法に明記された考え方だが、実行されたのは御堂筋が国内で最初であった。東西120間の地域が対象となったが、負担が高額であるうえに、工事期間の騒音等の被害を考えると「受益者」ではなく「受害者」だとする声もあり、権利者たちは「御堂筋会」という団体を結成して対応した。

昭和６年の春に久宝寺までの区間が竣工、ようやく昭和12年に難波までの全線が供用された。幅員43.6mの道路は、市電の軌道、高速車道、植樹帯、緩速車道、歩道と区別された。都市の緑化を目的として、街路樹が植えられた。大江橋以北はプラタナス、以南については銀杏が選定された。街灯もともされ、欧米の主要都市に負けない夜景を提供した（**写真２**）。



写真２　昭和初期の御堂筋（橋爪紳也コレクション）

御堂筋は、10年５か月におよぶ工期をかけて、また3379万円という当時としては巨費を投じ建設された。既存の都心にあって、３間から４間幅の道路を24間に拡幅するもので、事業費のほぼ９割が用地買収、および移転保障に充てられた。

一連の事業が、失業者救済事業という意味あいをもって実施された点も注目される。昭和初期の金融恐慌、さらには昭和恐慌の時期、大阪の街にも失業者があふれた。彼らの雇用を確保するべく、おおがかりな土木工事が具体化したのである。

手元に御堂筋の竣工を祝う記念誌がある。道路の項目を見ると、まず「一般自動車交通のためのスピードウェイ」という交通能力増進の効用が指摘されている。

いっぽう、市民の安全を守る工夫も強調されている。自動車用の高速車道と、自転車や牛馬車・荷車用の緩速車道に分けることで、事故の予防がはかられた。御津と順慶町では、地元有志の寄付によって、学童の通行を特に意識した地下道が建設された。機能性と安全性を最大限確保し、工学技術の粋をつくした最先端の街路がここに出現したわけだ。

さらに留意されたのが「沿線環境との調和」であり、また「都市美の造成」という点である。大阪市は、御堂筋の沿道を美観地区に指定、大阪駅前では建物の「最低限度」を指定した。また架けかえられた橋梁のうち、中之島にかかる大江橋や淀屋橋は、懸賞によって美しいデザインが採択された。わざわざ委員会を設けて選定した街灯や、街路樹のありようも、それまでにない水準の景観を産みだすべく配慮がなされた結果である。

大阪におけるメインストリートというだけではなく、当時の世界水準である都市の美観をここに出現させようとした関係者の意欲を読みとることができる。このような「美観」への想いが基層にあるからこそ、単に機能的な道ではなく、住民が誇りを持ち、また来訪者が尊敬の念をもって誉め称えるようなシンボル性を獲得することができたのだろう。

## 地下鉄御堂筋線の整備

御堂筋の工事にあわせて、地下鉄の敷設もすすめられた。大正時代、大阪では、市電や市バスの輸送力では、もはや活動を支えられないほどの混雑が生じ、新たな大量輸送機関が求められた。大阪市は高速鉄道の建設を計画する。当初は地盤の軟弱さを理由に高架線での建設を推す意見が強かったが、結局、御堂筋の道路工事と同時に地下鉄式での建設が決断される。

新たな高速鉄道の路線と建設方法を定めるべく、帝国鉄道協会と土木学会の専門家からなる「大阪市内外高速鉄道調査会」に調査が委託されたのは大正９年のことだ。特別委員会28回、総会５回を重ねて、調査会がとりまとめた案は、南北２本、東西２本を基本、上町台地を貫く区間をトンネルとするほか、いずれも高架式とする計画であった。

このうち南北線は「東線」「西線」からなる。「西線」は、梅田駅構内の西を起点として南進、堂島川・土佐堀川を横断したのち西横堀川東岸に沿って湊町駅までを結ぶ。その後、難波元町から東にカーブ、下寺町一丁目から地下を抜けて上本町六丁目で大軌電車と結ぶ路線である。

「東線」は、梅田駅構内を東に城東線に沿って進む。本庄横道町で東南に曲って電車道を越え、野崎町から菅原橋の東詰、中之島剣先を経由、東満堀川東岸を南進する。高津郵便局の近傍から高津入堀川の東岸を通り、逢阪下之町、さらに天王寺公園の西側から天王寺駅に到るルートである。

成案を報じる大正11年12月18日の『大阪毎日新聞』は、前者を「西横堀線」、後者を「東横堀線」と称している。しかし大正12年９月１日、関東大震災を契機に見直しがなされ、結果、東西の路線は元案通り高架式とするが、２本の南北幹線の市内区間は地下線とする方針に改められた。同年10月６日の『大阪朝日新聞』に「南北線は地下　東西線は高架に」という記事がある。

記事によれば、「高架の方が工費も安いし第一地盤が悪く河川の多い大阪では地下線にすることは工事が厄介」という理由から高架式での建設が妥当だとされた。しかし各所でボーリング調査を行なった結果、大阪の地盤が東京よりも良いことが判明した。さらに震災直後に東京などの被災地を大阪市の技師が踏査、地下線のほうが安全であることを確認し、計画を練り直すことになったという。

また、そもそも高架式には懸念があった。２分間隔での運行を想定した場合、高速鉄道は路面電車のように平面での交差はできないので、南北線と東西線のいっぽうは他線の上

を越す高さ約50尺以上の高架とする必要がある。「万一脱線転覆の場合には乗客は全滅」となり、「この一事が今日尚プランを発表することの出来ない癌となっていた」というのだ。

ともあれ、南北線のうち「西横堀線」の高架線は、数町ほど東に寄せて、御堂筋の地下線に変更されることになった。建設費はかさむが、幅員24間の廣路に拡幅する道路事業と「完全な耐震的地下線」の工事を併せて行なうほうが「一挙両得」だという判断があったと記事では指摘されている。

昭和５年１月29日、平野町の街頭で起工式が行われた。現場は難工事の連続であった。東京よりもましな地盤だとはいえ、深さ３メートルまで掘り抜いただけでも地下水が湧き出してくる。そのため第一期工事だけで、長さ15〜20メートルの鉄矢板を500枚も打ちこむ作業が行われた。その震動で近傍の家屋にひびが入る被害が続出した。また地下水を断ち切ったからか、井戸水も枯渇するところがあった。

また地下鉄のトンネルは、堂島川、土佐堀川、長堀川、道頓堀川の河川をくぐる。先例のない川底での工事ゆえに事故も発生する。昭和６年４月８日、土佐堀川の河底にあたる坑内が崩壊した。また翌年６月には高麗橋付近を走っていた荷馬車が、17メートルの深さの現場まで転落した。

難工事を乗りこえて、昭和８年５月20日、梅田から心斎橋の仮駅までの区間がまず開業する。将来的に最大10輌編成での運行を想定、駅の規模が定められていた。しかし当初は、わずか120人定員の客車２〜３輌での運用であり、「プラットフォームが長く停留場も広くてぜいたくだ」と批判もあった。しかし初日に試乗した鳩山一郎文相は「東京の地下鉄の比ではなく欧米技術の粋をあつめたもの」と感嘆したという。通常は６分、ラッシュ時には３分感覚で運行された。運賃は10銭、入札に際しては駅員が確認、出口は無人で「廃札箱」が置かれていた。夏は涼しく、冬は暖かい地下鉄は、避暑・避寒を兼ねた交通機関とも評価された。おりしも満州事変のあとであり、まんいち空襲があった際の避難場所にもなると報じる新聞もあった。（**写真３、４**）

地下路線となったことで、駅舎のデザインにも工夫が求められた。昭和５年11月２日の




写真３　開業時の地下鉄梅田駅（橋爪紳也コレクション）



写真４　昭和初期の御堂筋線駅構内（橋爪紳也コレクション）

『大阪朝日新聞』の記事「濃厚な大阪色　迷わぬ『色』の停車場」に、当時の事情が紹介されている。

地下鉄の窓の外は、いずこも同じ暗闇である。居眠りをしている人、ラッシュアワーの時間帯などでは、錯覚して降りる駅を取り違える客も多い。そこで駅ごとに「周囲の色合い、電燈照明、装飾などをそれぞれ特徴のあるもの」とするべく、「京大の武田五一博士の手で考案中」とある。

どのように検討されたのか。まず「大大阪の玄関」である梅田駅は、広くて明るい感じを与えるべく、壁や電燈照明を「全部パッとした白色」の「白色停車場」とする。川をくぐり地下40尺と深い淀屋橋駅は、水の都らしい淡い「水色」の「水色停車場」とする。本町駅は桃山時代の「浪速色」をあらわした「桃色停車場」、心斎橋駅は華やかに真紅の「赤色停車場」とする。

ユニークなのは難波と天王寺である。難波駅は「道頓堀、千日前の盛り場に足を踏入れた歓楽気分」の「濃厚な彩とりどりのジャズ意匠」を凝らした「ジャズ停車場」、天王寺駅は四天王寺を直感させる意匠を用いた「仏教色停車場」とすることとした。「色彩感覚で単調な地下風景にヴァライティを加えようという試みはなかなか尖端的で近代人の心理をうまくキャッチした試み」である。「赤色停車場の灯影に真赤な恋の花がさき、桃色停車場の待合室に可愛いいランテヴゥのささやきが聞かれ、仏教色の停車場が諸行無常、恋を弔う別れ話の場に選ばれるようになるかも知れぬ」と記者は書いている。実際の施工では、難波駅では黄色のタイルが用いられたようだ。

## 幻の地下街構想

昭和10年、難波までの延伸が完成、運行が始まった。これをビジネスチャンスとみたのが、駅のコンコースと地下階の売り場を通路で連絡した百貨店であった。雑誌『大大阪』昭和10年12月号に掲載された「地下鐵新線壁戯談」という記事では、「…北から阪急、そごう、大丸、高島屋と、大百貨店がそれぞれ地下から呼びかけ、迷土から明るい娑婆へと、鳴物入り…」と、４万人の乗客を奪い合う各デパートの商戦を評している。さらに「…一寸門扉を地下に開いただけで、この四大アパートの権利金計30萬円…」とある。それほどの額を支払ったとしても利益があるほどに「地下の客」はありがたかったのだろう、と指摘する。

民間の事業者だけではなく、地下鉄を運行させた大阪市電気局も独自の商業施設を構想した。昭和５年11月２日の『大阪朝日新聞』に「尖端大阪地下風景　現出する歓楽街、商店街」と題する記事がある。そこでは近代都市の発展を３期に分ける。

「平面的に延びるだけ伸び膨れるだけ膨れ切ったのが近代都市発達の姿の第一期ということができるなら、こんどは膨れる余地を空へ空へと立体的にもとめて行ったのがその第二期、そしてそれもわが国では市街地建築物法などという高さを制限するむつかしい法規に頭を抑えられ、最後に地球の皮を剥いで地下へと延びて行くのが、すなわちその第三期―そこにいわゆるスピード時代の最尖端を行くラッピド・トランシット―地下鉄が通じ地下商店街や地下歓楽場が現出するのだ」

都市はまず平面的に発展する。次にビルディングなど高層化が進むが、法規で高さは

押さえられている。そこで開発の方向は、地下に向かわざるを得ない。記事は続く。

「ちかごろ大阪にできる大建築物の多くは地下を二階につくることが一つの新しい傾向である。がまだ大阪に地下商店街や歓楽境ができようとはおそらく地下鉄工事がはじまるまでは誰もが予想しなかったところだ、わが国で地下鉄の先鞭をつけたのは東京であるが地下歓楽境を現出するのは恐らく大阪がトップだろうし、また同じ地下鉄といっても大阪のそれは東京のよりも深さもウンと深い」

そこで大阪市の電気局高速鉄道部は「大阪駅地下街」を構想する。阪急ビルディングの西南角から大阪駅裏にあった大阪鉄道局の東南角まで、地下の停車場に沿って、南北総延長120間ほどの地下商店街を建設しようとするものであった。

「市当局の理想では大阪駅前地下鉄停車場を中心として通ずる地下通路の両側に地下商店をならべ、商店街の一角を割いて市営カフェーや食堂、深夜の余剰電力消化の一方法として市営電気風呂を経営し大阪駅、阪急、阪神等からも呑吐する乗客を吸収し大あてに当てようと計画したもの…」

地下鉄のコンコースから伸びる地下街は、大阪駅や阪急の梅田駅、さらには建設が予定された阪神の新駅と連絡される。乗り換え客を、地下の商業施設に呼び込もうというアイデアである。しかし市が描いた構想は断念することになる。出入橋から大阪駅前に地下鉄道で乗り入れる計画を描いていた阪神電鉄が、地下停車場の建設予定地の周辺に、地下商店街を建設する意向を先に打診してきたことが理由であるという。「商売上手の阪神がこっそり先手を打って」と記者は書いている。

またこの記事には、難波駅周辺の「難波駅地下街」に関する記述もある。地下鉄御堂筋線難波駅の建設によって、駅の上方に構築される長さ100間、幅10間、階高10尺の「大地下道」の両側に店舗を並べるものだ。ただこの計画も、地元商店街の反対もあり警察の許可がおりなかったという。大阪における地下街網の発展は、戦後をまたないと実現しないが、その萌芽が地下鉄御堂筋線の計画当初からあった点を指摘しておきたい。

## 御堂筋の先取性と将来像

御堂筋は、1920年代にあって、世界各地で共有されていた「都市の理想形」を先取りしつつ、大阪の都市基盤を構築するプロジェクトであった。技術の発展によって、都市は高層化すると同時に、地下に延び、多層化する。来たるべき時代の都市は、著しく「立体化」するだろう。それこそが都市の進歩であると専門家は断言し、市民も感化されていた。そういう空想的な未来都市のありようが、この新道に沿って先例として示されたのである。

市電開業25年、および電灯事業市営化５周年を記念して昭和３年に行われた「大礼奉祝交通電気博覧会」では、会場には梅田から船場にかけての都市の断面を示す模型が設置された。地上には堂島ビルディングや市庁舎をはじめ、当時の大阪を代表するビルディング群がならぶモダンなデザインの橋梁、整然とした街路樹もある。断面には地下鉄道と地下駅の様子が示されている。高層化と地下空間の高度利用、すなわち「都市の立体的利用」によって、近代化を達成しようとする理想がここに示されている。当時は御堂筋も大江橋北詰あたり、いわゆる梅田新道までの工事が終了し、さらに南への延伸が具体化しつつあった段階である。人々は近未来の市街地風景を示す精緻な模型を、夢物語ではなく実現可能な将来像と意識して眺めたのではないか。

もっとも御堂筋沿道が、高さ規制の限度を充足するビルディング街になるのは、戦後復興期を待たなければならなかった。銀行建築やオフィスが集積するビジネスセンターとなった御堂筋は、大阪の高度経済成長を支える役割を担った。しかし1920年代の理想都市が実現した頃には、わが国でも超高層建築の可能性が模索されつつあったのは皮肉なことだ。近年、中之島や梅田に林立する超高層のオフィスビル街と比較して、1920年代の理想を継承し、建物の更新が充分にすすんでいない御堂筋沿道の活力が低下していることはあきらかだ。

ではこれからの御堂筋活性化にあって、どのような指針が有効なのか。私は15年ほど前に、御堂筋の将来像に必要な視点として、「都市美の再創造」「文化資本の蓄積」「出来事の創出」の３点を強調する文章を書いたことがある。その概要は次のようなものだ。

第１には「都市美の再創造」である。かつての御堂筋は、1920年代に人々が夢想した究極の都市美が具現化される場であった。高さの規制が緩和され、順次、建物が更新されるであろう今後、ここに次世代における第１級の美観を出現させる手法が検討されてしかるべきだ。具体的にはタウンマネジメントの導入、景観に関する協定の策定などが考えられる。またその前提として、21世紀の都市にふさわしい美観とは何か、という議論を喚起することがあって良い。

第２には「文化資本」を新たに蓄積することの必要性だ。東京と比較することについては揶揄もあろうが、たとえば東京駅周辺、大手町から有楽町、日比谷界隈に至る再開発事業では、既存のオフィスを超高層化しつつ、大学のサテライトや高級ホテル群も集積、地域の格式を確保することに成功しているように見える。都心の魅力も、時代とともに更新され、補充される。御堂筋沿道におけるプロジェクトにあっても、世界第一級のホテルや文化施設の類を誘致し、また市内に散在する領事館や諸外国の機関のオフィス群を集積するといった視点が必要なのではないか。

第３には「出来事の創出」である。しばしば語られてきたように、街路を祭の場とする「御堂筋パレード」の面的な展開、あるいはオープンカフェやイベント等、側道の、多様かつユニークな利用がさらに検討されてしかるべきだと考える。

15年前に自身が書いた文章を再読しつつ、想いは今も変わっていないことを確認した。時代を超えて御堂筋は、大阪の「都市の顔」「ハレの場」という役割を担いつつ、常に誇るべき都市美を維持してきた。これからも、次世代の都市が必要とする新しい機能を導入しながら、都市の格を示す街区であり続けることができるかどうかが問われる。そこにあって、「都市美の再創造」「文化資本の蓄積」「出来事の創出」という視点は不可欠である。

私たちは御堂筋が、時間を先取りする理想都市建設のパイロット事業であったことを忘れてはならない。御堂筋の活性化を論じるたびごとに、メインストリートの建設という大事業に、先人が託した夢と理想、竣工時の志に、繰り返し、立ち返ることが重要であると考えるゆえんである。　（はしづめ　しんや）

企画広告

新製品レヴュー

# 1．超硬質フローリング鋸目仕上

# 2．地元県産材 杉 スプリット加工

# 3．外部人工木デッキ Le・Bois（ル ボア）

昭和洋樽製作所

World Finest Flooring



## 1．超硬質フローリング鋸目仕上

写真は、硬質無垢材フローリング鋸目挽きオイル仕上品です。

硬質フローリングに、鋸目引きを施す事で、硬質フローリング独特の重厚感と質感・素朴さを一層引き立たせた仕上げとしております。

仕上げの美しさだけではなく、ピンヒール跡もほとんどつかず、公共施設や企業のエントランスでも、機能的フローリングとしてご使用いただいております。

株式会社昭和洋樽製作所

昭和洋樽製作所は、創業時より、世界中のあらゆる樹種を自社で仕入れ、自社職人が全国あらゆる地域に向かい、材料工事共の責任施工を、行っております。
硬質フローリングの貼り・鋸目の研磨など、各工程を着実に施工し、確実な品質で納品させて頂いております。

本社
兵庫県尼崎市久々知２丁目22番17号
TEL：06-6492-1328　FAX：06-6492-1566

東京本部
東京都品川区南大井５丁目23番16号
TEL：03-5753-2655　FAX：03-5753-2656



## 2．地元県産材 杉　スプリット加工

海外の広葉樹種を多く提案させて頂いている弊社から、近年注目されている地元県産材を利用した木壁の提案です。

割材に使う杉は、弊社工場で職人がひとつひとつ割材加工を行います。木の素性や木目と割方向の関係で、割れ方に、各々の木の特徴が表れ、自然で、木の質感あふれる壁を表現頂けます。

また、ご使用頂く地元県産材は、地元の森林組合と弊社が直接交渉し、安定した品質で、仕入れを行います。







## 3．外部人工木デッキ
## Le・Bois（ル ボア）

再生木材を60%利用し、表面に特殊な加工をもたらすことで、天然木の様な素材感を実現した人工木デッキです。

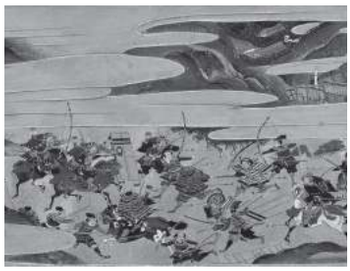
特殊な層構造の為、天然木デッキ材のような、日光・自然暴露による、退色・劣化が、ほとんどなく完成時の素材感を長期間ご使用いただけます。

**再生人工木デッキ造作**

天然木のデッキの経験を活かし、人工木材を使用した、壁やベンチ等の造作もご提案させて頂いております。

# information

## 1 戦国時代展 —A CENTURY of DREAMS—



重要文化財 真如堂縁起 下巻（部分）
掃部助久国/筆 三条西実隆・公助/詞書
外題/後柏原天皇/筆
大永四年（1524）真正極楽寺蔵
※後期（3/22～4/16）展示

日本における戦国時代は、相次ぐ戦乱により秩序が大きく乱れた時代だとイメージされてきた。ところが近年では、この時代は、各地で対立・戦乱がおきながらも、列島規模で文化的・経済的な実りをもたらした時期だと考えられるようになっている。
室町幕府の政治権力がおとろえ、上杉謙信、武田信玄、毛利元就、織田信長など有力大名たちは領国の経営に力を入れるようになり、その結果、京都で成熟した文化が列島各地へともたらされ、新たな地域文化として再生産されたのであった。
本展では、合戦の様子や武将の姿を伝える歴史資料、列島の各地で生成された貴重な美術工芸品を一堂に展示し、多様な広がりを見せたこの時代とたくましく生きた人々の姿に迫る。

期　　間　4月16日(日)まで
　　10：00～18：00（金曜日は19：30まで）
　　※入場は閉室の30分前まで
　　※会期中展示替えあり
　　（前期：3/20まで　後期：3/22～4/16）
休 館 日　月曜日（ただし3/20は開館、3/21は休館）
会　　場　京都文化博物館
　　京都市中京区三条高倉
　　TEL.075-222-0888
観 覧 料　一般1,300円、高大生900円、小中生500円
　　＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者１名は無料

## 2 西宮の狩野派　勝部如春斎

勝部如春斎は1721（享保６）年、西宮の裕福な醸造家の家に生まれた。三十代後半から数年の間に、妻や子どもを相次いで失うという不幸に見舞われた如春斎はその後、亡妻の追善のために東福寺にある明兆作の「三十三観音図」を模写するなど、精力的に画業に専念した様子が伺える。
そして1764（明和元）年12月、時の左大臣九条尚実に「如春斎」の号を賜わり、以降如春斎は作品に「台賜如春斎」の落款を入れるようになった。現在知られている如春斎の作品の殆どは、如春斎と号するようになった後に、描かれたものである。
このたびの展覧会では、これまで“山本”如春斎として知られてきた郷土の画人の、主要な作品50点余りを一堂に会し、その画業を美術館で初めて紹介する。



勝部如春齋
「西王母図」

期　　間　4月1日(土)～5月7日(日)
　　※会期中に一部展示替えあり
　　（前期：4/1～4/18　後期：4/20～5/7）
　　10：00～17：00
　　※入館は16：30まで
休 館 日　水曜日（ただし5/3は開館）
会　　場　西宮市大谷記念美術館
　　西宮市中浜町4-38
　　TEL.0798-33-0164
観 覧 料　一般800円、高大生600円、小中生400円
　　＊心身に障害のある方及び介助者１名は無料
　　（要手帳等呈示）
　　＊西宮市在住65歳以上の方は一般料金の半額（要証明）

## 3 特集展示 近代大阪と名望家

明治から昭和戦前にかけての大阪では、市政や小学校の運営などで地域の有力者である名望家たちが重要な役割を果たしていた。名望家の家には、彼らが関わった事業や団体に関する様々な資料が残されている。この特集展示では、これら名望家の家に残された資料約50点を紹介しながら、近代大阪の名望家の実像や彼らが暮らした地域社会の実情に迫る。



兵士像　日露戦争後
大阪歴史博物館蔵
（池永敏子氏、池永節子氏寄贈）

期　　間　4月24日(月)まで
　　9：30～17：00
　　※入館は閉館の30分前まで
休 館 日　火曜日
会　　場　大阪歴史博物館8階 特集展示室（常設展示場内）
　　大阪市中央区大手前4-1-32
　　TEL.06-6946-5728
観 覧 料　一般600円、高大生400円
　　＊中学生以下、大阪市内在住の65歳以上（要証明）の方は無料
　　＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者１名は無料

## 4 特別展 新宮 晋の宇宙船



《星の海》2016年
（兵庫県立美術館での展示プラン）
©Susumu Shingu

新宮晋（1937－）は、風や水など自然の力で動く作品で世界的に知られる芸術家である。幼い頃から絵や工作が得意だった新宮は、東京藝術大学で油絵を学んでいたが、卒業後に渡ったイタリアで、風で動く作品の魅力に気づき、自然エネルギーにより動く立体作品の制作を始めた。帰国翌年の1967（昭和42）年に日比谷公園で開催した個展で注目され、1970（昭和45）年の大阪万博では出品作家のひとりに選ばれる。以後、世界各地の室内外の公共空間に作品設置を続け、その数は160点に上る。一方、新宮は、こうした制作と並行して、ヨーロッパとアメリカの諸都市を回る野外彫刻展「ウインドサーカス」や、作品設置を通して世界各地の先住民と交流する「ウィンドキャラバン」等のアートプロジェクトを精力的に展開し、自然の素晴らしさと、人間と自然の関係を問うてきた。既存の枠に収まらないこうした活動は高く評価され、現在も世界を舞台に活躍を続けている。

本展では、自然に恵まれた地球を「奇跡の星」と考える新宮が、展覧会の空間全体をひとつの「宇宙船」と捉え、新作を中心とする約15点を出品する。安藤忠雄による建築空間とのコラボレーションが見所のひとつとなるだろう。さらに、これまで各地で開催されてきたプロジェクトの映像や、子どもたちに人気の絵本、彫刻の模型、自然の力で自立する未来の村「ブリージング・アース」のプランなどを加え、新宮の世界を総合的に紹介する。

期　　間　3月18日(土)～5月7日(日)
　　10：00～18：00（金・土曜日は20：00まで）
　　※入場は閉館の30分前まで
休 館 日　月曜日（ただし3/20は開館、3/21は休館）
会　　場　兵庫県立美術館
　　神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
　　TEL.078-262-0901
観 覧 料　一般1,300円、大学生900円
　　高校生・65歳以上650円
　　＊中学生以下無料
　　＊障がい者手帳等をお持ちの方は半額（65歳以上を除く）、その介助者１名は無料

## ▶「MOK2017」第22期生　募集要項

MOKスクール大阪は、阪神淡路大震災を契機に木造を根本から学びなおす社会人向けの学校として1996年に開校し、今年で22年目を迎える。「木」をキーワードに、第一線で活躍する講師陣による全７回、20講座。共に学ぶ仲間を広く募集している。

■受講資格
設計者、施工者、林業家、製材業者、役所や企業の建築担当者等、木造住宅に携わる人、建築を志す学生など

■2017年度　講師（予定・敬称略）
内藤廣・横内敏人・山辺豊彦・名和研二・佐藤実・高橋昌巳・山下保博・松田毅紀・古川泰司・佐藤ひろゆき・宮内寿和・安井昇・佐藤孝浩・小谷和也・辻充孝・渡部豊・大橋朋晃・三澤康彦

■期間
○2017年度　開講日　2017年４月15日（土）
○講義
４月～12月（4/15・6/10・7/8・8/5・9/9・10/14・12/9）
13時20分～18時50分（１講座100分）
○フィールドゼミ
5/13（和歌山県田辺）・　11/18・19（静岡・浜松）
※フィールドゼミの参加費用は別途必要

■会場
大阪工業技術専門学校５・６号館　講義室（大阪市北区天満1-8-24）
■定員
40名（申込み先着順　定員になり次第締切り）
■募集期間
随時受付中
■参加費
MOKスクール受講費
個人：年間７万円 学割：年間５万円 法人：年間10万円
（次年からの更新費　個人：年間￥18,000　法人：年間３万円）

■申込み・問合せ
ＭＯＫスクール大阪　　事務局　西久保（にしくぼ）
大阪市福島区福島2丁目9-15
TEL.06-4796-7818　FAX.06-6940-7708
e-mail　info@mokosaka.jp
URL　http://www.mokosaka.jp/
※上記内容は変更となる場合あり

本欄掲載の１～４の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（82円）を日本建築協会事務局までお送りください。

日本建築協会

# 月間の動き

平成29年１月

## 理事会等

**第９回常任理事会**
１月25日（水） 16：00～16：30
日本建築協会会議室
出席者　香西会長ほか10名
議　事（１）「建築と社会」新企画
（２）平成29年度常任理事会・理事会・総会・評議員会日程

## 編集委員会

**第２回建築計画系分科会**
１月23日（月） 19：05～20：50
日本建築協会会議室
出席者　中辻幹事ほか５名
議　事（１）今期分科会運営
（２）2017年度特集の企画

**構造分科会**
１月13日（金） 18：00～19：00
日本建築協会会議室
出席者　宮久保幹事ほか２名
議　事（１）「構造の頁」の企画
（２）2017年度特集の企画

**第９回設備分科会**
１月11日（水） 18：10～19：25
日本建築協会会議室
出席者　橋本幹事ほか５名
議　事（１）「設備の頁」の企画
（２）2017年度特集の企画
（３）委員委嘱

**第５回施工材料分科会**
１月19日（木） 17：05～17：55
日本建築協会会議室
出席者　東幹事ほか５名
議　事（１）2017年度特集の企画
（２）委員委嘱

**第９回法令分科会**
１月18日（水） 16：00～17：20
日本建築協会会議室
出席者　磯林幹事ほか４名
議　事（１）法令コーナーの企画
（２）2017年度特集号の企画

**第９回作品作風小委員会**
１月26日（木） 19：00～20：00
日本建築協会会議室
出席者　加嶋小委員長ほか４名
議　事（１）作品の選定
（２）作品の掲載状況、予定の報告
（３）gallery掲載報告、予定
（４）その他

## 事業委員会

**第６回情報見学小委員会**
１月12日（木）18：00～19：30
日本建築協会会議室
出席者　中尾員長ほか７名
議　事（１）本年度事業「大徳寺真珠庵・聚光院」茶室見学会の報告
100周年プレイベント近代建築見学会中之島WALKの報告、御堂筋WALKの募集状況など
（２）見学先の検討
（３）100周年記念式典

**第13回U-35小委員会**
１月10日（火） 19：00～
PARK Lab.
出席者　興津リーダーほか10名
議　事（１）活動／予定
（２）近況報告
（３）次回予定

## 出版委員会

**第９回出版委員会**
１月24日（火） 18：00～19：45
日本建築協会会議室
出席者　西委員長ほか６名
議　事（１）既刊書籍経過報告
（２）制作進行中の書籍
（３）今後の出版テーマ
（４）講習会の企画
（５）100周年記念式典の企画

## 教育委員会

**第３回工高生教育小委員会**
１月20日（金） 18：00～19：15
日本建築協会会議室
出席者　谷口小委員会委員長ほか４名
議　事（１）第63回工高生デザインコンクール募集規定検討
（２）今後の予定について検討

**大阪府住まい・まちづくり普及協議会**
**第10回全体会議**
１月20日（金） 10：30～12：00
大阪建築会館会議室
報告・議題
（１）一般社団法人住教育推進機構
（２）出前講座の実施
（３）次年度組織体制
（４）その他・次回の日程

## 100周年関連事業委員会

**第10回10年委員会**
１月19日（木） 18：30～20：30
日本建築協会会議室
出席者　設楽委員長ほか６名
議　事（１）学生のための見学会
（２）朝日生命館ビルイベント実施

## 100周年記念事業委員会

**第10回幹事会（常任理事会と合同開催）**
１月25日（水） 16：30～20：30
日本建築協会会議室
出席者　設楽委員長ほか14名
議　事（１）100周年記念事業

## 見学会

**第16回学生のための建築現場見学会**
「（仮称）MN6新築工事」
１月10日（火） 13：30～16：30
講　師　中野達男氏（㈱竹中工務店）
奥田正行氏（㈱竹中工務店）

**創立100周年プレイベント「近代建築見学会 ー大阪の都市景観　再見ー　御堂筋WALK」**
１月21日（土） 13：30～16：30
講　師　倉方俊輔氏（大阪市立大学准教授）
橋寺知子氏（関西大学准教授）
委　員　情報見学小委員会　中尾委員ほか２名
参加者　25名

## 講習会

**平成28年度建築工事実務講習会**
１月18日（水） 9：00～17：30
大阪府建築健保会館6Fホール
講　師　川井裕基氏（鹿島建設㈱）
柏木隆男氏（㈱松村組）
阿字地正人氏（㈱大林組）
参加者　80人


**編集委員会（平成28年度）**

■副会長
設楽　貞樹
本多　友常
■編集担当理事
◎勝山　太郎
佐藤　榮一
杉本　浩
竹中　統一
西　博康
松崎　公一
松本　眞一
吉村　英祐
米井　寛
■副委員長
○戸川　勝之
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
飯田　匡
鈴木　克彦
△田中　直人
松田奈緒子
三宅　次郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
神戸　嘉也
桑原　悠樹
下坂　浩和
△中辻　浩介
東　拓郎
樋口　展寛
松岡　英緯
三谷　帯介
米山　剛史
渡部　剛
★ｲﾝﾃﾘｱ・住宅系
今井　充彦
川合　隆之
工藤　理隆
△黒柳　亮
齊藤　誠
塚口　洋之
ペリー史子
間渕　一博
■構造分科会
伊藤　栄治
岡田　健
岸本　光平
司馬　勢也
瀧野　敦夫
角田　耕一
橋本　宗明
△宮久保秀樹
向井　洋一

■設備分科会
有尾清二郎
北野　勝也
佐々木章二
笹倉　睦
髙村　聡
寺井　千佳
夏井　重行
△橋本　直樹
藤原　謙一
桝井　貴廣
宮﨑ひろ志
森山　正和
山本　雅洋
■施工材料分科会
△東　琢
木谷　在憲
桜井　和男
髙橋　秀一
藤丸　啓一
山口　紀宏
吉田　正友
■法令分科会
△磯林　雅之
岡本　亮二
黒川　正樹
河野　学
小林　智成
■作品作風小委員会
東井　嘉信
居内　章夫
池上　明
稲垣　和江
▲加嶋　章博
菊池　浩輔
倉渕奈千子
澤田　純一
髙木　秀晃
鞆野　淳司
豊田　充広
西田　佳代
芳谷　晴彦
平野　尉仁
増田　敬彦
■広告企画小委員会
小川　雄介
小山　昭
金築　雄
野山　将男
藤田　昌宏
▲前田　衛
山辻　直樹

（順不同）

◎委員長
○副委員長
▲小委員会委員長
△幹事



印　刷　２０１７年２月24日
発　行　２０１７年３月１日
発行人　一般社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
印刷所　㈱中島弘文堂印刷所
デザイン　多田正治（多田正治アトリエ）
定　価　1230円（税込）


©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

# 日本建築協会　創立100周年記念事業

## 賛助・協賛広告目次

㈱浅沼組…… 68
㈱安藤・間…… 69
大阪ガス㈱…… 70
㈱大林組…… 71
㈱奥村組…… 72
鹿島建設㈱…… 73
㈱きんでん…… 74
㈱熊谷組…… 75
㈱鴻池組…… 76
清水建設㈱…… 77
総合資格学院…… 78
大成建設㈱…… 79
㈱竹中工務店…… 80
戸田建設㈱…… 81
㈱東畑建築事務所…… 82
西松建設㈱…… 83
㈱日建設計…… 84
三井住友建設㈱…… 85
㈱安井建築設計事務所…… 86
コーナン建設㈱…… 87
㈱昭和設計…… 87
須賀工業㈱…… 88
東リ㈱…… 88
㈱中島弘文堂印刷所…… 89
森村金属㈱…… 89
㈱ユニオン…… 90
㈱IAO竹田設計 …… 90
㈱朝日工業社…… 90
浅海電気㈱…… 91
㈱新井組…… 91
㈱イトーキ…… 91
王建工業㈱…… 91
㈱岡村製作所…… 92
元旦ビューティ工業㈱…… 92
栗原工業㈱…… 92
小松ウオール工業㈱…… 92
㈱佐藤総合計画…… 93
三機工業㈱…… 93
住友電設㈱…… 93
西部電気建設㈱…… 93
㈱双星設計…… 94
㈱大協建材…… 94
㈱大成出版社…… 94
㈱ダイフレックス…… 94
太陽工業㈱…… 95
TOTO㈱…… 95
㈱日刊建設工業新聞社…… 95
㈱日刊建設通信新聞社…… 95
日新工業㈱…… 96
日本ERI㈱ …… 96
㈱日本設計…… 96
㈱平田タイル…… 96
㈱藤木工務店…… 97
不二熱学工業㈱…… 97
前田建設工業㈱…… 97
㈱松村組…… 97
八木惣㈱…… 98
八千代電設工業㈱…… 98

（順不同）

株式会社 浅沼組

125th
ANNIVERSARY
1892-2017



誇(ほこ)れる歴史がある
創(つく)りたい未来がある

Asanuma

本社・大阪本店　〒556-0017　大阪市浪速区湊町１丁目２番３号　TEL.06-6585-5500（代表）
東　京　本　店　〒108-0023　東京都港区芝浦２丁目１５番６号　TEL.03-5232-5888（代表）

安藤ハザマ



# 人と技術で、未来に挑む。

私たち安藤ハザマは、確かな技術と豊富な経験・ノウハウをもとに、
安全・安心で、高品質なものづくりを実践し、
さまざまな形で人々の暮らしを支えています。
これからも、社員一人ひとりの情熱と、
時代に先駆けた技術力を掛け合わせ、新たな価値を創造し、
豊かな未来の実現に挑戦し続けます。

**株式会社 安藤・間 大阪支店**

大阪市福島区福島6丁目2番6号　TEL:06-6453-2190

http://www.ad-hzm.co.jp/




大阪ガス

暮らしに、あかりを、ぬくもりを。

# 時をつくる　こころで創る

子どもたちが大人になっていくように、
街も健やかに育っていくと、
そこで暮らすみんなに幸せが広がります。

わたしたち大林組は、
親が子どもたちに愛情を注ぐように、
こころを込めて、建物や街をつくっています。

みんなの未来を、夢のある時間で満たすために。



www.obayashi.co.jp

OBAYASHI 大林組




# + BUILD

＋たのしさ、＋うれしさ、＋やさしさ、＋…。

新しい街づくりは、夢いっぱいの足し算から始まります。

人にプラス、地球にプラス、未来にプラスの視点と発想。

奥村組は人と自然を大切にし、豊かな未来づくりに貢献していきます。

人と自然を、技術でむすぶ。

奥村組

OKUMURA CORPORATION

本社:大阪市阿倍野区松崎町2-2-2　TEL. 06(6621)1101

東京本社:東京都港区芝5-6-1　TEL. 03(3454)8111

http://www.okumuragumi.co.jp

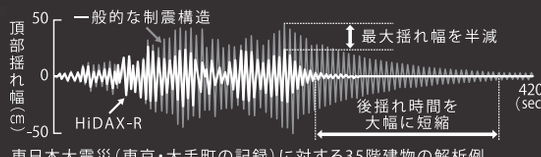
そのとき、心まで揺れないように。



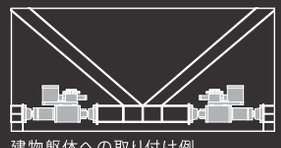
# 世界初。地震の揺れで、地震の揺れを止める制震技術。

2011年の東日本大震災をきっかけに、大地震への不安は日常と隣り合わせになりました。これからの制震技術は、ビルの揺れ幅だけではなく、心の揺れ幅まで受け止めることができなければ。鹿島がたどり着いたのは、F1マシンのブレーキ制御などに用いられるエネルギー回生システムの原理を、建物に応用することでした。世界初、VERS（振動エネルギー回生システム）搭載制震オイルダンパー「HiDAX-R」。建物が揺れるごとに振動エネルギーを回収し、即座に自らの制震エネルギーとして再利用するのです。それによって、当社従来型「HiDAX」の約2倍、通常のオイルダンパーの約4倍の性能を発揮します。東日本大震災と同じ地震動が発生した場合、「HiDAX-R」を設置することで一般的な制震構造に比べて揺れ幅は約2分の1に減少、後揺れ時間は9分の1程度まで劇的に短縮されます。万が一の大地震に備えながら、日々の風揺れまでもカバーする「HiDAX-R」。24時間365日、休むことなくビルを揺れから守り続けていきます。「HiDAX-R」で鹿島が最大化したかったのは、数値では表すことのできない安心です。



東日本大震災（東京・大手町の記録）に対する35階建物の解析例


建物躯体への取り付け例

100年をつくる会社
鹿島

Kinden

# チーム、きんでん。

## （施工力＋技術力＋現場力）×情熱



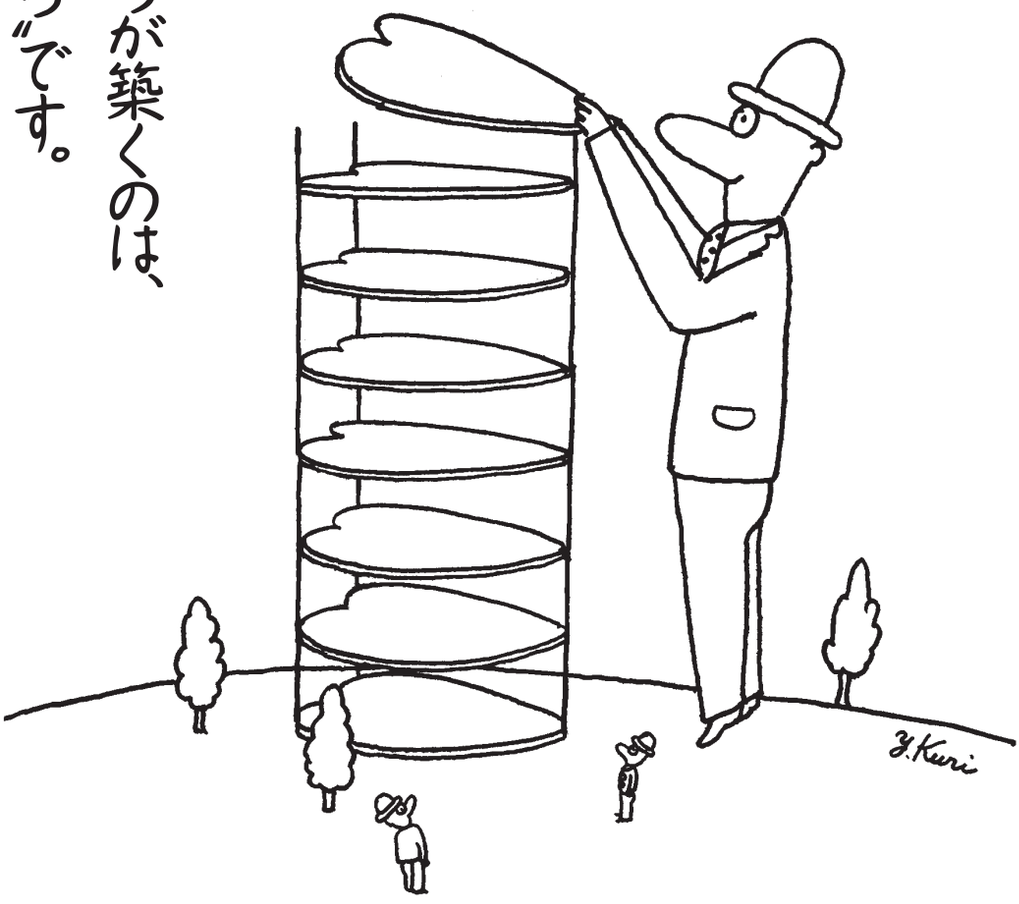

“お客さま満足”
という目標に向かって、
さまざまなスタッフが力を結集。
人間力を基盤とした
総合エンジニアリング力で、
あらゆるソリューションに
お応えします。

エネルギー 電気 情報通信 計装 空調 環境 衛生 内装 その他 土木 情報

きんでん

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 東京本社 東京都千代田区九段南2丁目1番21号
TEL.06-6375-6000 TEL.03-5210-7272
http://www.kinden.co.jp/

私たちが築くのは、
〝こころ〟です。




今、人は地球について考えています。
そして、自然のことを想っています。
地球があって、緑にあふれ、人々が生活する。
私たちはそんな基本的なことから考えたい。
私たちのふるさと・地球にやさしい技術の確立。
熊谷組の変わらぬテーマです。

――人と地球の未来を考える――
KUMAGAI 熊谷組

# Our Best Solution for Your Best Smile



レストランの『ソムリエ』はオーダーや好み、予算などを考えて、
最適なワインを選んでくれます。
私たちも知識、技術の全てを使い、まごころをこめて
お客様に満足いただける製品を提供したい。
カッコよくいえば
『**ものづくりのソムリエ**』でありたいと思っています。

## お客様の『最高の笑顔』のために。

KONOIKE
KONOIKE CONSTRUCTION CO.,LTD.

SHIMZ

# ル・コルビュジエからの難問。

この美術館を中心に、街も文化も発展して欲しい。

近代建築の巨匠ル・コルビュジエが、戦後の上野を見渡して描いた

壮大な構想に、日本側の発注関係者も驚き困惑したに違いありません。

私たち清水建設は、発展を願う巨匠の想いに応えるべく、

コンクリート施工の名人とうたわれた森丘四郎を現場責任者に任命し、

ル・コルビュジエをして完璧と言わしめる建物をつくりあげました。

1998年には、日本初の「免震レトロフィット工法」により、

外観をそのままに地震に強い建物に改修するなど、

長年にわたりその想いが込められた建物を守り続けています。

## 想いとともに建物を次世代に遺す使命。



## 建物をつくり、守り続ける。「子どもたちに誇れるしごと」のひとつです。



ル・コルビュジエの設計を実現に導いた、森丘四郎。

留学のため18歳で渡仏し、リヨン美術学校に入学。その後、鉄筋コンクリート造建築の先駆者であり、ル・コルビュジエの師でもあったオーギュスト・ペレのアトリエで学ぶ。国立西洋美術館の設計に協力した日本建築界の巨匠、前川國男から丁寧な仕事ぶりを認められ、現場責任者として指名される。その厚い信頼と期待に応えるべく、一流の職人たちを集め工事に挑んだ。

## 清水建設が施工し、守ってきた国立西洋美術館が、世界遺産に登録されました。

子どもたちに誇れるしごとを。

SHIMIZU CORPORATION
清水建設

# 祝 一般社団法人 日本建築協会 創立100周年 おめでとうございます。

## 総合資格学院はこれからもハイレベルなスキルと高い倫理観を持つ技術者の育成を通じ、安心・安全な社会づくりに貢献してまいります。

今の建設業界には、非常に高い信頼性が求められています。ここ数年、相次いでいる様々な自然災害や法に適合しないような設計・施工が表面化した影響により、建築物の安全性に対する人々の意識は大いに高まっています。そのため、建築士や建築設備士、施工管理技士などの建設系技術者においては、より高いレベルのスキルが要求されるようになり、また倫理的な面においても、さらに高い責任感が求められるようになりました。当学院では建設関連資格の有資格者育成を通じ、高いレベルのスキルと倫理観を有する真の技術者の育成に取り組んでおります。そしてこの事業を通じ、建設業の発展と建築文化の振興、および安心・安全な社会づくりに貢献していくことこそが使命であると考えております。また、その基盤づくりとして、当学院ではこれから建設業界へと羽ばたいていく若者たちを対象に、全国各地で様々な支援活動及び啓蒙活動に取り組んでおります。この取り組みがやがて大きく結実し、次世代の国づくり、都市づくりの大きな流れへとつながっていくことを願い、今後も継続的に取り組んで参ります。

総合資格学院　学院長　岸 隆司



## 1級建築士 設計製図試験

全国 ストレート 合格者占有率 No.1

平成24~28年度 [過去5年累計]
全国ストレート合格者占有率[学科+製図合格]
58.9%


平成24~28年度全国ストレート合格者8,520名中、当学院受講生5,015名

平成28年度
全国ストレート合格者占有率
[平成28年度 学科+製図合格]
55.1%


平成28年度 全国ストレート合格者1,582名中、当学院現役受講生871名

※総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者、過去受講生は一切含まれておりません。※全国ストレート合格者数は、(公財)建築技術教育普及センターの発表に基づき算出。※学科・製図ストレート合格者とは、1級建築士学科試験に合格した同年度の1級建築士設計製図試験にストレートで合格した方です。<平成28年12月15日現在>

**法定講習** 法定講習サイト 検索 hotei.shikaku.co.jp
一級・二級建築士定期講習 / 管理建築士講習 / 監理技術者講習/
第一種電気工事士定期講習 / 宅建登録講習 / 宅建登録実務講習

平成29・30年度 受講生募集中 無料体験入校実施中! お気軽にお問い合わせください

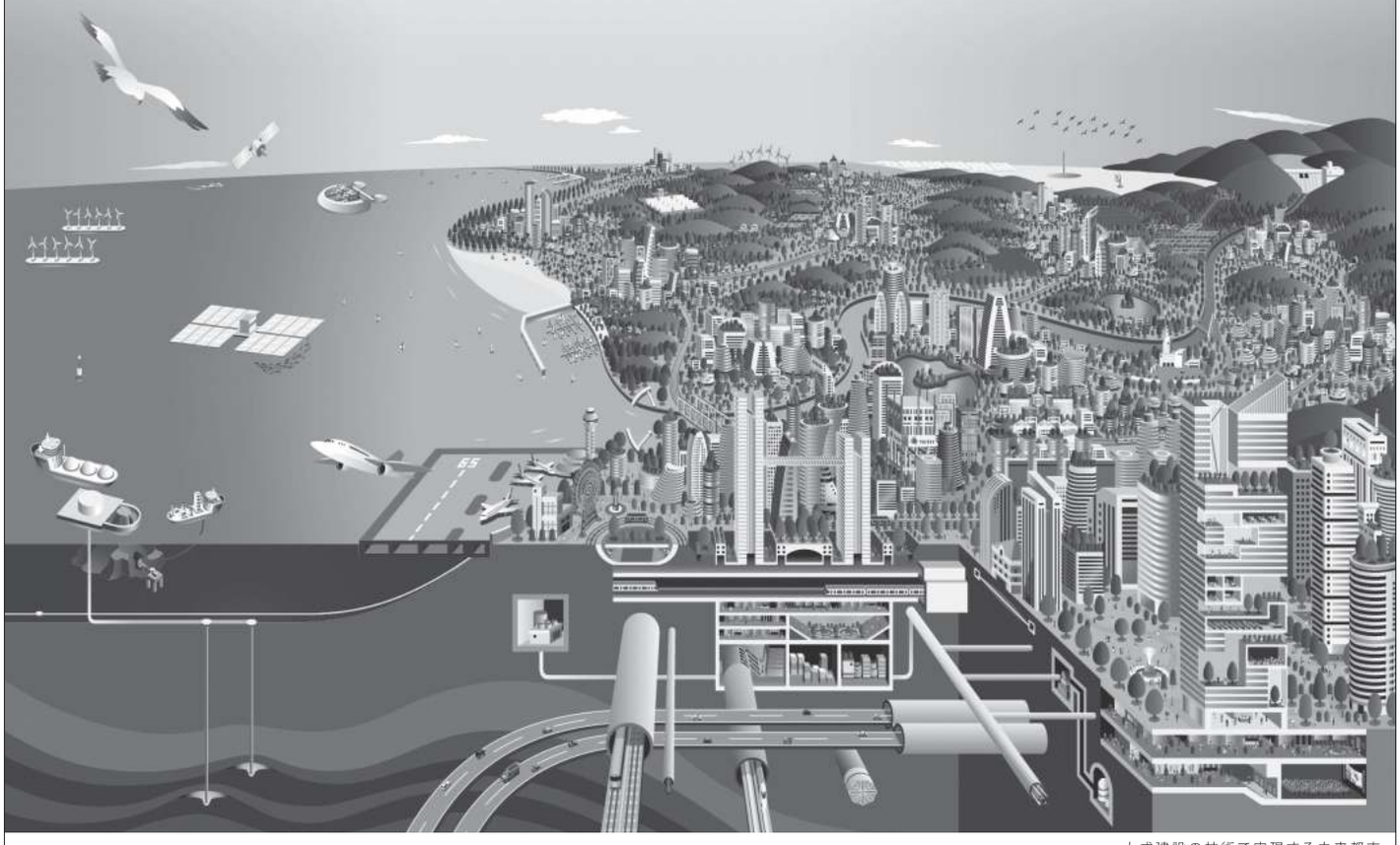
| | | | |
|---|---|---|---|
| 1級・2級 建築士 | 構造・設備設計 1級建築士 | 1級・2級建築施工管理技士 | 1級・2級土木施工管理技士 |
| 建築設備士 | 1級管工事施工管理技士 | 宅地建物取引士 | インテリアコーディネーター |

総合資格学院

無料体験入学・受講相談
資料請求など
お気軽にお問い合わせください!

スクールサイト www.shikaku.co.jp 総合資格 検索
コーポレートサイト www.sogoshikaku.co.jp
Facebook 「総合資格 fb」で検索!
東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル22F TEL. 03-3340-2810

# *For a Lively World*



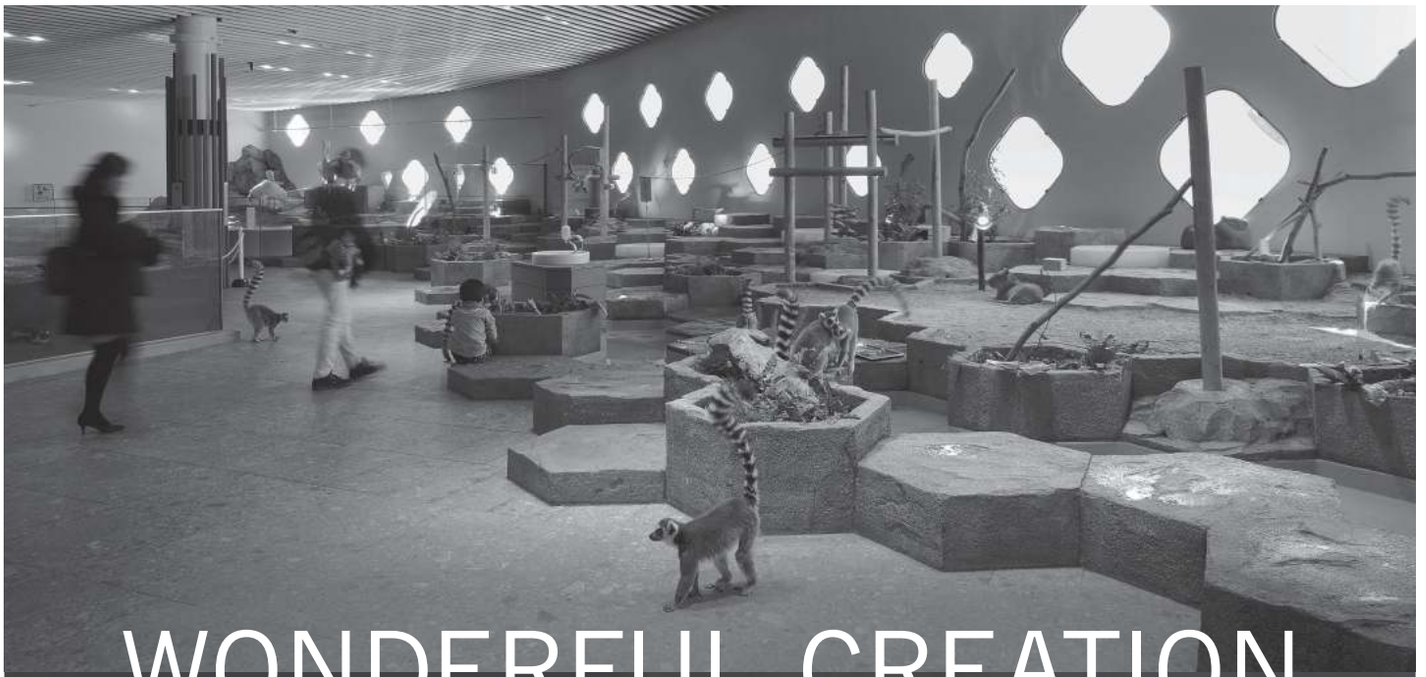
大成建設の技術で実現する未来都市

わたしたちは“人がいきいきとする環境を創造する”というグループ理念のもと、
自然との調和の中で、安全・安心で魅力ある空間と豊かな価値を生み出してきました。
*For a Lively World*…この思いとともに、これまで育んできた技術を、さらに高め次の世代へ。
わたしたちは、夢と希望に溢れた地球社会づくりに取り組んでいきます。

**地球がいきいき、人もいきいき。大成建設がめざす未来です。**

地図に残る仕事。®

TAISEI 大成建設株式会社



# WONDERFUL CREATION

## 生物との出会いが感動を生む。

万博エリアの新しいランドマークとして生まれた
生きているミュージアム「ニフレル」(大阪府吹田市)。
間近で生物の魅力にふれ、感動を生む空間を目指しました。
水生生物を想わせる滑らかで有機的なフォルムは、
展示空間として非日常性を演出します。
水や泡をモチーフとした開口のある外壁で、
地震への安全性を確保するとともに風や光を取り入れ、
展示空間に自然の心地よさをもたらします。
竹中工務店はこれからも「デザイン」「技術」「環境」の融合によって、
新しい付加価値を持つ建築の創造に挑戦していきます。




想いをかたちに 未来へつなぐ
TAKENAKA

**株式会社 竹中工務店**
〒541-0053 大阪市中央区本町4-1-13 Tel.06-6252-1201
〒136-0075 東京都江東区新砂1-1-1 Tel.03-6810-5000

竹中工務店 ニフレル 検索
http://www.takenaka.co.jp/majorworks/41404002015.html

未来に進むために、必要なもの。

時代のうねりに流されないように、進むべき道を切り拓いていけるように
戸田建設グループは、新たにグローバルビジョンを策定しました。
2021年の創業140周年と、その先の未来に進む
私たちの、これからの指針です。



TODA Group Global Vision

# “喜び”を実現する企業グループ

## お客様の満足のために
私たちは、確かな技術力と
多彩な人財力で、お客様との最良の
パートナーシップをつくります。

## 誇りある仕事のために
私たちは、社員をはじめ現場に携わる
一人ひとりが、強い責任感と情熱をもって
仕事に取り組める職場をつくります。

## 人と地球の未来のために
私たちは、時代の変化と社会の課題に
真摯に向き合い、環境に配慮した
安心・安全な社会をつくります。

戸田建設

www.toda.co.jp






# 創業者精神を今に生かす技術者集団

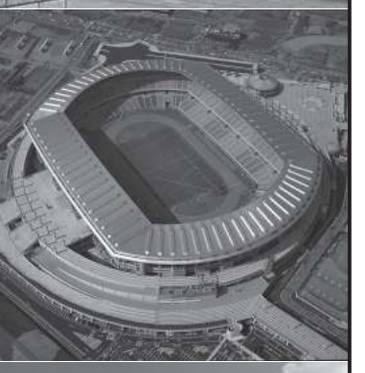
東畑建築事務所は、２０１７年１２月に創立８５周年を迎えます。これまでの長い歴史に誇りを持ち、自由で活力に富み、名誉と協調を重んじる姿勢を堅持しつつ、これからも、社会と時代の要請に幅広く応える総合設計事務所としての役割を担ってまいります。

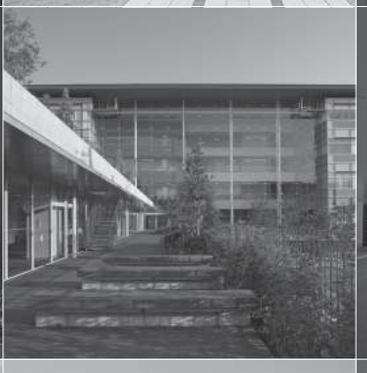
東畑建築事務所
TOHATA ARCHITECTS & ENGINEERS

http://www.tohata.co.jp















# 未来を創る現場力




私たち西松建設株式会社の中心は、常に「現場」にあります。きめ細やかな施工管理力と、現場で起きる様々な課題を自ら発見し自ら解決するチカラ。私たちはこれらの「現場力」を、創業以来140年にわたって磨きぬいてきました。その力を活かし、安全・快適に生活出来る住環境の提供と、持続可能な社会基盤を構築し、未来を創っていく。それが西松建設の仕事です。

西松建設株式会社
大生郷出張所
青山 武史

未来を創る現場力

西松建設

http://www.nishimatsu.co.jp/

本　　社：東京都港区虎ノ門1-23-1 虎ノ門ヒルズ森タワー10階　TEL：03-3502-0232
西日本支社：大阪市中央区釣鐘町2-4-7　TEL：06-6942-1173

社会環境デザインの先端を拓く
グローバルデザインファームズ

nikken.jp 日建設計

http://www.nikken.jp

| | | | |
|---|---|---|---|
| 東　京 | 102-8117 | 東京都千代田区飯田橋 2-18-3 | Tel.03-5226-3030 |
| 大　阪 | 541-8528 | 大阪市中央区高麗橋 4-6-2 | Tel.06-6203-2361 |
| 名古屋 | 460-0008 | 名古屋市中区栄 4-15-32 | Tel.052-261-6131 |
| 九　州 | 810-0001 | 福岡市中央区天神 1-12-14 | Tel.092-751-6533 |

支社・支所　北海道、東北、神川、静岡、長野、北陸、京滋、神戸、中国、熊本、沖縄
上海、北京、大連、ソウル、ハノイ、ホーチミン、シンガポール、ドバイ、モスクワ、バルセロナ

三井住友建設



# 未来の都市は、地球に優しい。

これからも、いつまでも、カタチを伝えていきます。

技術の進化とは自然への帰化。私たちは、最先端の技術力を活かし、人々と地球を優しく結びつけるものと考えます。私たちが提案する都市は今まで以上に人間らしく、そしてあたたかい。三井住友建設は未来を見つめています。

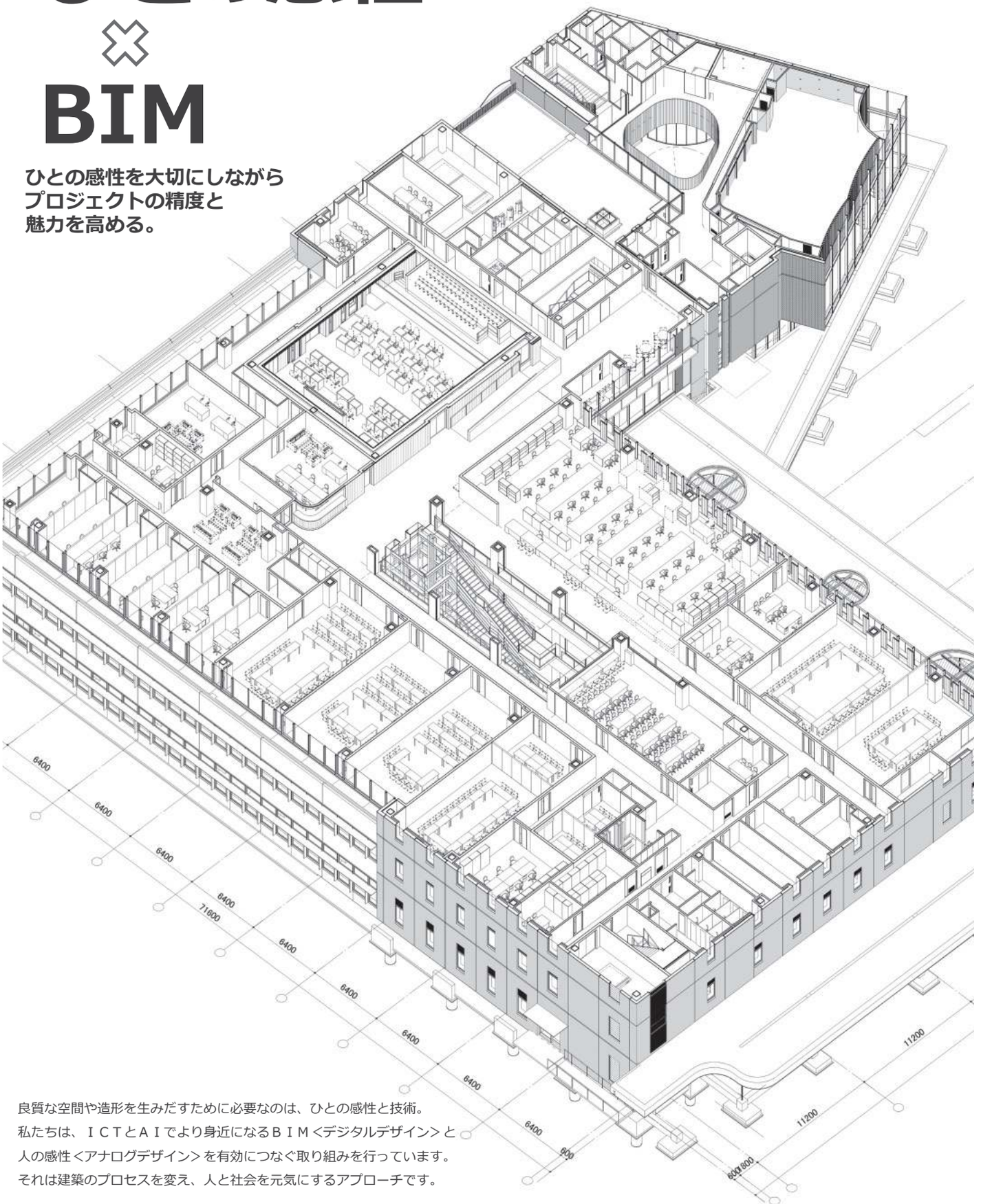
三井住友建設株式会社
URL http://www.smcon.co.jp/

本 社　〒104-0051 東京都中央区佃 二丁目 1 番 6 号
TEL.03(4582)3015

大阪支店 〒541-0041 大阪市中央区北浜 四丁目 7 番 28 号
TEL.06(6220)8712

# ひとの感性
# ×
# BIM

**ひとの感性を大切にしながら
プロジェクトの精度と
魅力を高める。**




良質な空間や造形を生みだすために必要なのは、ひとの感性と技術。
私たちは、ＩＣＴとＡＩでより身近になるＢＩＭ<デジタルデザイン>と
人の感性<アナログデザイン>を有効につなぐ取り組みを行っています。
それは建築のプロセスを変え、人と社会を元気にするアプローチです。

株式会社 安井建築設計事務所

www.yasui-archi.co.jp

COHNAN KENSETSU

# 安心という品質。

最初に人、技術は人なり。
人の気持ちを真ん中にして
安心を建てる。
それが私たちが考える
安心という品質です。
そして、私たちの答えのすべてが
そこにあります。



大阪府豊中警察署　新庁舎

コーナン建設
OSAKA KOBE TOKYO
大阪 06-6456-4311　神戸 078-371-5810　東京 03-5733-3411

「都市・建築・環境」から未来を拓くパートナー

SHOWA SEKKEI

株式会社 昭和設計

本　社　〒531-0072　大阪市北区豊崎 4-12-10　TEL 06-7174-8787
東　京　〒108-0023　東京都港区芝浦 3-16-20　TEL 03-4531-1290
仙台・神戸・九州・上海

http://www.showa-sekkei.co.jp

空気と水の環境エンジニア
SUGA

風は心地よいですか、水はおいしいですか。

オフィス環境の快適を見つめて1世紀。
わたしたちは空気と水のエンジニア、須賀工業です。
ビル設備のご提案を通じて、都市再生のお手伝いを続けています。



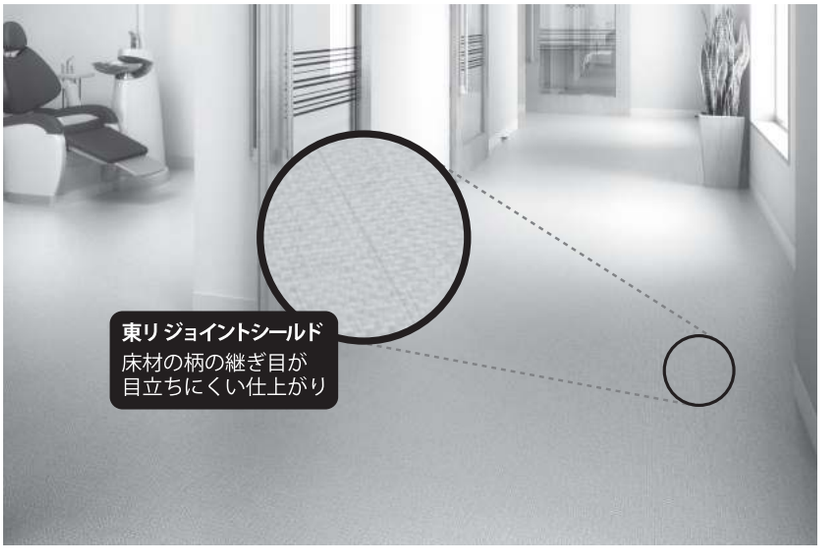
空気調和・給排水衛生設備
創業1901年
須賀工業株式会社
大阪支社　〒550-0001 大阪市西区土佐堀1-2-30
電話　06-6441-5171（代表）
URL　http://www.suga-kogyo.co.jp

創立100周年
おめでとうございます

より美しさを追求した
新継目工法 特許出願中

東リ ジョイントシールド

“継ぎ目の目立ちにくさ”を追求し、床材の意匠を最大限に活かすNWシリーズ（長尺シート）専用、新継目工法。




継ぎ目が
目立ちにくい

継ぎ目に汚れが
溜まりにくい

安心の
強度・耐久性

施工方法が
シンプル




〈対象商品〉東リ NWシリーズ（長尺シート）
◎ ノンワックスリュームNW
◎ ホスピリュームNW
◎ SFフロアNW（2.8㎜品）
◎ マチュアNW

NW NO WAX

専用ノズルで
簡単施工！



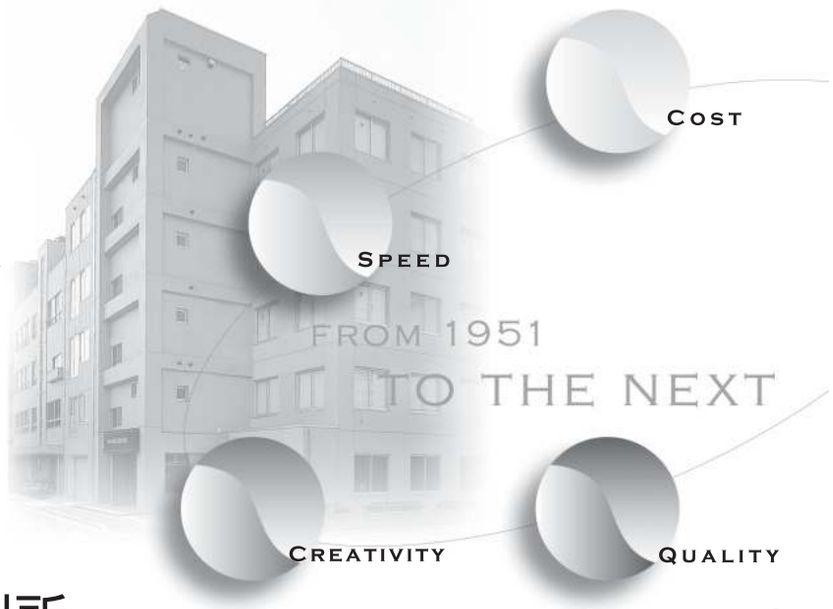
フルセット
5,000円/セット（税抜き材料価格）
※液セット、替え針セットも有り。

TOLI
http://www.toli.co.jp 東リ株式会社

# お客様の抱える問題やニーズに
# より速やかに、より丁寧に対応できるために

「クリエイティブであること」
「ハイクオリティであること」
「少しでも早い納期であること」
「ローコストであること」

全て同時にクリアすることは容易なことではありませんが、そのニーズにお応えするのが私たちの役目。
まずは私たちにご相談ください。
必ず、お役に立てるはずです。




株式会社 中島弘文堂印刷所
http://www.n-kobundo.co.jp/

大阪本社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号　TEL.06-6976-8761／FAX.06-6976-8765
東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1-4-2風雲堂別館ビル2F　TEL.03-3526-5580／FAX.03-3526-5582

モリソン
## 導水システム天井
天井裏の漏水を導く



MORSON
## 森村金属株式会社

| | | | |
|---|---|---|---|
| 大阪本社 / 工場 | 〒578-0912 大阪府東大阪市角田１丁目８番１号 | TEL. 072-962-7321 | FAX. 072-965-6954 |
| 東京営業所 | 〒104-0032 東京都中央区八丁堀３丁目7-1 宝ビル本館４階 | TEL. 03-3552-0191 | FAX. 03-3552-0190 |
| 名古屋営業所 | 〒454-0844 名古屋市中川区葉池町１丁目８番地 アクティブサンライズ葉池Ａ号 | TEL. 052-369-2247 | FAX. 052-369-2248 |
| 関東出張所 | 〒286-0225 千葉県富里市美沢７番７号（関東工場内） | TEL. 0476-93-7923 | FAX. 0476-93-7924 |
| 九州出張所 | 〒812-0016 福岡市博多区博多駅南１丁目7-22 ブックローン福岡ビル４階Ｂ号 | TEL. 092-432-8619 | FAX. 092-432-8620 |
| 関東工場 | 〒286-0225 千葉県富里市美沢７番７号 | TEL. 0476-90-0031 | FAX. 0476-90-0032 |




建築文化を創造する
株式会社ユニオン www.artunion.co.jp

本社・大阪 〒550-0015 大阪市西区南堀江2-13-22 tel 06-6532-3731　東京支店 〒135-0021 東京都江東区白河2-9-5 tel 03-3630-2811　名古屋営業所 〒454-0805 名古屋市中川区舟戸町3-20 tel 052-363-5221

「人」、「社会」、「地球環境」との共生

IAO竹田設計
http://www.iao.co.jp

代表取締役社長　金峰鐘大

株式会社ＩＡＯ竹田設計

| | | | |
|---|---|---|---|
| 大阪事務所 | 〒550-0005 | 大阪市西区西本町 1-4-1 オリックス本町ビル | TEL:06-6532-8700 |
| 東京事務所 | 〒101-0054 | 東京都千代田区神田錦町 3-1 オームビル | TEL:03-6834-2581 |
| 名古屋事務所 | 〒460-0003 | 名古屋市中区錦 2-13-30 名古屋伏見ビル | TEL:052-211-3820 |
| 高松事務所 | 〒760-0071 | 香川県高松市藤塚町 1-2-1 三和高松ビル | TEL:087-837-7725 |

武漢事務所・武漢東芸建築設計有限公司



お客さまに安心と信頼という価値をお約束します

ASAMI
Electric Corporation

浅海電気株式会社 URL.http://www.asamidenki.co.jp/
本社/〒530-0047 大阪市北区西天満3丁目7番4号 TEL.06-6362-8711
本店/大阪・東京　支店/札幌・浜松・名古屋・九州




創ing Tomorrow

株式会社 新井組

本　社　兵庫県西宮市池田町 12-20 〒662-8502
TEL (0798) 26-3111
ＵＲＬ　http://www.araigumi.co.jp/

人も活き活き、地球も生き生き―ユーデコスタイル
Ud & Eco style

ITOKI



SKYFOLD®
Part of the Railtech Architectural Group

会議室・スポーツ施設・宴会場などに適した
電動式遮音間仕切システム

- 優れた遮音性を発揮
- 柱が不要で間口の広い空間にも対応
- 天井にコンパクトに格納され空間を有効活用
- 床や壁にパネルのガイドは不要
- 静かな昇降動作で振動音など上階への影響なし
- 昇降はスイッチ操作ひとつで簡単・短時間

株式会社イトーキ　東京都中央区入船3-2-10 〒104-0042
お客様相談センター 0120-164177　URL http://www.itoki.jp/

THE FRESH SPIRIT IS EXCITING

王建工業株式會社

代表取締役社長　永　原　穣

―― 都市は文化の記憶装置である ――

- 販売部門　内装材全般・住宅機器
- 加工部門　住宅部材・鋼材加工製品
- 工事部門　建築企画・設計・施工

〒530-0047　大阪市北区西天満4丁目8番17号　TEL (06) 6362−9402㈹
http://www.ohken-industry.co.jp/　FAX (06) 6365−9917

okamura

限界まで薄く。美しく強い。

今日のはたらき方に応え、高いデザイン性と使い心地を両立したカンファレンステーブル



オカムラ
株式会社 岡村製作所 www://okamura.co.jp/

traverse
大型カンファレンステーブル［トラヴァース］

元旦 屋根に夢と技術をのせて



嵌合式大和葺き工法

大和葺 元旦

YAMATOBUKI GANTAN

■ 有効幅と高さが可変式で様々な意匠を実現。
■ 耐久性・防水性に優れた嵌合式。

製造 発売元 元旦ビューティ工業株式会社 大阪支店 ： 大阪市中央区高麗橋2-6-10
TEL (06) 6223-1830 http://www.gantan.co.jp
フリーダイヤル 0120-09-49-39

夢×技=∞ 無限大

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が出会う時
私たちのフィールドは
無限大です。



電気・情報通信・計装・土木・空調
栗原工業株式会社
本 社/〒530-0017 大阪市 北区 角田町 1-1 TEL.06(6313)1101
大阪本店/東京本店/神戸・大阪南・横浜・中部・中国・四国・九州・シンガポール支店

間仕切りの総合メーカー
小松ウオール

お客様と共に、これからも

間仕切の総合メーカーとしてお客様と共に歩んできた小松ウオール、
その豊富なラインナップで、これからも快適環境のあくなき追求にお応えします。



小松ウオール工業株式会社 http://www.komatsuwall.co.jp/
□本 社/石川県小松市工業団地 1-72 ☎(0761)21-3131
□大阪市場開発部/大阪市西区土佐堀 2-2-4 ☎(06)6447-0421
□奈良営業所/奈良市法蓮町 986-2 ☎(0742)26-5751

AXS
axscom.co.jp

株式会社
佐藤総合計画

代表取締役社長　細田雅春

東京本社　〒130-0015　東京都墨田区横網2-10-12　AXSビル
Tel. 03-5611-7201　Fax. 03-5611-7226
地域事務所　横浜・東北・中部・関西・九州・沖縄・北京




省資源・
省エネ・そして
再利用をいつも心に、
人々のさまざまな快適
環境を創り続けてきた
三機工業の精神。地球環境の
これからを問われ始めたいま、
その精神は、多くの新しい技術
に発展し、確実に実を結んでい
ます。総合エンジニアリング
だからこそ可能な品質。それは、
このかけがえのない生命体
と響き合える、本当の意味
での循環型社会を創る
ためのクオリティ
だと思います。

いますぐできること
三機は始めています。

三機工業の精神、総合力は次を始めています。

三機工業株式会社
〒104-8506 東京都中央区明石町8-1
ホームページ www.sanki.co.jp

快適な環境づくりに確かな技術で貢献する

住友電設株式会社

〒550−8550　大阪市西区阿波座2−1−4　TEL 06(6537)3400
http://www.sem.co.jp

信頼と技術で
社会に貢献する

Seibu

http://www.seibu-d.com
西部電気建設株式会社
代表取締役社長　坂上　彰

神戸本社　〒657-0844 神戸市灘区都通４丁目１番１号　TEL. 078-882-4051
大阪支店　〒541-0059 大阪市中央区博労町１丁目３番17号　TEL. 06-6260-7587
姫路支店　〒670-0804 姫路市保城981番地の１　TEL. 079-224-3512

株式会社 双星設計
SOUSEI SEKKEI ARCHITECTS & ENGINEERS
代表取締役社長 中村武嗣
本社 〒531-0072 大阪市北区豊崎2丁目7番5号 新御堂豊崎ビル TEL 06-6373-2281
北陸事務所 〒920-0031 金沢市広岡1丁目5番23号 金沢第一ビル TEL 076-223-5424

株式会社大協建材 DAIKYO KENZAI CO.,LTD.
私達が目指すのは信頼です。

http://daikyo-kenzai.com/
□大阪本社 〒556-0016 大阪市浪速区元町1-13-7 大協ビル TEL 06-6649-4105 FAX 06-6633-4169
□東京本社 〒135-0042 東京都江東区木場2-8-3 CN-2 BLDG.2階 TEL 03-5809-8171 FAX 03-5809-8174
□金沢支店 〒921-8002 石川県金沢市玉鉾4-27 TEL 076-292-7080 FAX 076-201-8040
□名古屋営業所 〒454-0916 愛知県名古屋市中川区川前町66 TEL 052-413-3261 FAX 052-413-3263
■新築事業
シーリング施工、防水施工、地下防水・止水施工、塗装施工、吹付・コーティング施工、点字鋲・障害者設備施工
■リニューアル事業
各種リニューアル施工、各種調査・診断、外壁修繕、復元施工
特殊コーティング、IPH内圧充填接合補強工法、SmartCube

四会連合協定
建築設計・監理等 業務委託契約約款の解説 第3版
◎編著/四会連合協定 建築設計・監理等業務委託契約約款調査研究会
監修/大森文彦 定価4 968円(税込)
平成27年2月改正！－講習会使用テキスト－
建築設計・監理等業務委託契約をもっと理解しよう!

四会連合協定
建築設計・監理等 業務委託契約約款(小規模向け)の解説
◎編著/四会連合協定 建築設計・監理等業務委託契約約款調査研究会
監修/大森文彦 定価2,916円(税込)
平成27年2月制定。
適確な業務委託契約の締結に役立つことを目指した解説書。

株式会社大成出版社 〒156-0042 東京都世田谷区羽根木1-7-11 TEL:03-3321-4131 FAX:03-3325-1888 ホームページ http://www taisei-shuppan.co.jp/

祝 創立100周年
超速硬化ウレタン防水材
QUICK SPRAY クイックスプレー
複雑な形状に、高品質な防水層を、高い施工精度で実現します
DYFLEX 株式会社ダイフレックス 大阪支店
〒531-0071 大阪府大阪市北区中津1-11-1 中津センタービル8階
東京 03-5381-1555 大阪 06-6292-0511
建築材料営業本部／札幌／仙台／新潟／さいたま／千葉／多摩
横浜／名古屋支店／広島／福岡 http://www.dyflex.co.jp


伊江村立多目的屋内運動場（2016年・沖縄県）

## 膜構造・TMトラス

環境改善貢献企業
MakMax
太陽工業株式会社

www.taiyokogyo.co.jp
東京 〒153-0043 東京都目黒区東山3-16-19
大阪 〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-8-4

一級建築士事務所/国土交通大臣許可特定建設業（特-28）第381号
（一社）日本膜構造協会正会員/（公財）日本体育施設協会特別会員
（一社）日本公園施設業協会正会員/光触媒工業会正会員




「きれい除菌水」でトイレ全体のきれいを保ちます。

便器きれい

※イメージです。

ノズルきれい

※イメージです。

においきれい（AH2W・RH2Wのみ）

※イメージです。

※詳しくは当社カタログ、またはホームページをご覧ください。

TOTO技術相談室 電話:0570-01-1010 FAX:0570-01-2111
受付時間:〈平日〉9:00～18:00〈土曜日〉9:00～17:00（日・祝・夏期休暇・年末年始を除く）
専門家コーナー「COM-ET」 www.com-et.com TOTOホームページ www.toto.co.jp

## 日刊建設工業新聞

無料 見本紙お送り致します。

― 激変するビジネスシーンを勝ち抜くために
欠くことのできない『確かな情報』―

建設産業を取り巻く環境は激変しています
企業が直面する経営課題も複雑・多様化
日刊建設工業新聞には、その処方せんと新しい流れを掴む情報が満載
88年を超える歴史と全国版建設専門紙最大の部数
建設産業のオピニオン紙としてこれからも『迅速』かつ『わかりやすい』
情報を提供し産業と企業の発展をサポートしていきます。

お申し込みは、http://www.decn.co.jp/

―紙面紹介―
1～2面 総合ニュース面
3面 企業
4～5面 工事・総合首都圏
～各地方ブロック面～

ご購読の方にはホームページより
オンラインサービスを無料で提供
・入落札、人事情報
・主要企業完成工事高

迅速・的確な経営判断のための確かな情報をいち早くお届けします。

創刊 昭和3年（1928年）10月15日
日刊（土・日曜・祭日休刊）大判10頁建 随時増頁 購読料 1ヶ月9,180円（税込）

日刊建設工業新聞社 事業局 販売開発部
〒105-0021 東京都港区東新橋2-2-10 村松ビル2F tel.03-3433-7152 fax.03-3431-6301

「建設通信新聞Digital」は
・行政資料を格納した「情報キャビネット」
・通達、審議会の内容を解説する「資料解説」
・建設専門紙初の日刊電子新聞「電子版」
などを提供する統合情報サービスです。

## 建設通信新聞 Digital 読者無料

新聞購読料だけで電子版が読めます！

FREE 0120-980-208(通話無料)
http://kensetsunews.jp

日刊建設通信新聞社

気になる記事をメールでお知らせ
ダブルクリックで切り抜き完了
印刷ボタンですぐ印刷

さらに充実有料プラン
過去1年間の検索「電子版活用プラン」
2002年以降すべて「データベースプラン」

最新情報はネットから

検索結果をダウンロードして工事ニュースを手に入れる。
全国の公共・民間工事を満載した日刊全国紙のデータ。
2000年からの情報を時系列に収録。毎週水曜日更新。

https://ugoki.kensetsunews.com/trial

いますぐお試し版!!
お試し版のご利用にあたって登録や認証は必要ありません

建設工事の動き Digital

検索結果をダウンロード、Microsoft Excelで貴社独自のリスト作成

検索結果をひとつずつ……コピペ不要!
新聞記事から切抜いて……手入力不要!

マルエス S 日新

総合防水材料メーカー

# 日新工業株式会社

営業統括部　〒120-0025 東京都足立区千住東 2-23-4
TEL：03-3882-2571　FAX：03-3881-8545
URL：http://www.nisshinkogyo.co.jp/







**日本ＥＲＩは質の高い、多彩なサービスを**
**ワンストップ・サービスで提供いたします。**

全国 34 拠点に拡がる規模とネットワークを活用し、
大阪支店にて全国各地のどんな建物にも対応いたします。
ＢＥＬＳ、エネルギーパス、法適合状況調査等、
新制度についてもお気軽にお問合せください。

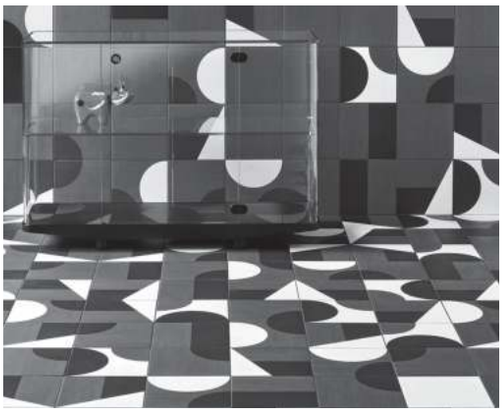
日本ERI株式会社

**大阪支店**　〒541-0041 大阪市中央区北浜 3-6-13　日土地淀屋橋ビル
TEL 06-4706-4556　FAX 06-4706-4558

NIHON SEKKEI

株式会社 日本設計 代表取締役社長 千鳥義典　www.nihonsekkei.co.jp
〒163-0430 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル TEL 050-3139-7100（代）

think 50th



Hi-Ceramics Color&Design　BISCUIT Best Selection of Handmade Tiles　sunclay FIRE & EARTH　AQUAPiA ENJOY BATHROOM EXPERIENCE

確かな目で建築を見つめ、より豊かで快適な住空間をご提案する住まいの総合企業

株式会社平田タイル

■本社・ショールーム
〒550-0011　大阪市西区阿波座1-1-10　TEL06-6532-1280　FAX06-6532-1283
■東京営業所・ショールーム
〒164-0012　東京都中野区本町1-32-2 ハーモニータワー1F　TEL03-5308-1130　FAX03-5308-1131
www.hiratatile.co.jp/

未来へ――安心を創る（つく）

FUJIKI 藤木工務店

本社・大阪本店　〒541-0051 大阪市中央区備後町 1-7-10
TEL (06)-4964-8700(代)　http://www.fujiki.co.jp
支店 / 東京・倉敷・四国・京都

Fujinetsu

空気と水のエンジニア
不二熱学工業株式会社

大 阪 本 店　〒542-0081 大阪市中央区南船場2-1-1
TEL（06）6261-2436
支店営業所　東京・浜松・名古屋・奈良・神戸・福岡・鹿児島
海 外 拠 点　ヤンゴン




キミたちのために、できることがある。


前田建設
http://www.maeda.co.jp

trust of the future

社員一人ひとりの夢を育み
誠実な心と多彩な技術で
社会が求める価値を創造します

Matsumura 株式会社 松村組

大阪本店　〒530-8588　大阪府大阪市北区天満 1-3-21　ﾆﾁﾚｲ天満橋ﾋﾞﾙ　TEL:06-6353-1131
東京本社　〒102-0075　東京都千代田区三番町 2 番地　三番町KSビル　TEL:03-5210-6152
【札幌支店／東北支店／東京支店／名古屋支店／京都支店／広島支店／九州支店】



ワテラス

CALS PALM

http://www.yagiso.com



清風学園

八木惣株式会社

YAGISO CO.,LTD.

【 本 社 】〒593-8322
大阪府堺市西区津久野町3丁28番10号
TEL.072-262-3838 FAX.072-262-0203

【東京事務所】〒140-0001
東京都品川区北品川1丁目16番8号船清ビル603
TEL.03-6433-2930 FAX.03-5461-8377

【山口事務所】〒759-3622
山口県阿武郡阿武町大字奈古2856番地5
TEL.08388-2-0555 FAX.08388-2-0556

『信頼×安心×技術力』を通して
暮らしを支え 明日を創る

八千代電設工業株式会社

代表取締役社長 冨永 昌雄

〒540-0003 大阪市中央区森ノ宮中央1-1-38

TEL 06-6941-6532 FAX 06-6941-7631

支 店：東京 名古屋 営業所：札幌 仙台 横浜 東大阪 羽曳野 和歌山 神戸 広島 九州 沖縄

# 日本建築協会創立100周年記念事業　賛助会員

ご賛助いただきましたみなさま誠にありがとうございました

## 団　体　会　員

㈱IAO竹田設計
㈱淺沼組
㈱朝日工業社大阪支社
浅海電気㈱
㈱アスウェル
アスワン㈱
アズビル㈱ビルシステムカンパニー関西支社
㈱新井組
㈱安藤・間　大阪支店
㈱市浦ハウジング＆プランニング
㈱イトーキ
インビスタジャパン合同会社
㈱浦辺設計
王建工業㈱
大阪ガス㈱都市圏エネルギー事業部
オーケーレックス㈱
大阪工業技術専門学校
㈱大阪城口研究所
大塚オーミ陶業㈱
㈱大林組
㈱岡村製作所
㈱小笠原設計
㈱奥村組
鹿島建設㈱関西支店
ガムスター㈱
㈱カワサキライフコーポレーション
関西電力㈱
元旦ビューティ工業㈱
キムラ硝子建材㈱
旭日電気工業㈱大阪支店
㈱きんでん
㈱熊谷組　関西支店
栗原工業㈱
㈱建研 大阪支店
株式会社建築資料研究社
㈱鴻池組
コーナン建設㈱
㈱佐藤総合計画　関西事務所
三機工業㈱関西支社
サンセイ㈱
三宝電機㈱
三和電気土木工事㈱
清水建設㈱関西支店
㈱昭和設計
須賀工業㈱
住友電設㈱
㈱精研
㈱総合設備コンサルタント大阪事務所
㈱双星設計
総合資格学院　関西本部
㈱大建設計
大成温調㈱大阪支店
大成建設㈱関西支店
大鉄工業㈱
太陽工業㈱
タキヤ㈱
㈱竹中工務店
田島ルーフィング㈱大阪支店
㈱地域計画建築研究所大阪事務所
TOTO㈱
㈱東畑建築事務所
東リ㈱
㈱トーエネック大阪本部
戸田建設㈱大阪支店
ナブコドア㈱
南海辰村建設㈱
西松建設㈱西日本支社
㈱日刊建設工業新聞社
㈱日刊建設産業新聞社
㈱日刊建設通信新聞社
㈱日建設計
日新工業㈱大阪支店
㈱日積サーベイ
日本ERI㈱
日本コンクリート工業㈱大阪支店
㈱日本設計　関西支社
野村建設工業㈱
㈱ハーテック
阪急設計コンサルタント㈱
パナソニック㈱
㈱平田タイル
ヒロセ㈱大阪本店
藤井建設㈱
㈱藤木工務店
不二熱学工業㈱
フジモリ産業㈱
文化シヤッター㈱関西支店
前田建設工業㈱関西支店
㈱前田商会
㈱松村組
丸五基礎工業㈱
三井住友建設㈱
望月建設㈱
森村金属㈱
八木惣㈱
㈱安井建築設計事務所
八千代電設工業㈱
山岡建設㈱
㈱ヤマネ
㈱山本組
㈱ユニオン
龍建設工業㈱
㈲柳々堂
YKK AP㈱

# 個 人 会 員

赤木 隆
浅井 謙
居内章夫
板垣美一
伊藤俊志
伊藤俊夫
稲垣和江
稲毛政信
井上雅嗣
井上雅祐
上原正行
大井昇二
大賀浩輔
太田原克則
大村鐵太郎
越智文篤
尾野本悟
梶山卓二
加藤武範
河合止揚
川島克也
河田克博
河原輝雄
久我洋一
久保清一
粂井弥平
黒川暢一郎
黒田征四郎
桑原悠樹
香西喜八郎
河野学
小山将史
坂本勝比古
坂本啓子
佐々木栄

佐藤東亜男
佐野吉彦
澤田純一
澤田宗久
設楽貞樹
柴野晶子
昇勇
杉本浩
瀬戸本淳
僊石友秋
髙田光雄
髙松隆夫
多胡進
玉置卓男
玉水新吾
千種幹雄
恒成恒
寺岡宏治
土井敬三
徳岡昌克
豊田充広
中井進
中尾勝悦
中島健二
永島敏郎
永田久子
長友理津子
中西広樹
夏原晃子
西田忠光
西村清志
二宮利治
沼田亘
野口桂三
野村浩之

橋寺知子
長谷部朔郎
林新一
平井勇
平尾和洋
藤城義丈
藤山宏
舟橋國男
本多友常
前川治彦
前田衛
馬渡勝昭
溝神宏至朗
美濃吉昭
村上幸三郎
村重保則
元廣清志
森粛之
森暢郎
森口雅文
盛田輝勇
森本勉
門谷和雄
山形政昭
山下修司
山本俊輔
横田隆司
吉田勝美
吉永規夫
芳山明久
和田康由

（敬称略 50音順）

**お客様の抱える問題やニーズに**
**より速やかに、より丁寧に対応できるために**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本　　社　〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761／FAX.06-6976-8765

東京支社　〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580／FAX.03-3526-5582

**http://www.n-kobundo.co.jp/**

地球環境を守り、100年建築に貢献する

**NACL** のアルミ表面処理

株式会社日本電気化学工業所

http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp

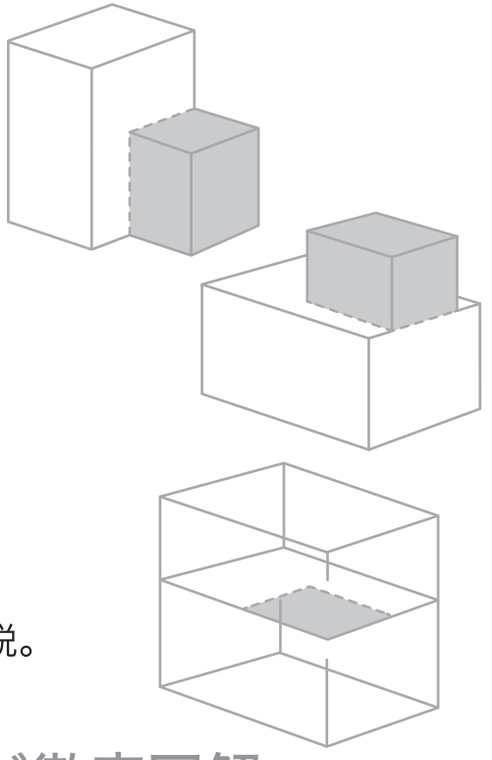
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

図解 一発で通す！

# 確認申請

## Q&Aでわかる新築・増改築のポイント



**日本建築協会　企画**
野口　元・平沢隆志・仲本尚志 著

定価 本体3200円＋税
B5判・192頁

増改築・リニューアル関連のポイントも手厚く解説。
申請業務の効率化と提案力のアップに必携の一冊。

申請する側＆審査する側のプロが徹底図解

学芸出版社

〒600-8216　京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
TEL 075-343-0811　FAX 075-343-0810

E-MAIL info@gakugei-pub.jp
HP http://www.gakugei-pub.jp/



The Architectural Association of Japan

1917−2017

建築と社会　2017.3　Vol.98　No.1140　一般社団法人 日本建築協会　〒540-6591 大阪市中央区大手前 1-7-31　電話:06-6946-6981　FAX:06-6946-6984　http://www.aaj.or.jp　定価 1,230円(税込)

雑誌　03379-3